
大怪獣ゲスラ

ロッカ&参照太夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大怪獣ゲスラ

【Nコード】

N1795R

【作者名】

ロッカ&参照太夫

【あらすじ】

さて、第6話【元禄カエサル編】から、第7話【モノリス】を経て、帰ってきた友和と、aタイプを待っていたものは……？
まあ、待ってたのは、エンタメさんだったのだが……。

それはともかく、【江守友和の冒険】第8話は【大怪獣ゲスラ】であります。ギエエエエー！ とディレイの効いた咆哮で、始まり始まり。

【モノリス】

小学5年の時だった。

同じクラスに気の合うオタク仲間が4人いて、へたっぴいなマンガを描いたり、無線通信キットを作ったり、アホらしい遊びを考えたり、いつも一緒に遊んでいた。

ちなみに、当時はオタクという言葉はなかった。

しかし、SF好きで、マンガ好き。

それから超安カメラ。これは激安というのとは意味が違う。

くじのオマケとか、多々存在する不思議な流通品だ。

バッタ品と呼んでいた。プラスチックレンズのカメラで500円とか800円で買える。

映りだって、オリンパスペンシリーズなんかの1万円クラスのカメラに引けを取らない。

しかし、デザインが、旧ソ連風とでも言おうか……かなりカッコ悪いから、他人に見せるのが、ちよつと恥ずかしい。

変なモノ好きで、機械好きで、オカルト好きのウンチク好きだから、ヨースルニ、オタクだった。

ムカシだから、番長みたいなのがいた。

コイツは多数派の親分だった。

この番長の取り巻き（今風に言うと、パシリ）の一人、丸夫って奴が、何かという和我が4人組を、めのかたきにしていた。

番長を敬^{うやまつ}わないで、シラツとした態度で接するのが、しゃくにさわるのだ。

ある朝、教室の中、丸夫が、新聞（？）の切り抜きを持って、わざわざ見せにきた。

切り抜きには、

『太平洋上を飛行中の未確認物体は？葉巻型母船？の可能性が高く、米空軍が追跡中。このまま進むと日本列島に到達する模様。自衛隊は未確認物体の飛行コースを割り出すべく……』

と、こんな感じの記事だった。

うっすらとした葉巻型母船の写真も掲載されていて、我々4人は、にわかに色めきたった。

まさにその瞬間、丸夫は、その切抜きをひったくり、ストーブに放り込んだ。（ムカシの寒いイナカだから、薪ストーブをガンガン燃やしていた）

「あー！」

と我々が叫び声をあげると、丸夫は、さも痛快そうに、

「うっひゃっひゃっひゃっ」

と笑った。

「おい丸夫！ 今のはどこの新聞なんだ？」
と聞くと、

「知るか！ クソバーカ！」
と答えた。

その後、我々の懸命な調査にも関わらず、その記事は発見できな

かった。

「ありゃ確かに、新聞紙っぽかったよな」

「ザラ紙（少年マンガなど）でも、ワラ版紙（学級新聞など、ガリ版刷りで使う）でもなかったよ」

「ヨタ（ガセネタの意）かな？」

「シカシなあ……（捏造は）無理だろ？」

パソコンもワープロもない時代だ。

『ムー』みたいなカルト系の雑誌も、まだ存在しない。
我々は本当に悩んでしまった。

悩んでいた4人組の中に、今も付き合っている樺山かばやまとヘス（あだ名です）がいた。

笑っちゃうほど長い付き合いなのだ。

もう一人は、お亡くなりになった。イイ奴だった。合掌。

現在、樺山には、拙作のキャラクター？参照太夫？の画を描いてもらっている。

ヘスとは一緒にバンドをやっている。

後年、ヘスが言った。

「丸夫の親父ってな。組合の、イットーエライさんで、あすこんちにゃ和文タイプライターなんかもあったんだって」

「じゃ、あの記事は、やっぱり丸夫が作ったって訳か？」と私。

ヘスが言う。

「丸夫ってさ。番長の注文で（頭ゲシゲシこづかれながら）ムキムキマンばっか、描いてたよな。アイツ、画が上手かったんだ。？葉巻型母船？な。アレだってシコシコ描いたんじゃないか？」

番長は、プロレスラーみたいな男の裸の画が大好きだった。（筋肉マンはまだ無い）

10本に1本くらいの割合で、オナナの画（水着でポーズとか…：たいしたモンじゃないが）を描かせては、「にへへ」と喜んでいた。

喜びながら、テレ隠しに「このシケベが！」と言って、更に丸夫の頭を小突くのだ。

トーゼン周りの女の子は、丸夫にケーベツの視線を向ける。

こんな時、お抱え絵師の丸夫としては、パシリの悲哀をかみしめていたのだろう。

「そーか！ 丸夫こそ、本物のオタクだったって事だ。実は、俺達と遊ばなかった…。」と私。

「いや、むしろ、お前らの？オタク度？なんて、俺に比べりゃ？大甘？だって、言いたかったんじゃないか？」

とヘスが言った。

S Fにまつわる思い出を一席。デシタ。

統一馬鹿理論

「VF型時空機は地球に向かって飛行していた。

aタイプは惑星温泉土産の、温泉饅頭をパクっている。

ハイパードライブでさっさと帰るのも良いのだが、友和にしてみれば、せっかくだから、太陽系の惑星くらいは肉眼で満喫したかったのである。

そんな訳で左舷のシャッターを開け、強化ガラスの窓越しに土星の輪を、更には木星の大赤斑を觀賞する友和であった。

「感激だなあ。中学の頃に『2001年宇宙の旅』って映画が公開されてね。――

まるっきり訳が解らん映画だったけど、不思議な感動があったな。そうそう、それから、シューメーカー彗星ってのが串団子みたいに木星に連発で衝突した事があった。

あれにはショックを受けたよ。

善行から聞いたんだけど、一発当たりの衝撃が、ゆうに地球が崩壊する何倍ものエネルギーだって言うんだ。

凄いやな。

シュミレーション画像を見ると、本当に地球なんてイチコロだっけ解るんだ。

考えると気が遠くなっちゃう。

人間なんて、その地球の上のバイキンみたいなもんだよな」

「むん、むん、むん、むん」

温泉饅頭を食べ終えて、今度は串団子を頬張りながら相槌をうつ、甘い物が底抜けに大好きなaタイプなのだ。

「しかし甘い物、よくそんなに、いっぱい食えるな。見てるだけでこっちまで甘ったるくなる」

「ほもはふはん、まほのほほ、ふん、ゴックン、ヨウカン」とaタイプが目を白黒させながら言った。

「ヨウカンがどうした？ まだ食い足りないのか？」

「違うの、友和さん窓の外見て。本当に大きなヨウカンみたい」

窓の外には巨大な木星を背景に、あの『2001年』でお馴染みの、まるで高級羊羹のような「モノリス」が映画と同じように浮かんでいるではないか。

まるで黒糖ヨウカンのような、純練りヨウカンのような、哲学的で旨そうな、あのモノリスなのだ。

——大変だ！

——考えるんだ友和！ いったいどうしたらいい？

——そのうちにモノリスがピカーと光ったら、

——百万光年もぶっ飛びワープの果てに、一生をビクトリア朝の貴族の部屋のような、それでいて病室のようでもある高級な牢獄の中で、監禁生活の果てに、老衰して死んだら、スターチャイルドに生まれ変わるなんて、まったく、なんて訳が解らん話だ！

——冗談じゃないぞ！ まだしも特異点として、ぶっ飛びながら生きて行く方が余程マシじゃないか！

それにしてもキューブリックは凄い映画を作ったものだ。
これが1968年の映画なのだ。

まだSFXの時代じゃないのにリアルな画面であった。」

そのモノリスが、窓の外で☆ピカーと光った。

友和とaタイプは恐怖のあまり抱き合った。

「aタイプ、もう駄目だ!」――

子作りしか楽しみのない二人っきりの監禁生活の果てに、
お前はスターチャイルドを産み落とすのか?
ところでスターチャイルドって、ありゃ一体何なんだ?」

その時、船内に男の声が響き渡った。

「わっはっはっは、こんな綺麗なお嬢さんとなら、わしなら監禁されてみたいよ」

ああ、なんとヌルいスペオペみたいに、禿げ頭の白ひげジジイが
機内に入ってきているではないか。

白衣を着てサンダル履きで、おまけに水戸黄門のような杖まで持っている。

懐かしの『スター・トレック』も『宇宙家族ロビンソン』もゲストの宇宙人達は、宇宙空間の中を、いともたやすく宇宙船内に勝手に入ってくる。

つまりSFではそういう事が当たり前なのだ。

「お前は、マッドサイエンティストだろう？」
と友和が叫んだ。

「マッドは余計じゃ馬鹿者がっ」

——ゴッソッ！

杖で殴られてしまった。

「痛ってて何すんだっ！」

ジジイはaタイプに、にじりよって、純練りヨウカンを差し出した。

aタイプは嬉しそうに受け取っている。

「なかなか入ってこないから、こっちから来ちゃったぞい」
ジジイは身をくねらして、流し目でaタイプを見ている。

「あー解った。ジジイお前、人違いしてるぞ。aタイプ違いだ。助平ジジイ暴力ジジイ！早く出て行け！」

と友和がまくし立てる。

「ありやりや？ 星間デリヘル、ミルキーウェイのaタイプじゃないのかったの？ こりゃ失礼したの。残念じゃの。どっこいしょ」（蛭民意の尊重 参照。）

言葉とは裏腹に椅子に腰を下ろして、くつろいでいるジジイなのだ。

「あー、大ぼけジジイ！ さっさと帰れよ」
タンコブをさすりながら、友和は怒っている。

aタイプが切り分けたヨウカンとお茶を運んできた。
「友和さん、そんなに邪険にするもんじゃありません。ね、ボイン
シュタイン博士」

博士は旨そうにお茶をすすった。

「ほう、わしの事を知っておるのかね？」

aタイプはきおつけの姿勢をとった。

「はい。士官学校で先生の、時空航法における統一馬鹿理論を学び
ました」

博士は驚いた様子だ。

「はて？ aタイプが士官学校にの？ 覚えておらんの。で、どう
だった？ わしの講義は？」

aタイプは直立不動で答える。

「はい。難し過ぎたので、覚える前に忘れました」

「ま、いいじやろ。パイロットで理解できる奴は十万人に一人程じ
や。気にする事はない。しかしaタイプが士官学校にのう。わしと
もあろう者が見逃すとはのう」

「はい。博士はど助平との噂でしたので、上官の女性士官に、つけ
髭をつけられて男性に化けさせられたのであります」

「なんと、そうであったか。うかつじゃった。今度講義を頼まれた
ら、事前にしっかり、セックスチェックをしてやろう」

「あ、博士、私がバラしたって言わないで下さいね。軍にaタイプはいないから、私が教えたってバレちゃいます」

ボインシュタイン博士の目じりが垂れ下がった。

「うふふふ、魚心あれば水心じゃ。どうじゃわしとあのモノリス号へ行って相対（相体）性理論の実験をしようではないか」

「えーいこの助平ジジイ！ もう許さん！」

友和は太極拳のポーズをとった。

「わははは、許せ、許せ、老い先短い老人の戯れ言じゃ」と博士はベロをだした。

このボインシュタイン博士は、銀河系世界最高級の頭脳の持ち主であつた。

銀河系世界を時空機が飛び回り、パラレルワールドから元の世界に帰還できる、時空航法の基礎理論こそが、この統一馬鹿理論なのである。

巨大惑星アポカリプス星の245ヶ星系軍士官学校は、aタイプにとつて懐かしくも大切な思い出であつた。

朝からの飛行実施訓練を終えての午後の理論講義は、いつでも必ず眠気をもよおした。

パイロット達にとって、ボインシュタイン博士の、老人らしからぬ情熱的な講義は、さながら子守唄のようであつた。

「時空航法とは、言うなれば、飛んでいるのではなく、全ての（場）を引っ張り寄せてお

るのじゃ。――

つまりパラレルワールドから、何からかにまでを引っ張り寄せるのじゃ。

そして放り投げる。

これこそが統一場化理論ばかなのじゃ。

更に発展型になると、（場）をわしづかみにして、引っつかみ、こね回し、手頃な大きさに丸めて、時空の壁にぶっつけて、跳ね返ってくるところをキャッチするのじゃ。

この場合ボールとは、銀河系全体の事じゃ。

ボールの画く軌道の、全ての瞬間点こそがパラレルワールドなのじゃ。

これこそが、最新式ハイパードライブにおける（発展型統一場化理論）の数式である」

博士は黒板に難しい数式を書いて行く。

aタイプは一生懸命、数式のメモをとった。

何度考えてみても意味が解らず、理解する事は断念した。

だがその数式は、お守りとして小さなキューピーのロケットに入れて、認識標と共にいつでも胸に下げている。

「ここまでくれば（発展型統一場化理論）の数式は、もはや（統一馬鹿理論）とでも呼ぶべきものじゃろう。

何故なら、あらゆる矛盾を踏み越えて、人知を遥かに超えておる。

現在、宇宙の真理にもっとも近い理論が、この『統一馬鹿理論』なのじゃ！

ちんぷんかんぷんであったが、解らないなりに面白い講義であった。

士官学校時代の思い出がよぎるaタイプは、甘えの許されない軍隊で、とにかく一生懸命やってきたのだ。

そもそもaタイプクローンは、銀河系世界に潤いと幸せを与える為に生まれて来る。

？明るく可愛いく清潔に？

をモットーに、コロニーで育つaタイプは、自然、サービス業に従事する者がほとんどだ。

aタイプ中尉は殻を破ったのだ。

同じような顔をしているaタイプクローンでも、痩せ形、肥満形、がっちり形、色っぽくねくね形、身長だって、のっぽもいれば、ちびもいる。

ピンク色の毛髪だって微妙に違うのである。

aタイプのセオリーから抜け出したいaタイプも、少数ながらもいるのだ。

aタイプ中尉はそんなaタイプ達の、先達になりたいのかもしれない。

いや、実はそんな大それた野望は、彼女にはないだろう。

しかし、結局、彼女の歩む道は、aタイプ達の将来を大きく切り開いて行く事になるのだ。

245ヶ星系軍軍人として、様々な経験を積んで、

「いつの日にか、フェロモン号のような巨大艦を自由自在に操る、

「一等行宙士になりたいな」

と考えるaタイプ中尉なのである。

可愛いらしいaタイプクロードだからこそ、誰にも負けたくない
のであった。

モノリスへの招待

純練りヨウカンを食べ終えたボインシュタイン博士は、二人をモノリスへ招待してくれた。

全長600メートルの「モノリス号」の中は、快適な自然環境の別世界であった。

勿論、『閉じられた空間』になっているから、その膨大な空間の体積ときたら……。

人工太陽の空の下、広々と続く草原。ゆるやかなスロープが気持ち良い。

しかも驚いたのは、青い顔や黄色い顔の子供のような体型の連中が、サッカーに興じている事だった。

水光栽培人種、ザクロマンといった。

「完全栄養果実を作るつもりじゃったんじゃ。——
誰もが安く買える完全食物じゃ。」

ところが在る日、突然知性を持ってしまった。

わしはとりあえずザクロマンと名付けた。

ザクロの研究が元になっておったのでう。

ザクロマンはモノリスの学習プログラムを勝手に使って、あつという間に人間並に進化しおった。

今ではわしの助手として働いておるのじゃ」

友和達は草原を歩いて行く。

なだらかな丘の上の大きな株の周りでは、真っ赤に完熟したザクロマン達が並んで横たわる。眠っているようだ。

一人の黄色いザクロマンが話しかけてきた。

「我々は水光種なので、水と光さえあれば何処でも繁栄出来ます。

個体の寿命は短いのですが、大きな株に記憶や自我を吸収させ保存して、新しい果実として生まれ変わって生き続けるのです。

現在、完熟ザクロマンの缶詰を売り出す計画が進められています」

「完熟って……、ようするに、あんた達の死体じゃないか。とても食う気になれないよ」

と友和。

「あらそんな事言ったら牛や豚のお肉だって死体でしょ。私は美味しそうだと思うな。完熟ザクロマン」

とaタイプが言った。

「美味しそう、ああ、美味しそうとか、旨そうとか、甘そうとか、その言葉が一番嬉しいんです。エキスタシィを感じちゃう。完熟へのスピードが早まる感じで素敵な気分」

心なしか、赤みがさしてきたザクロマンである。

「我々もせっかく知性を持ったのです。完熟ザクロマンの研究ばかりじゃない。だから微力ながら、博士の研究のお手伝いをさせて貰ってます。素晴らしい研究です。『宇宙創生』の研究なのです！」

興奮の為、益々赤みがかってきたザクロマンである。

じっと見ていたaタイプが話しかけた。

「だんだん甘そうになってきたわ」

「う、嬉しい」

「本当に美味しそう」

「も、もっと言って」

見る見る赤くなるザクロマンである。

「だいぶ甘そうになったわ」

「きゃ、嬉しい」

「甘い香りが漂ってきたわ。もうすぐ完熟ね？」

「うわっうわっ嬉しすぎる」

「美味しそう。食べ頃になったわ。一口いいかしら」

「うひい、もう駄目！」

こう言うなり、すっかり真っ赤に完熟したザクロマンは、大きな株の傍へ走って行って、他の完熟ザクロマン達の間横たわり、眠ってしまった。

「きゃははは」

とaタイプは大笑い。

そもそも女とは、何時でも何処でも、宇宙においても、やはり小悪魔なのであろう。

「博士、『宇宙創生』って、……惑星開発をやってるんですか？」
と友和が尋ねる。

「いやいや、文字通り『宇宙創生』の研究じゃよ」

ボインシュタイン博士は、新たな大宇宙を創り出すと言った。

「そんなに難しく考える事ではないのじゃ。――

この宇宙にしたって、誰かが造ったものかもしれんのじゃ。

実は、最近あちこちで、宇宙創生期の痕跡が発見されておるのじゃよ。

もうじき宇宙というものの基本概念も、飛躍的に変わる事になるじゃろう」

「稀有壮大だなあ。――

そうだ、博士みたいな大天才なら解るかもしれないな？

『特異点』っていったいなんですか？」

「ほほう。君は特異点なのかね？」

「ええまあ、そうらしいんですけど……」

博士は、まるで懐かしいものを見るような顔をして言った。

「あっちこっち無責任にすっ飛んで行って、冒険をする。……特異点か……男の夢じゃ。……羨ましいのう」

「友和さん、そろそろおいとましましよ」
とaタイプが言った。

——そうだ。子^こノ渡市^{わたし}に帰らなきゃ……。

新しいマンションでaタイプと、夢のような新生活が始まるのだ。
お土産に完熟ザクロマンの缶詰をいっぱい貰って、aタイプは上
機嫌だ。

こうして、VF型時空機はモノリスを後にした。

仲恵とナミちゃん。

鳥飼分室長と佐野瓜子。

ジャックのマスターとロリ山田。

王先生と弟子達。

そして、善行と美那子の暮らす、子^こノ渡市^{わたし}を目指して、宇宙を飛
んで行くのだ。

月の裏側を回っていよいよ地球へ向う。

友和は、窓の外いっぱい広がる月面を、窓ガラスにへばりつい
て見ている。

「こんなに近づいて見ると、アポロのアームストロングの足跡が
見えそうだな」

鼻歌を歌いだした。

「お月様は青いよー青いお月様は悲しいよー悲しいから俺は泣くー
うおーうおーうおーうおーうおーうおーうおー」 と泣くんだよ うおー

うお〜」

「あ、その曲、エステボーヨシユキのテーマソングね」とaタイプが言った。

「阿呆ぬかせ。これは『ブーフーウー・三匹のこぶた』の曲だ。子供の頃好きだった『おおかみさんのテーマソング』じゃないか!」

「うそじゃないもん!」

と、aタイプは譲らない。

その時、機内のスピーカーからスローなエイトビートの曲が、重く切なく流れてきた。

《ずんちゃちゃ・ずんちゃ・ずんちゃちゃ・ずんちゃ・ハイ・お月様は青いよ〜青いお月様は悲しいよ〜悲しいから俺は泣く〜……》

「え? そんな馬鹿な……」

と友和。

「ね。そうでしょ」とaタイプ。

《ハローハロー特異点のダンナ、俺だ、エステボーヨシユキだ。カエサルは無事、『お宝惑星』に到着したぜ。アポロニアと世之介も此処で一緒に暮らすんだとさ》

「わざわざ報告してくるなんて律儀な奴だ。ところで、エステボー、宙賊稼業はもう止めたのかい?」

《わははは阿呆ぬかせ！　ところで俺、今、『お宝惑星』のひょうたん島って小島にいるんだ。カエサルが、アレキサンダー大王の住んでる所に行きたいって言うから、捜してやって、連れてきてやったんだ》

「へえ、アレキサンダー大王もいるのか？」

《ああ、すっかり土地のサーファーになっちまってるけどな。此処じゃ素潜りのチャンピオンだそうだ。ダンナによろしくって言うってたぜ》

「え？　俺の事か？　なんで？」

《ああ、だから連絡してるんだ。――

この辺の奴らはな、ほとんどダンナが連れて来たらしい。

まあ、乗っけてきた時空船は、フェロモン号とか、俺のステップンウルフとか、色々らしいんだがね》

「どうゆう事だ？　俺は知らないよ」

《つまりダンナが、これから、あっちこっち行って連れて来るって事なんだよ。それが？　特異点の使命？　ってやつなんじゃないのか？》

「？　使命？　なんてもんが、あるって事なのか？」

《あははは。そういう事みたいだな》

「それじゃ、この先も、ずっと、すっ飛びまくるって事なのか？」

《そういう事だ。俺だって驚いてるんだ。――

さつき、坂本竜馬って土地の漁師に「ひさしぶり」って挨拶されたんだ。

どうやら俺がステッペン・ウルフで連れて来たらしいんだ。そいつもダンナが助けたらしいぜ。

特異点友和とaタイプによろしくって言ってたからな》

aタイプも驚いた。

「私もなのー？」

「そっちには、そーゆーのが何人もいるのか？」

《ああ。今夜、坂本竜馬の家でカエサル歓迎会をやるそうだ。俺も呼ばれたから行くけど。ダンナが助けた連中が、二十人以上は来るそうだ》

「そんなにいるのか？」

《ひょうたん島だけの数なんだぜ。『お宝惑星』全体だと、いったい何人いるやら？ 惑星から出ちゃった奴だっているんだ。つまり、ダンナの、この仕事は、まだまだ始まったばかりって事だ》

「……せっかくaタイプと、心安らかに暮らすつもりだったのに」

《まあまあ、特異点のダンナ、コスメが鳴ったら真っ先きって駆けつけてやるぜ。それが俺たち時空船船長の、名誉ある義務ってもんだ。いつでも呼んでくれ。じゃあな》

aタイプは興奮している。

「凄いわ友和さん。やっぱり宇宙意思だったのよ。カッコいいわあ。私も活躍できるのね」

「なんてこった。これが、仕事だって考えると、……うんざりするなあ」

ともあれ、子ノ渡市へ帰って、ヤキトリで一杯飲みたい友和であった。

【モノリス】

おわり

【大怪獣ゲスラ】

日の出とともに怪獣が現れた。
ごく当然のように現れた。

aタイプが叫んだ。

「うわー！ おっきい！ 友和さん起きて！」

「むにゃむにゃ……なんだよう……怪獣でも……出たのかよ……」
友和は寝ぼけている。

エンタメも興奮して叫ぶ。

「ダンナ！ 起きろ！ あれを見ろ！」

体長は30メートル程。

ゴジラや他の主流派の怪獣たちのような、50メートル級のヤツじゃない。

「サンダ対ガイラ」のような30メートル級のヤツだ。

出没湖の中央に位置する流木島から、のっそりと巨大な姿を現して、下流の鶴田川までザンブ、ザンブと歩いて行く。
湖面が大きく波打った。

「おっほー！ 出たな！ 位置取りが良かったな。此处はベストポイントじゃないか！ 目が覚めたア」

と友和。【ゲスラ出現】

【江守友和の冒険】 今回はいよいよ怪獣モノでありんす。

ゴジラ出現から半世紀以上。怪獣は我々日本人の伝統であり、サ
ブカルチャーの筆頭株主のようなものでありんすな。

手に汗握って執筆するロッカの鼻息も荒いでありんす。

途中で投げ出したりする時もありんすが、なあに、これだって、
手法の一つでありんす。（ホントか？）

ロッカとみども（参照太夫）が挑む、SFスペクタクル巨編。そ
の名も【大怪獣ゲスラ】が始まるでありんすよ。

aタイプの年齢……うわっ、考えちゃいかん！

友和とaタイプの乗るVF型時空機は、地球の日本の、そして東京の子ノ渡市わたしに戻ってきた。

もちろん、出発した日と同じ？時空間？に。

上空にホバリングしている機内で、友和が興奮している。

「おおっ着いた着いた。子ノ渡市の夜景だ！ 駅が見える。電車って結構綺麗なもんだな。――

レオ子ノ渡は空から見ても、さすがにでかいな。

おっ、太田ビルが見える。会社も見えるよ。モンローの看板にラブホ・セーヌの看板だ。

ははは空から見てるんだ！ 凄い、こいつあ凄いな！」

銀河系宇宙を飛び回ってきたくせに、飛行機にもヘリコプターにも乗った事のない友和は、子供のようにはしゃいでいる。

aタイプが言った

「もうすぐよ。屋根から飛び出して来るわ」

はたして滞空しながら待っていると、子ノ渡文化会館の屋根に、ポツカリとまん丸い穴を開けて、VF型時空機が凄い勢いで、外宇宙目指して飛び出して行った。

宇宙蛭との戦いを終えた友和とaタイプ、それにエンタメ大佐が、「惑星温泉」目指して飛んで行ったのだ。

「あははは。選手交代って感じだな」と友和。

aタイプは巧みに操縦桿あやつを操り、子ノ渡文化会館の屋根に開いた丸い穴を通して、展示場の中にゆっくりと機体を降ろした。

「これで振り出しに戻ったって訳だ」と友和が言った。

さっそくハッチを開けると、なんとあのダミ声が聞こえてきたのだ。

「よう、お二人さん、グッドタイミングだ。さすがだねえ」

エンタメこと銀河連盟軍情報部の、遠藤為五郎大佐が待っていた。「ダンナ、宴会の最中に突然消えちまったと思ったら、古代ローマへ行ってカエサルを助けたんだってな。特異点、暇なして訳か？」

元々、小肥りのエンタメは益々太っていた。メタボリック丸だしの体形である。どうせ遊びに行った泥棒兄弟の所で、贅沢三昧をしてきたに違いないのだ。

「好きですっ飛んだんじゃないんだぞ。宇宙の正義を守る為だ。わはは。それよりエンタメさん、なんで此処に？」

「まったく。何言ってるんだか。俺だって宇宙の正義の仕事だよ。？閉じられた空間？や？超光速エンジン？を、地球人の中に放置しとく訳にはいかんじゃないか。……aタイプ、申し訳ないがこの時空機は、情報部でいただいでいくよ。こいつあ証拠物件なんだ」

aタイプはふくれっ面だ。

「そんなー！　せつかくマイ時空機が手に入ったと思ったのにー！」

「まあ、そうむくれるな。そのうち俺が手頃なやつを買って、いや、手に入れてやるよ」

エンタメはきつと泥棒兄弟から、盗品を入手するつもりなのだろう。

「大佐あ、きつとですよ。約束ですよ。そうだ！　超電導式のWXY型の時空艇が欲しいな」

「馬鹿もの！　そりゃ最新型のやつじゃないか！」

キャバクラでオジ客にブランド品をねだるギャルホステスとちつとも変わらない。

ところでaタイプはいつたい、いくつになるのだろうか？

いや、それだけは考えちゃいけない。

どのみち一万年は生きるというaタイプクローンの事だ、どうせ何千歳とか……、つまり、そういう事なのだろう。

少々若いといったところで、何百歳に違いないのだ。

恐ろしや。これは興ざめである。

—— 帰りの時空艇の中、二人っきりの宇宙空間、無重力でのむにやむにや……はあ、ため息が出る。

—— それなのに……、ため息のaタイプが何百歳？　うわ！　考えちゃいかん！

しかし、まあ良いではないか、目の前にいるaタイプは若々しく、初々しく、みずみずしい青春真っ盛りの、色白で肌のきめも細かい、髪の色はピンクだけど、小柄の可愛娘ちゃん以外の何者でも、あり

はしないのだから。

エンタメは鼻歌をうたいながら、自分の個人タクシーのトランクの中に、外観は昔のオート三輪ほどの、VF型時空機を、あつという間にしまい込んだ。

まるでドラえもののポケットだ。

このトランクの中も？閉じられた空間？というやつなのだろう。

「よし、これで一仕事終わった。再会を祝して一杯やろうぜ。――

あいにく川っ端の屋台は満員貸し切り状態なんだ。

ダンナ、どこかい店、知ってるかい？」

とエンタメが言った。

「ああ、流行らない店だけど、行きつけの店がある」

と友和が答える。

さて、ここは地球なのだ。

日本なのだ。

久しぶりに帰ってきたのだ。

だから、ちよっぴり気になる友和だ。

世間様の中でのaタイプは、いったいどんな風に見えるのだろうか？と。

銀色の245ヶ星系軍のパイロット服は、レスキュー隊のようでもあるが、まあ良いだろう。

むしろ、寒い時期で良かったと考えるべきだ。

何しろパイロット服の下には、あの、バンピレラも逃げ出す銀河

系最新モードの超キワドイ衣装を、1枚だけしか着てないのだから。

——1枚ってアナタ、まるで紐のような衣装じゃないか。1本ってんだ。良く言って網だな。

——暑くなってパイロット服を脱いだりしたら、……うん。おっちゃん達は絶対、腰を抜かす。

——それにしても、まっピンクの、このヘアーときたら。オッドロイちゃうよ。

——まったく、フェロモン号の女どものファッションセンスときたら、地球じゃ露出狂のコスプレマニアってとこだな。

惑星温泉に出発する前の、あの麗しの黒髪に戻ってほしい友和であつたが、今夜は仕方がないって事だ。

三人は、バー、「ジャック・ルビー」へと向かった。

エンタメの個人タクシーは、子ノ渡文化会館から土手の脇道を、文太橋まで戻って橋を渡り、そのまま大通りを20メートルばかり進み、左側の道端の4階建ての小さな古ビルの前に止まった。

このビルの1階が、バー「ジャック・ルビー」なのだ。

再びクリスマス

ドアを開けるとカウンターに、小野寺善行よしゆきと谷垣たにかきが並んで座っていた。

エンタメが言った。

「ダンナ、なかなかシブイ店、知ってるな。焼酎は置いてるかい？」

すかさずマスターが答える。

「いいのがありますとも」

バーテンのロリ山田が言った。

「あ、やっぱり二人並んでいても信じられない！ 江守さん、こんな美人と、どこで知り合ったの？」

aタイプはとびっきりの笑顔を見せる。

善行が立ち上がって言った。

「あ、エータイプさんだったよね。お嬢さん、昼間はどーも。友和、みんなでこっち来て座れよ」

「へえ？ エータイプさんって言うの？ 髪の毛、綺麗に染まって

ますね。完璧なピンクだね」

と谷垣も思わず立ち上がる。

「あら、aタイプでいいのよ。それに、これは元々の色よ」とaタイプ。

「ゆうべは、確か、黒髪でしたよね」とロリ山田。

「あのヘアカラーはアンタレスで買ったの。最近一番のお気に入りよ」

とaタイプが答える。

マスターは焼酎のお湯割りのお湯を沸かしながら、小声でぶつぶつ言っている。

「そりゃ少々（オツムは）弱いかな？ だけどこんなに可愛い娘が、江守友和だって？ そんな馬鹿な！ 絶対おかしいよ……」

aタイプが「ジャック・ルビー」に初めて現れたのが、ショー・パブ（ゲイバー）「パンプキン・クイーン」で宇宙蛭退治をしたクリスマス・イブの夜なのだ。

そして翌日のクリスマスの日中はパブ喫茶「ロマーノ」へ行き、善行にたっぷりaタイプを見せびらかしてやった後で、買い物三昧をして、夜になってから子ノ渡文化会館へ行って、宇宙蛭と一大決戦を繰り広げたのである。

現在のこの時間は、大決戦の直後の時間なのだ。
つまり、クリスマスの真夜中って事だ。

ロリ山田が言った。

「そうだ、夕方、千鶴ママからクリスマスケーキの差し入れがあったんだ。aタイプさん食べて下さいよ」

「わーいケーキ！」

甘いものが底抜けに好きなaタイプである。

マスターがシャンペンを抜いた。

「乾杯！」

「来年もよろしくな」

「メリークリスマス」

aタイプが上着を脱ごうとしている。

「わ！ aタイプ、わざわざ脱がなくなっいいいからな」

「でも、上着のままじゃ、皆さんに失礼じゃない？」
とaタイプ。

悩ましい首筋から胸元、二の腕から脇の下にかけてが露わになった。

この一瞬、男どもの目が釘付けになった。

「ふん！」

と善行の鼻息の音が響く。

「ゴックン！」

これは谷垣が、生唾を飲み込んだ音だ。

友和はaタイプの正面に飛びつき、銀色ジャケットの前を閉じ合わせながら言った。

「あわわ。失礼じゃない。失礼じゃないから！」

全員、目が点になっている。

aタイプが言った。

「そお？　じゃ、……お星様のように毎日綺麗なaタイプクローンに、苦労なし！」

オヤジの駄じゃれのような気がしなくてもないが、これはaタイプクローンの、乾杯の音頭なのだ。

警報

ところで、……外ではサイレンが鳴りだした。

友和がaタイプに言った。

「何だろ？ フェロモン号ならブザー！ ブザー！ ブザー！ だ。
これは、ウゝ！ ウゝ！ ウゝ！ だ」

「特異点警報じゃない事は確かね」

と口の回りにサンタクロースの白髭のように、生クリームをべったり付けたaタイプが言った。

自分に切り分けられたケーキを瞬く間に食べてしまい、エンタメから貰ったぶんも、友和がやったぶんも、あっという間に平らげてしまった。

善行が自分の手付かずのケーキの皿を、aタイプに差し出しながら言った。

「なんだろう？ 凶悪犯が脱走したのか？」

ロリ山田もaタイプにケーキを差し出しながら言う。

「あははは。サンタクロースの墜落だったりして」

——ウゝ！ ウゝ！ ウゝ！

サイレンは鳴り止まない。

「はむ、はむ、はむ、はむ、はむ」

aタイプは新たなケーキに没頭している。

エンタメが友和に言った。

「aタイプのコロニーの中で、一番大きな施設って、何だと思う？」
即座に友和が答えた。

「お菓子の工場だろ？」

「あははは、あれ見りゃ誰だって分かるよな。――
情報部のデータベースで見た事あるんだ。

砂糖や果糖の消費量が、同じ規模の宇宙コロニーの十倍以上なんだ。

だけど、aタイプにデブはいない。わははは、これも宇宙の七不思議だ」

「はむ、はむ、はむ、はむ、はむ」

谷垣の分も、マスターの分も貰って食べている。

これで結局、大きなケーキを、まるまる一個食べた事になる。

aタイプにとっては、この瞬間こそが至福の時なのだ。

ところでサイレンは鳴り止まない。

――ウゥ！ ウゥ！ ウゥ！

「いいかげんうるさいなあ」
と谷垣が言った。

「やっぱ、事件かな？」
と善行。

にわかに、強烈に嫌な臭いが立ち込めてきた。
「ひっどーい！ せっかく美味しいの、食べてるのにー！」

aタイプが怒った。もう、しっかり食べ終わっているのだが。

臭いはだんだん強くなる。

「なんだ？ 鶴田川か？」

「うんこくせーっ」

「こりゃ本当に、うんちの臭いだよ」

「あーん、息が詰まりそう」

「店のおいじゃないですからね！」
とマスター。

たまらず全員、外に飛び出した。

大通りには、ラーメン屋から、バーや居酒屋や、コンビニや終夜レストランや、雀荘から、客や店員達が飛び出してくる。

ミニクラブやキャバクラや、もっと怪しい店からも、悩ましい薄着のおねえちゃん達が、とりあえず上着を羽織っただけの、なまめかしい生脚姿で飛び出してきた。

通行人も立ち止まり、思わず顔をしかめる。

猫も思わず立ち止まり、砂を掻く仕草をする。

サイレンはまだ鳴っている。

人々がざわめいている。

「こりゃ、ずいぶん久しぶりに聞くけど、洪水警報だよ」

「じゃ、やっぱり鶴田川の臭いか？」

「もお！ 涙が出てきちゃう。せっかく美味しかったのにっ！」
とaタイプ。

「俺さあ、本場のトンコツだって言うからさあ、本場もんは、こんなに臭いのか？ って、もうちょつとでオヤジさんに聞くとこだったよ」

とラーメン屋から飛び出してきた客。

「いや、お客さん、実は、我ながら今日のは、ずいぶん臭く仕上がったなって。あっはははは」

とラーメン屋のオヤジ。

「きゃはははアタシは、お客さんの体臭キツイなって……」
とファッションヘルスの女の子。

「何言ってるんだ！ 俺は、この女、くっさいすかしっ屁をしやがるって……」

と客。

「それにしてもくっせーなっ」

「このあたり一帯、臭いのかな？」

「友和さん、いったい何の臭いなの？」
とaタイプ。

「やっぱこれは、うんち、だろ？ うんち警報。なんちゃって」と友和。

「きゃははは。あのオジサン？うんち警報？だってえ」とファッションヘルスの女の子。

悪臭の中、地鳴りのような音が聞こえてきた。

——ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「嫌な感じ」

「ダンナ、これは、ただ事じゃないぞ！」とエンタメが言った。

次の瞬間、

——ザッパーン！ ドドドドドド

なんと、水が、いや、真っ黒な泥水が一気に押し寄せてきた。真夜中の鉄砲水。これはたまらない。

大通りは一瞬にして川となった。

「きゃー助けてー」

「うわあー！ ウッソみてー！」

人々の悲鳴も濁流の音にかき消された。

——ザザー！ ゴボゴボゴボ！ ザザー！ ザザー！ ゴボゴボ

ゴボ！

ジャック・ルビーの店先に出ていた連中は、外灯や電信柱にしがみつき、何とか踏み止まった。

善行が水の勢いにひっくり返って、店の中へと押し戻されて行く。

ポストにしがみついているエンタメが叫んだ。

「aタイプ！　ダンナ！　早く車に乗るんだ！」

水はあっという間に付近一帯を満たした。

マスターとロリ山田と谷垣は、ビルの外側の非常階段に上がり、ずぶ濡れの服をしぼっている。

せつかくのクリスマスだというのに、誰もが濡れ鼠となり、ぶるぶると震えている。

街角のスピーカーから、女性アナウンサーのインフォメーションが流れた。

　　ピンポロリン

子ノ渡市よりお知らせです。

子ノ渡市役所、生活土木部、河川管理課よりお知らせします。先程、上子ノ渡の砂防ダムに大量の汚物が流れ込んだとの報告がありました。

その結果、砂防ダムが詰まって、川の水が溢れ出した模様。

市民の皆様、落ち着いて下さい。

水位はこれ以上あがる事はありません。これは一次的なものです。繰り返します。水位はすぐに下がります。

どうか落ち着いて下さい。引き続き事情が判り次第お知らせします。

　　ピンポロリン

友和とaタイプ。そしてエンタメは、やっこの思いで車のドアを開け、大量の汚水と共に座席へ倒れ込んだ。

乗り込むと同時に、なんと、エンタメの個人タクシーは空中に浮上した。空飛ぶタクシーである。

ブルブルと車体を震わせて、マフラーから汚水をジャージャー吐き出した。

そして、濡れ鼠の友和とaタイプを後部座席に乗せたまま、砂防ダムの上空へ向って飛んで行く。

空飛ぶ個人タクシー

「どうだいダンナ、便利なタクシーだろう？」
とエンタメ。

「冗談じゃない！ 蛭まみれの……、蛭汁まみれになって……、せっかく惑星温泉に行ってキレイになったのに……、ちつくしょー！ これじゃ元の黙阿弥だあ！ エンタメさん、ひとつ走り、惑星温泉まで行ってくれ！」

と友和。

「はははダンナ、こいつあ、ただのビークルだ。宇宙飛行なんて無理無理」

「なら、その辺に降りて、トランクから、V F型だか何だか、宇宙船を出してくれ。――」

aタイプ、悪いけど、ワープして、すぐ連れてってくれ！」

「ちょっと待って友和さん。落ち着いてください」
とaタイプ。

「おっとダンナ、これを見てくれ」

運転席の暗視モニターに映し出されている上子ノ渡の砂防ダムには、汚物が大量に盛り上がっていた。その結果、川はすっかり流れを変えて、今や大通りが鶴田川の本流となっている有様だ。

「あれで詰まったんだな？ どんぶらこっこすっこっこ。さて汚物は、何処から流れてきたのかな？」

とエンタメ。

「上流へ行って原因を調べましょ
とaタイプ。」

「エンタメさん、とにかくヒーターもっと強くしてくれ！　うー寒い寒い寒い」

「あははは、色々うるさい特異点だ」

「俺は、か弱い地球人なんだ！　畜生！　寒い！　臭い！　嫌だ！
あー嫌だ！」

「あははは、まるつきり辛抱してもんが無いところが、ダンナの一
番の特徴だな」

空飛ぶ個人タクシーは鶴田川の上流を目指して飛んで行く。

「ダンナ、出沒湖が見えてきたぞ」

「ちくしょう！　ジャックから焼酎、かっぱらってくるんだった！」

鶴田川の上流の山間部に広がる出沒湖しゅつぽつこは、ぐるりと回りを、ホテルやアミューズメント施設が取り囲む観光地であった。

名産品はぶどうと養殖鰻。

そのほとんどは、お土産品の加工製品となる。

「あれは何かしら？」

「まるで巨大なビーバーの巣だ」

と友和。

「ううむ。絶対怪しい！」
とエンタメ。

暗視モニターの画面は、出没湖の真ん中に流木を積み上げたような、巨大で怪しげな人工島を映し出している。

「ビークルのナビ子に聞いてにみよう」
とエンタメ。

「大佐ア、ナビ子って呼んでるんですか？」 もお。軍人らしくない！
「いい！」
とaタイプ。

「自分だって携帯型通信機に、アクセサリじゃらじゃらぶら下げてるじゃないか」
とエンタメ。

ナビ子は、ちょっとハスキーで、なかなか魅力的な、女の声を出す。

《出没湖中央に浮かぶ中戸島は・安政の頃より別名・神隠し島と呼ばれ・渡った人間は消え失せてしまう・という伝説があります・・・》

「な。ナビ子はいい声だろ？」
とエンタメ。

《ちなみに・・・この・・・中戸島って・・・ゴジラが上陸したアノ島と・同じ名前よ・・・作者のセンスを感じさせるわね・・・》

「な。ナビ子はウンチクも言うんだ。いいだろ？ な。な」とエンタメ。

《島の中央には・水天宮の祠ほくらが祭られています・――

なお・出没湖には・山間部の乱開発や・松枯病などの理由により・近隣の山々から・毎年多くの流木が流れ込む為・地元の観光組合はこの中戸島に・湖畔から集めた大量の流木を集積しています・・現在は島の名前も・流木島と呼ばれています》

「なんだ。ちつとも怪しくないじゃないか」と友和。

「いや、連盟諜報員としての長年の勘だ。やっぱり怪しい！」

「怪しいわ。ぜったい何かいるわ。これは女の勘よ！」

「お二人さん、とにかく風呂入ってさっぱりしようぜ。それから、とりあえずアツカンだ」

と、友和が弱音を吐き、一行は湖畔のホテルにチェックインした。

ホテルの6階の部屋の窓から風呂上がりのエンタメが、暗視スコップで流木島を監視している。

友和とエンタメはホテルの甚平を、aタイプは浴衣を着ている。

首筋や生足がとても色っぽい。

「この辺りは臭くないな」

と、やはり風呂上がりの友和が、アツカンを飲みながら言った。

「凄い生体反応よ。すっごく大きな動物みたい」

aタイプは、例によって、ホテルのテレビと携帯とコンパクトを接続した装置を作動させて、真っ赤く染まったテレビ画面を指差している。

この装置で、アメリカの偵察衛星をコントロールしているらしいのだ。（蛭 カーゴパンツと通勤靴 参照。）

「成る程、あの流木島が怪獣島って訳か。そうしてみると、砂防ダムを詰まらせた汚物ってえのは、怪獣の排泄物って事になる」
とエンタメ。

「臭かったもんな。さすがは情報将校らしい鋭い推理だ」
と、笑いながら友和。

「下流の川の方をトイレにしてるんだわ」
とaタイプ。

「水洗トイレだな」
と友和。

「だから此処は臭くない」
とエンタメ。

「何食ってるのかな？」

と友和。

「肉食だった場合、地球上に、一番うじゃうじゃいる動物といったら……」

とエンタメ。

「あのウンチの臭いは、絶対肉食だよ」
と友和。

「それじゃエサはやっぱり、人間って事かしら？」
とaタイプ。

「そういう事になる。おー怖わ！ 人食い怪獣ってんだ！」
と友和。

「何れにしても、朝になったら正体を拝ましてくれるさ」
とエンタメが言った。

「とにかく、飲も飲も……。地酒か。『隠しきれないこの旨さ？ 酒仙・神隠し？』だって」
と友和。

「何かツマミ、取ろうぜ」
とエンタメ。

「プリンがいいな」
とaタイプ。

ゲスラ出現

日の出とともに怪獣が現れた。
ごく当然のように現れた。

aタイプが叫んだ。

「うわー！ おっきい！ 友和さん起きて！」

「むにゃむにゃ……なんだよう……怪獣でも……出たのかよ……」
友和は寝ぼけている。

エンタメも興奮して叫ぶ。

「ダンナ！ 起きろ！ あれを見ろ！」

体長は30メートル程。

ゴジラや他の主流派の怪獣たちのような、50メートル級のヤツじゃない。

「サンダ対ガイラ」のような30メートル級のヤツだ。

出没湖の中央に位置する流木島から、のっそりと巨大な姿を現して、下流の鶴田川までザンブ、ザンブと歩いて行く。
湖面が大きく波打った。

「おっほー！ 出たな！ 位置取りが良かったな。此处はベストポイントじゃないか！ 目が覚めたア」と友和。

目をまん丸にしたaタイプが、はしゃいでいる。

「ふわわ！ うっわ！ 船が危ない！ 逃げてー！ ウッソー！ きゃあきゃあ」

危うく棧橋に叩きつけられそうになった周遊観光船。

定年間近のベテラン船長の咄嗟の判断で、大波に揉まれながらも、
沖の方へと逃げて行く。

「しかしでかいな……コイツは凄いぜ……」
エンタメの目もまん丸になっている。

どっと押し寄せた高波は、湖畔に建ち並ぶホテルや、娯楽施設や
高級別荘へ、容赦なく襲いかかった。その結果、これらの頑丈な
ビルは浸水だけで済んだのだが、ビルの裏手に建ち並ぶ、老朽木造
家屋が損壊した。

怪獣は、出沒湖から流れ出す鶴田川に、しゃがみ込んで脱糞を始
めた。

排泄物は強烈な悪臭を放ちながら、鶴田川を流れて行く。
下流に位置する子ノ渡市は、再び水害に見舞われる事必至であっ
た。

「あの怪獣、いやー！ もお！」
とaタイプ。

「ワハハ。朝一番は健康の証拠だ」
とエンタメ。

「来たぞ！ 定番の流れ！ 航空自衛隊だ！ aタイプ、テレビつ
けてくれ！」
と友和。

上空を自衛隊の攻撃機が飛び交い、続いて攻撃ヘリの編隊がやっ
てきた。

マスコミのヘリコプターも飛んでくる。

テレビは、すべてのチャンネルが怪獣の臨時ニュース一色である。

中継ヘリコプターの中からキャスターが言った。

「これは、何とした事でしよう、怪獣は排泄を始めた模様。えゝ、大きい方です」

テレビスタジオの中のゲストが言う。

「動物学者はみんな見に行っちゃったんで、ボクがゲストです。サカナくんです。ワー！ 凄いな。オッキイナ！ クジラはもっと大きいよ。クジラはサカナじゃないよ。動物はみんな、ウンコするんだよ！ ですから、ホント、スッゴイナゝ！」

興奮のあまり、椅子から落ちた。

成り行きとは言え、友和とaタイプとエンタメは、この世紀の大ニュースの渦中、出沒湖畔の展望ホテルの6階に陣取っているのだ。

室内ホンが鳴った。

友和が電話にでる。

「お客様、今すぐ裏山に避難して下さい。湖に怪獣が出たんです。本当です。嘘じゃないです。窓の外を見て下さい。すぐに避難して下さい」

窓の外には巨大な怪獣が、ありありと見える。

今にもこちらに向きを変え、ずんずん迫ってきて、このホテルや他のビルディングの破壊を始めそうな気がする。

「怪獣のお仕事は、ビルのぶち壊しです」と、我々には深く刷込みがなされているのだ。

友和が答える。

「あー、我々は今回の事件の調査の為、政府から派遣された者だ。

うん。エンタメ博士の古生物研究所の研究員だ。

事態の推移にのっとって、適切な行動をとるから心配ない。

あー、エッヘン。自衛隊からの連絡も直接入ってくる。

だから、この部屋には構わんでくれ。

他の部屋の避難を急ぎたまえ。

あ、それから、すまないが朝めしを運んできてくれ。

ノーベル賞候補のエンタメ博士は、空腹だと脳みそが働かないんだ。

和洋どっちでもいいから、急いでくれ！

コーヒーはポットごと、必ず持ってきてくれ」

「デザートも忘れないでね！」

と、脇からaタイプの声。

笑いながらエンタメ博士が尋ねる。

「ダンナ、避難しないのか？」

友和はタバコに火をつけて、のんびりイップクしながら話し始めた。

「夏の終わりだった。――

少年時代の話だ。

夕方、家に帰る途中の砂浜で。誰かの作った砂山を見つけたんだ。さっそく俺は木っ端微塵にしてやろうと思った。

半ズボンとゴムぞうりでペタペタと、それでも勢いをつけて走って行った。

そして力一杯、蹴とばしたんだ」

aタイプが尋ねた。

「怪獣と関係ある話なの？」

「まあ聞きなさい。――」

蹴とばした結果、俺は複雑骨折して、それから3ヶ月間ギブスをはめる羽目になった。

つまり、砂山だとばかり思ってたのは、建設業者の棄てた？棄てコン？だったという訳だ」

「夏の終わりの、マヌケな少年の悲劇だな。ところでダンナ、それがこの状況と、どう関係あるんだ？」

「つまりだな、怪獣だって動物だろう？ ウンチもしてるしな。――つまり、こんな四角い、いかにも硬そうな鉄筋コンクリートのビルを、わざわざ蹴とばす筈がないんだ。痛いからな」

「成る程、流石は特異点のダンナだ。ここにいる方が安全だって訳だ」

「じゃ、じっくり観察出来るのね」

「それにしてもコーヒー遅いな」と友和。

「焼き海苔と生玉子と白いメシに、あったかいみそ汁だといいがな。待ちきれんな」

とエンタメ。

「わたしはマーマレードたっぷりのトーストがいいな」とaタイプ。

怪獣は巨大なシッポを持つ、ゴジラとかレッドキングみたいな、二足歩行のオーソドックスなタイプの奴だった。

このタイプの原型は、むろん、ティラノサウルスだ。

このてのシッポ怪獣は、骨格だけを考えると、ピカチュウとそう変わらないように思える。

ピカチュウだってシッポを有するからだ。

3頭身にデフォルメしてヌイグルミにしたら、ゴジラもピカチュウも同じようなものだ。

ところで、ピカチューに骨は有るのか？

これは難しい問題だ。

何故ならピカチューは、毎回あれだけ激しいバトルを繰り広げながら、骨折したって話を聞いた事が無いからだ。

ともあれ、目の前の出沒湖に佇む怪獣は、映画『ルワンジ』に出てくるティラノサウルスのような奴だ。

ただ、少しばかり違っていたのは、股間に巨大なペニスをもっている事だった。

シッポのつけ根の方には巨大な肛門もある。

この怪獣は紛れもなくオスだ。

オスで良かった。

メスの排泄器の事を書いてしまったら、（断じて性器とは言わぬ）

SFのくせに18禁オンリーになるかもしれない。そうするとg o oブログとはリンクできない。(エロリンク多すぎ。との理由で。以前使用停止を食ったロッカであった)

本当にオスで良かった。

良かった良かった。

こいつが大便を終えて暫くたって、今度は出沒湖の湖畔に建つ「秘宝館」めがけて、盛大に放尿した。

面白半分にペニスの先っぽをプルプル震わして、小便の軌道を変えたりしている。

「秘宝館」のシンボルである三角屋根の、てっぺんを飾る風見鶏が、降り注ぐ小便を受けてぐるぐる回る。

此处で報道していた「チャンネル201」のテレビ・クルーと、調査にきている学者達は全員、頭から浴びる羽目になった。

当然、全員怒った。

「こんちくしょう！ ずぶ濡れだ！」

「うわあっぺっぺっぺっ口に入っちゃった」

「何て奴だ！」

「ゲスな奴だ！」

「あれは、まるでゲスラって感じだな」

「ううむ、行儀の悪い奴じゃ！ ゲスラでいいじゃろ。ゲスラにし

よう！」

こうして、風見鶏の真下にいた、日本古生物学会の重鎮、山根博士により、怪獣はゲスラと命名された。

降り注ぐ小便の中で、怒り心頭のキャスターがヒステリックに叫ぶ。

「大変です！ 我々は今、まさに、怪獣ゲスラの攻撃を受けております！ ついにゲスラは人類に牙を剥いたのであります！ びしょ濡れであります！ 臭いであります」

テレビスタジオでは様々な有識者が喋りまくっているのだが、さっぱり要領を得ない。

当たり前の話だが、誰もゲスラを知らないのだ。

この場合、有識者とは、知ったかぶりの出来る奴とか、嘘八百を並べ立てる事が得意な奴の事なのだろう。

ゲストの一人として出演していた、初老のフォークシンガー、三上寛が言った。

「なんでえ、あのキャスター、小便かぶっただけで大袈裟な。俺の唄に『小便だらけの湖』ってのがあるんだよ。久々に聞かしてやろうか？」

ギターを掻き鳴らし、唄い出した。

　　♪小便くらけの　　みずうみに　　あなたと　　二人で　　飛び込んで
　　唄う唄は　　さすらい色唄　　踊るダンスは　　盆踊り　　だから　　だ
　　から　　何でも　　いいから　　さらけ出せ　　何でも　　いいから　　ぶちこわせ
　　！　　ってんだ！

対策本部

東京には速やかに緊急対策本部が設置された。

「ゲスラ対策本部」である。

その隣には、もっと大規模で物々しい、東京都の対策本部が設置されている。

「東京都・ゲスラ対策本部」である。

都知事は行方不明であった。

この男、生来、野次馬根性が強く、ゲスラを直接見たくなって、ヘリコプターで現地入りしてしまった。

こうなったら、なかなか捕まらない男なのだ。

仕方がない内閣官房長官は、受話器を握りしめ、副知事相手にまくし立てる。

「だからね、米軍のオブザーバーやら各国大使が、間違ってそっち（東京都・ゲスラ対策本部）へ行っちゃうんだよ。――紛らわしいんだよ、まったく。」

いやしくも、こっちは国の対策本部だよ。

少しは遠慮してくれたっていいだろう？

幕末の、幕府と長州の関係じゃないんだから。

な、盛り立ててくれよ。日本国」

奥の部屋では、優柔不断とか無責任との国民の日頃の批判を払拭すべく、とりあえず防災服に身を固めた総理大臣が、攻撃の決意を固めようとしていた。

（この文章を書いている時点での総理は福田さんなので、どうして

も意識してしまいます。しかし、どうせ長続きする訳ありませんから、遠慮なく？キャラ化？しちゃいます。」

「あの怪獣は本当に、米国とは関係してないんですね？」

真っ先きって駆け付けてきた防衛大臣は、いつもの赤ら顔だ。

市破という元祖オタク大臣であった。（この人に限って、名前で登場する事になります。哀愁を感じさせる、棄てがたいキャラクタ―です。）

「アメリカとは全く関係無いものと思われます」
と市破防衛大臣が答えた。

眼鏡をこころもちずり下げ、慎重な総理は質問を続ける。

「もしかして中国と、関係あったりしませんかね？」

こちららも赤面している外務大臣が、ダミ声で答える。（その後、コノヒトも総理になったけど、短かったね。）

「アレに関しては関係ありません。まあ、大丈夫ですよ」

総理はあくまで慎重である。

「まあ、大丈夫ってアナタね、太郎さん、顔が赤いですよ！ また飲んでたんでしょ？ そんな状態で、ちゃんと調べてみたんですか？」

「そんな風におっしゃるのなら総理、市破防衛大臣なんか、もっともっと、ずっと赤いじゃないか！」

と太郎外務大臣。

「あの人はほら、元々赤ら顔ですから。赤黒い感じのね。その事と、アナタが大酒飲みだって事は、関係ないでしょ？」

と総理。

市破防衛大臣も外務大臣に詰め寄る。

「外務大臣。太郎さん。アナタ、もしかして私の赤面症の事、馬鹿にしてるんですか？」

太郎外務大臣は逃げ腰だ。

「あたしゃてっきりアナタは、飲んでるから赤いんだとばかり思ってた。赤面症だなんて考えた事、一度もないよ」

市破防衛大臣は追及する。

「じゃあいつも私の事を、酔っ払いだと思ってたんだな！」

ここは一番、取り成してやるつもり、厚生労働大臣が言った。

（この人は、離党して新党結成したよね。）

「まあまあ、市破さん、飲んだか飲んでないか判別できない。これは政治家として大変得な体質だよ。羨ましい限りだ」

総理の首席秘書官がひたひたと、市破防衛大臣ににじり寄って囁いた。

「総理はね、アナタの事だけは本当に信頼してるんだよ。うん、頼りにしてるんだよ」

実はこの首席秘書官、総理と二人っきりの時は、市破防衛大臣の事を、オタク風味の赤面大臣とか、赤防アカボウと呼んでいた。

電話が鳴った。

さっと受話器に飛びついた首席秘書官は、総理にひそひそと囁く。「上様、外遊中の、自称キングメーカーの下駄面親父げたつらおやじからですよ」

総理が受話器をひったくって言った。

「あ、精力モリモリ森先生、ご無沙汰です。今回の怪獣事件ね、これはもしかしてロシアと、関係あったりしませんかね？　そうですか。じゃ韓国は？　北朝鮮の陰謀って可能性は？　……」

あくまでも慎重な総理であった。

—— 蛇足 ——

今にして思うのだが、福田内閣は、何と？　怪獣モノ？　にピッタリの内閣であった事か。

現在の菅内閣に書き直そうかとも思ったが、腰が落ち着かないのはともかくとしても、キャラとして面白味に欠ける。

私はけっして自民党びいきではないし、かつては、民主党に期待を寄せた一人だ。

ただ、福田さんも、石破さんも、太郎さんも、なんとも言えぬ？　味？　があった。？　華？　とまでは言わぬが。

—— 蛇足の蛇足 ——

その後、日本は本物の国難を迎えている。まさに、事實は小説より奇なり。

東日本の地震と津波はゲスラどころじゃない。

私自信も、連絡が取れない身内がいて、マイナス気温のさなか、余震が続く避難所を思うと、胸が張り裂けそうな思いだ。

原発事故もあり、復興にはかなりの歳月を要するだろうが、いつかは、上記のような、お気楽で無責任な、面白日本に戻ってほしい次第だ。

「暗い世相だからこそ、ユーモアが必要なんですネ」なんて事を、バカ真面目に喋る時代が来るなんて……。

年頭のブログの挨拶に、カタストロフィーの予感がする。と書いてしまった。

予感のまま、何事も無いと思っていたのだが……。

カタストロフィーはいつまで続くのだろう。

攻撃

こうして結局、自衛隊による攻撃が決定された。
何と言ってもこれは有事なのである。

幕僚幹部による有事規定、特別機密乙の3号、丙の9項にのっとり波状攻撃の順番が決められた。

丙の9項は一般言語に訳すと「アミダクジ」と言う。

怪獣映画よろしく出沒湖の湖畔には戦車が並んだ。

第一波攻撃を引き当てた髭の戦車隊長は、満面に笑みを浮かべ、上機嫌である。

『麦と兵隊』を替え歌にして唄っている。

「髭もほっころぶ出沒湖」

浪花節のような、渋いのを聞かせる。

手拍子をとっているのが副官だ。

本部から、やっと決断した総理の命令が伝えられた。

「了解。了解」

と、髭の戦車隊長は通信器を切る。

「どうでした？」

と副官が尋ねる。

「うむ、総理は決断された」と髭隊長。

「まさしく、有事ですからな」

と副官。

「むふふふ、攻撃命令だ」
と髭隊長。

「腕が鳴りますな」
と副官。

「攻撃！ 総員、抜刀突撃！ ……なーんちゃって」
嬉しくてたまらない髭隊長なのである。

「こなくそつぶちかませー」
号令一下、一斉射撃が始まった。

——バスン！ バスン！
と戦車砲の砲声が腹に響く。

ゲスラはギャーギャーと見苦しいほどに悲鳴をあげて、湖の中を
じたばたと逃げ回った。

そして全身の傷から大量に血を流し、悲しげにひとときわ高い断末
魔の叫び声をあげた。

「アイー——ン——ン」

そして出沒湖の中に、ザバアツと倒れた。
この大波で残りの木造家屋が全て倒壊した。
死んだらしい。

「呆気ない奴ですね」

と副官。

「もうちょっと頑張ってくれたらなあ。劣化ウランの徹甲弾が使えたのに」

ちよつと残念な髭隊長であつた。

ギャラリーの親父が誰へともなくつぶやいた。

「糞小便しただけで抹殺かよ？」

女達が大声で叫ぶ。

「あんなに痛がつてたじゃない。惨すぎるわ！」

「かわいそうだわ！」

「残酷よ！」

人々は皆、後味の悪い、嫌―な気分になった。

この、批難めいた空気をひしひしと感じつつ、戦車隊は粛々と引き上げて行った。

生物学者と厚生省の役人からになる特別調査団が、ゲスラの死体の調査の為、周遊観光船に乗り込もうとした。

まさにその矢先であつた。

流木島からもう一匹、今度は一回り小さなゲスラが現れたのだ。

大きく伸びをしながら挨拶がわりに咆哮する。

「ギエエーーンンンン」

よくディレイの効いた迫力満点の咆哮である。

ここは是非とも、故、伊福部昭先生の音楽が欲しいところだ。

なんと、またしても怪獣出現なのだ。

人々は固唾を飲んで見守った。

二匹めのゲスラは、湖の中に倒れているオスのゲスラに近づき、その亡きがらに取りすがって、もう一度泣き叫んだ。

これは哀調を帯びた咆哮であった。

「ギョエアイーーンンン」

悲しげなその声は、とてつもなく大きく、湖畔のホテルの窓ガラスは衝撃波の為、全て粉々になった。

こいつは、メスであるらしい。妻か？ 或いは恋人か？ はたまた愛人か？

政府とマスコミには抗議の電話やメールがどつと送られてきた。諸外国からも動物愛護団体を中心に、膨大な量の抗議が殺到した。その結果、攻撃命令は即座に中止された。

「だからこういう場合も考慮に入れて、しっかり対策を練ってくれなきゃ困るって言ったでしょ」

こう言い残して総理は便所へ逃げた。

窓ガラスが無くなって、容赦なく寒風が吹き込むホテルの6階の部屋では、aタイプが怒っていた。

「いきなり攻撃するなんて酷いわ！ ゲスラの奥さんかわいそう」

友和が言う。

「あんなに弱っちい奴だとは思わなかったな」

オヤジ狩り

ところでゲスラなのだが、なんと、更にもう一匹現れたのだ。
またしても流木島からの出現であった。

こいつは、ゲスラの亡きがらに寄り添って悲しみに暮れるメスゲスラの背後に、そっとすり寄り、その背中を優しく撫でさすり、慰めている。

今度の奴はオスであった。

やがて気を取り直したメスゲスラは、オスゲスラと手に手を取って、山の中に分け入って行く。

山の中と言っても体長三十メートルのゲスラの事であるから当然、まる見えなのである。

だから、山の上へ歩いて行った。と言うべきであろう。何故なら、山に登った。と言うと、ちっとも状況が見えないからだ。

こいつらが激しく山肌を揺るがして、不届きにも交尾を始めたのである。

「なんて節操の無いメスだ！」

「亭主が死んだばかりだってのに」

「やっぱり畜生は畜生だ」

人々は嫌な気分になった。
テレビもおおわらわだ。

「こんなの放送していいんですかね？」

「さあ？」

プロデューサーは便所へ逃げ込んだ。

暫くして流木島から、更にもう一匹の、つまり二匹めのメスゲスラが現れ、交尾真っ最中の二匹を引っぺがした。

そして、先のメスゲスラに往復ビンタを浴びせた後、オスゲスラをシッポでたたかぶっ叩いた。

オスゲスラがあたふたと逃げ廻る様子を見て、人々はげらげら笑った。

「後家さんに手を出したダンナを折檻してるんだ」

「何だか身につまされるな」

「いい気味よ！」

しかし人々は笑っているどころではなくなった。

ゲスラはその後、うじゃうじゃと現れ、死んだゲスラは抜きにして、総勢十匹にも達したのだから。

体長三十メートルが十匹でもある。

突然、虫けら並みのサイズに、突き落とされた観の人間様にとっては、まるで中生代の交通ラッシュだ。

ドシンドシン、ザバンザバンとまことに危険極まりない。

信じられない光景だ。

冬の日の日だまりの中、出沒湖畔でゴロゴロと遊んでいる巨大な

ゲスラの群れであった。

中には人間を捕まえたり、車をひっくり返して遊ぶ奴も出始めた。人々はあわてふためいて出沒湖畔とその界限から逃げ出した。今や展望ホテルも、完全に自衛隊の管理下に置かれた。

エンタメは腕時計型のリモコンをいじっている。

6階の窓の外に空飛ぶタクシーを呼ぶつもりだ。

友和が言った。

「エンタメさん、ちょっと俺に呼ばしてくれ」

「もう呼んだよ」

「いいからちょっと腕時計貸してよ」

エンタメは腕時計を外して友和に渡す。

「どうするんだ？」

「一言、言いたただけだよ」

友和は腕時計に向って囁いた。

「流星号、流星号、応答せよ。こちらスーパージェッター。はははは気持ちいいな」

6階の窓の外にタクシーが姿を現した。

「ダンナ、気が済んだかい？」

友和達は窓からタクシーに乗り込み、展望ホテルを後にした。颯爽と滑空するタクシーなのだが、幸いな事に自衛隊の目はゲス

ラの群れに釘付けであった。

「くそっ結局、朝めしこなかったな」
と空飛ぶ運転手のエンタメさん。

「エンタメさん、ちょっと降ろしてくれ。せめて缶コーヒー買って
くる」

「よしきた。ついでに、弁当とタバコも頼むよ」

友和は、着陸したタクシーから飛び出した。

ホテルの部屋着である甚平姿のまま、毛脛丸出しでさっそくお土産店へ入って行った。

ガラスの自動ドアを粉々にされた広い店内では、強烈なビートの
ラップを鳴らして、若者達が飲んだくれて踊り狂っていた。

♪黒くなりてえ・黒くなりてえ・黒くなりてえ・って思ってる
んじゃねえかな？　って思ってるんだろ？

♪黒くなりてえ・黒くなりてえ・黒くなりてえ・って思ってる
んじゃねえかな？　って思ってるんだろ？

♪k u r o k u n a r i t e e ♪ k u r o k u n a r i t e e ♪
k u r o k u n a r i t e e ♪

『黒くなりてえ』　b y 千駄山ロックバンド

さっそく鼻ピアスの青年が立ちはだかつて言った。

「よう、観光客のおっさん、どさくさまぎれに万引きしにきたのかよ」

二の腕に♂のタトゥーを彫り込んだ奴が、友和の背中を小突きながら言う。

「このオヤジ、どうせ会社のブス女と、不倫旅行だぜえ。ムカつくう」

モヒカン刈りの脚っ払いで友和は転倒した。

スキー帽がすかさず尻を蹴飛ばす。

当然の事だが友和は、ムラムラと怒りが込み上げてきた。

「ガキども、お前らがオヤジ狩りとか、やってんだろ？」

モヒカンがせせら笑って言う。

「そうだよ。お前ら偉そうな事言ってたって、結局、泣いて謝って、金くれるんだよ」

♂タトゥーが言う。

「ウゼエオヤジ、態度でけえな。チョームカつく」

友和が立ち上がりながら言った。

「ムカつくのはこっちの方だ」

スキー帽が言う。

「このオヤジ、なんか武道とか、やってんじゃねえか？ 態度でかすぎ」

その時、いい案配にあのムズムズを鼻に感じた。
テレキネシスである。

こうなったらもう、恐いものなんか無い友和なのだ。

ゆっくりと太極拳の身振り手振りを始めながら言った。

「お前らあ、オヤジの本当の恐さ、教えてやる」

「チョイヤバくね？」

と鼻ピアス。

「逃げっか？」

とスキー帽。

ホテルの部屋着なのだが、この、染め緋そこうしの甚平姿の、自信に満ちた友和は、武道の達人のように見えなくもない。

ゆっくりと太極拳を続けながら集中する。鼻のムズムズは益々強くなってくる。

不気味な笑いの中から、不敵に言い放つ。

「ガキども、逃げられると思うなよ。ふっふっふっふっふ」

「このオヤジ、恐えよ」

「な、オヤジ、怒んなよ」

「ヤベーよ、チョーヤベー」

ムズムズは最高潮に達した。

「よし、きた！ ふ、ふえっくしょん！」

鼻水がだらりと垂れた。

「はで？ 鼻風邪だったのか？」

モヒカンが叫ぶ。

「クソオヤジのハッターだっ」

「やっちまえ！」

バチンと、強烈なのが頬にきた。治療中の奥歯がすっ飛んだ。うずくまった後頭部に、これはエンピ（肘）だ。

星が出た。

チカチカチカ。

ぶっ倒れた背中と脇腹を、滅茶苦茶蹴られているのが解るのだが、どうしようもない。

「むぐぐうー」

友和の身体はエビのように丸まって床を這った。蹴られ続けて雑巾のようだ。

——ボスッ！ ボスッ！ ゲシッ！ ゲシッ！

「むぐぐガキども……やめでぐで……ふいくひよう……まるで……エビ雑巾って感じ」

その時であった。

「やめなさい！」

aタイプの声がして、ダンスのステップのような蹴りが止まった。

「このスケ、チョーマブくね？」
と鼻ピアスが言った。

「ピンクヘアーのおねいちゃん、エロエロ教えてチョーダイ」
と言いながら襲いかかったモヒカンだったが、次の瞬間、股間を
押さえて跳び上がった。

「びぎゃーえでで、えでー」
ぴょんぴょん跳び跳ねる。この場合、男というものはそうするし
か無い。

「よくも友和さんを！」
電光石火であった。身構える暇などない。
245ヶ星系系軍aタイプ中尉の戦闘格闘技は、一瞬のうちに不良
共全員の股間を蹴り上げていた。

「ふぎゃー」
全員ぴょんぴょん跳び跳ねる。それしか無いのだ。

「かわいそうな友和さん」
aタイプの胸に顔を埋める友和であった。

「ひーん助かったあ。くそっ！ いでで、奥歯一本抜けちゃっ
たあ。しかしaタイプは強いなあ」

にっこり笑ってaタイプが言った。
「重力の強いアポカリプス星で訓練したのよ」

ぶていっく！

お土産店で弁当を探したのだが、コンビニ弁当のような物はない。「鰻のひつまぶし」と、本格的に竹皮に包んでいる「おむすび」数種類を、地酒にカン・コーヒー。タバコと一緒にカゴに入れた。

外へ出ると、西側の空いっぱいにはゲスラどもが見える。

ゲスラどもは対岸の山の方へ移動していた。

ゴロゴロしながら遊んでいる。

ドスンドスンと振動が伝わってくるのだが、人間とは思議なもので何事にも慣れてしまうのだ。

もつとも、友和達には？空飛ぶタクシー？がある。だから、安心故の余裕なのだ。

ゲスラの数を確認してから、（勿論、踏み潰されない為の用心だ。）洋品店に入ったのだが、女物しか見当たらない。

小洒落た感じの店だ。男物は見当たらない。

「ぶていっく！」

と、一声発したaタイプが、マネキンの衣装に飛びついた。

この状況には、まったくそぐわないカラフルで可愛い衣装。しかもミニスカートだ。

「わあ。これカッワイーイ！ どお？ 似合わない？」
数点引つつかんで、さっそく鏡に向かっている。

ところで、aタイプが着用している銀色のツナギは、245ヶ星系軍のパイロットジャケットだ。

この服は？オートクリーニング機能？のスグレモノである。

脱ぐと同時に数十分でクリーニング完了。しかも自動修復機能。これはむしろ？再生機能？と言うべきだろう。

だから、友和とエンタメのように、泥まみれの衣服とおさらばして、ホテルの甚平で飛び出した訳じゃない。

もつともaタイプの場合は、ホテルじゃ浴衣を着ていた。（甚平を着せてみたい気もするが。）

ジャケットの下に着ているのが、例の？バンピレラコスチューム？。

これが、インナーじゃないってんだから！

これだって、再生オートクリーニングなのだ。

という事は、ホテルじゃ浴衣の下に、何も着てなかったということになる。

aタイプは、パイロットジャケットを脱いだ。

銀色ツナギから、すぽんと抜け出したって感じ。

友和は思わず叫んだ。

「うわっ！ よせっ！ aタイプ」

バンピレラコスチュームは、245ヶ星系軍の通常ウェアである。だから、わざわざ試着ブースに入ったりはしない。

——参照太夫でありんす。

ロツカのgOoブログ『aタイプと一緒にいたい！』の『スーパ
ー・エン・タメ小説 江守友和の冒険』

<http://blog.google.jp/locka1955/e/2029a4c34c1a83fc782acd9693e81143>

aタイプ。独裁官ミナコ。ロボ・ミナコ。の画像あります。参照

してくんなまし。――

フェロモン号の中じゃ、あたりまえに見慣れていたコスチュームも、ここでは、紐パンと紐ブラの連続体のようで、つまりウルトラエッチな品物に見える。(そのとおりです。)

オッパイのほんの一部と、腰の小さな三角形を、紐で繋いだようなコスチューム一枚だけで、つつ立っているのだ。

肩も脇腹も太ももすべてむき出し。

それにしても、なんて素敵なプロポーション。

本日着用の銀色ブーツとの組み合わせが、妙にエロい。エロすぎる。

思わず店の外を窺^{うかが}った友和なのだが、店の前を、なんと、あの4人組のガキどもが通りかかったのだ。

ガキどもの目がまん丸になった。

「しえ〜！ コスプレかあ？」

「スнге格好」

「ピンクのおねいちゃん、エロッペー！」

「たっまんね〜！」

すかさずaタイプが、ガキどもに言った。

「あなたたち、ワゴンみたいなの、探してきて！」

「ハイ！」

と答えて、モヒカンと、♂タトゥーと、鼻ピアスは弾かれたように走り出す。

スキー帽一人が、まるで「タイコモチ」のようなリアクションで、

てけてけと近づいてきた。

「へい。アネさん、エっへっへ。コンチまた、いいご機嫌でゲスな……」

とは、言わなかったが。

「おねいさん。これなんか絶対、似合いますよ」

と、同じような事を言った。

「そお？　ちよつと馬鹿っぽく見えない？」

と、スキー帽お勧めのウェアを、首に宛がっているaタイプ。

「トンデモナイ。もー最高っす。ところで、その格好、寒くないっすか？」

とスキー帽。

たまりかねた友和が叫ぶ。

「うっわ！　裸だ。すっぽんぽんと、なーんも変わらん！　aタイプ、着替えるなら、ちゃんと着ろよ！　ブースに入って！」

その時、

「おねいちゃん、おまたせー！」

と、モヒカンと、♂タトゥーと、鼻ピアスが、量販店の大きなワゴンを、ガラガラと一台ずつ押してきた。

「あーん。これも、これも可愛いくて、すてがたいな。コッチとコッチ、ドッチがいいと思う？」

とaタイプ。

「やっぱ、コッチでしょう！」

とスキー帽が相手をしている。

選んだ衣料品を、次から次へワゴンの上に積み上げているじゃないか。

友和はタバコを取り出してくわえた。

「どぞ」

と、モヒカンが、神妙な顔で火を差し出した。

「おい。お前ら、男物の店、知ってるか？」
と友和。

「ハイ。角を曲がって2軒目す」
と鼻ピアス。

「aタイプ。行くぞ」
と声をかけると、
ぶんぶんと顔をふって答えた。
「もちよつとだけ！　ぶていっくでお買い物！」

「ふう」
と煙を吐いて友和が言った。

「おい、おねいちゃんの事、しっかりガードしてやってくれ。育ちが良すぎて、ちよつと、な。そーいうタイプなんだ。aタイプってんだ」

とモヒカンに言い残してブティックを出た。

不良どもが頭を下げて見送っている。

「どぞ、ご心配なく！」
とモヒカンの声。

角を曲がって2軒目は、普通の衣料品店であった。

友和はここで着替えをした。

大きめの、ジーンズ風ストレッチパンツに、無地の、そんなに厚ぼったくない綿シャツを何枚か選ぶ。

その中から青っぽいのを着た。

シニア向けの灰色の毛糸のチョッキを着て、暖かそうな、バーゲン品であるフリースを貰った。

奥の方には高級セーターや、ブランド品のコートやジャケットもあったのだが、友和にはこれで十分なのだ。

なにも遠慮している訳じゃない。

「軽くて暖かいフリースを、身体が覚えちゃうとな、楽なものしか着たくなくなるんだよ。ストレッチパンツも同様」

そういう事なのだそうだ。

万年背広オヤジの友和は、ファッションとはまるで無縁な男だ。しかし何故だか、この男、ジャージだけは嫌いだった。

「あんなものを年がら年中着ている奴は、ファッションセンス、ゼロだな」

そういう事なのだそうだ。

周遊観光船の棧橋では、エンタメの個人タクシーが待っていた。

「エンタメさんにもほら、似合いそうなジャンパー持ってきてやったぞ」

と、ねずみ色の作業服のようなのを差し出す。

「お、いいのがあったな」

この男も、すぐに昔の土建屋さんみたいな格好になりたがる。不思議なセンスの持ち主である。

「大佐あ、トランク開けてくださいーい！」

と言いながら、不良どもを従えて、aタイプが帰ってきた。

不良どもは、衣料品を山積みにした3台のカートを、ガラガラ押している。

友和が言った。

「こりゃ、万引きどころじゃないな」

「何よー！ 後で、ちゃんと清算するもん」とaタイプ。

「そろそろフェロモン号に帰るんじゃないのか？」と友和。

「あら、休暇はまだ始まったばかりよ。これは休暇中のお洋服よ」とaタイプ。

そうだった。事件の連続（第5話 蛭）と、タイムトラベル（第

6話 元禄カエサル編）に、宇宙旅行（第7話 モノリス）もあって、すっかり忘れていた。

時間感覚だってムチャクチャになる。

あれからずいぶん経ったような気がする。

友和とともに過ごすaタイプの、一年間にも及ぶ休暇は、嫁とりにも等しいとばかりに、子ノ渡市内に新居を決め、電化製品も一新して、ベッドも、セミダブルではなく、なんとダブルベッドを購入していた。（蛭 ショッピング 参照。）

「元の地球時間に戻ってきたんだ。って事は、aタイプの休暇は、まだ、始まったばかりじゃないか！ うふふ。そーだった。嫁とり。嫁とり。むふふ。新居のダブルベッドへ引越したあ！ むっふっふっふ」

友和は、顔の弛緩が止められない。

「あの……」

とモヒカンが話しかけてきた。

「何だ？」

と友和。

「お詫びを……やっぱ、ケジメっすから……」

と鼻ピアス。

「すみませんでした」

と不良どもが頭を下げた。

「何かあったのか？」

とエンタメ。

「そーか。お前ら、もう、オヤジ狩りなんて、やるんじゃないぞ！」
と友和。

「ハイ！ ワツカリマシタ！」
と不良ども。

「よーし！ じゃ、為になる話をしてやる！」
と友和。

「お願いします！」
と不良ども。

「あのな。……えへん。……つまり。……」
と友和。

「アハハハ。ダンナ、どうせ何にも出てこないんだろ？」
とエンタメが冷やかした。

「今は昔、……つまり……な。……」
友和は目を白黒させている。

「とにかくだな。お前ら、怪獣に踏み潰されんように、気をつけろよ」

と友和。

「ワハハハ。何だそりゃ」
とエンタメ。

aタイプが言った。

「こうなったら、流木島を調べるしかないわね。やっぱり気になるもん」

スキー帽が言った。

「流木島って？ 今は……超ヤバじゃね？」

モヒカンが言った。

「島へ渡るんすか？」

「君達、行った事あるのか？」
とエンタメの質問。

「俺らのガキの頃からの遊び場っす」
と♂タトウ。

「どんな島だ？」
とエンタメ。

「ちっちゃい神社があって、草木が茂ってて、結構大きな島っす」
と鼻ピアスが答える。

「それから……」
とモヒカン。

「何かあるのか？」
とエンタメ。

「コイツ、ジャリの頃、島からゴム風船、いっぱい拾ってきたって、水入れて大きなヨーヨー作って、みんなに配ってたんす」
とモヒカン。

「そんでもって親にぶっ飛ばされちゃった。あははは。使用済みのコンちゃんだった」

とスキー帽。

「懐かしいな。アオカンが盛んな時代……」
と友和。

「アオカンってなーに？」
とaタイプ

「そか。……少しも参考にならん。ダンナ、aタイプ、乗ってくれ。行くぞ」

エンタメはアクセルをふかした。

個人タクシーは栈橋から、ためらいもなく湖へ飛び込んだ。
そして、流木島目指してザブザブ進んで行く。

「ウツソみてえ……」

あんぐりと口を開けた不良どもが見送っている。

クロエとタモラ

クロエがブリーダーになる事を思い立ったのは、タモラの動物愛護精神に負う処が大きい。

四日に一度は元の領主であるズール伯の所へ勤労奉仕に出かけるクロエだったが、残りのシーズンの人生設計を考える上でも、ここは一つタモラと、一緒に打ち込める仕事を始める事が必要だと感応し合った為だ。

その結果、タモラからの深い感謝と喜びの波長を感じているのだ。これはクロエにとって何より嬉しい事だった。

クロエ自身はと言えば、勿論この事はタモラもすっかりお見透しの筈なのだが、グーグーの事は特に好きだという訳じゃない。

何故なら愛情不足により欲求不満を感じてしまったグーグーは、第3シーズンに至っては脱皮して、元の姿とは似ても似つかない醜悪な姿となるからだ。

つまり性悪なバレバレになるのだ。

まったくバレバレときたら……いくらグーグーの頃可愛いらしくとも、気が違ったように凶暴になり、脱皮した後のその姿といったら、固い鱗に被われて、おまけにアムラシッド星の怪獣ベロベロのように炎まで吐き出す始末だ。

まあ考えてみればこれは仕方ない事なのだ。

何故なら元々グーグーとは、このベロベロとチョンビレ星の可愛いらしい愛玩チョメチョメを、掛け合わせて造ったものなのだから。

だからグーグーこそは品種改良の奇跡とまで絶賛されているのだ。

この事は今でもブリーダー達の自尊心の源となっている。

「くすくす」

とクロエは笑う。

チョコメチョコメでは温和し過ぎて物足りないって事だ。

それこそが、いたずらもののグーグーの人気の秘密なのであった。

かつて、先人達が、この予測不能な魅力に満ちた怪獣ベロベロを、結局飼慣らす事が出来なかった事への、アドロ流の帰結、つまり支配能力の証明でもあるのだ。

今のところ商売は繁盛している。

客は何日か滞在して、じっくりグーグーと遊び、感応の相性の良い、お気に入りのおやつを買って行く。

もっとも売れ残ったって、ちっとも構いはしない。

第3シーズンを無事に乗り切ったグーグーは、第4シーズンに入ると、どんどん太り出して、第5シーズンに入ると最高級食用肉のチョコベリグとなるのだ。

この約二十倍に体積の増えたチョコベリグ肉は、結構いい値で売れるのだった。

食卓を挟んで、美しいタモラの美味い手料理をチューチューと吸い込みながら、幸福をかみしめるクロエなのだ。

「ああ、第3シーズン、第3シーズン。僕一人では到底乗り切れないよ。――」

あははは、おそらくみんなバレバレになっちまう。

グーグーは素直だ。ブリーダーの邪心を見抜くんだ。
だから、君の純粋な愛情のお陰だよ。

他のブリーダー連中はどんなに世話を焼いても十匹に一匹はバレバレになっちまうって言ってる。

ズール伯の所でさえ十五匹に一匹だ。

ここ五年間バレバレ退治をしてないなんて……。

この事は、みんな驚いてるんだ。

タモラ、まったく君はカスパルのピロピロだよ。（天使のよう、

或いはマリア様か？）

愛しているよ」

美しいタモラは静かに笑っている。

昼間は外の真つ赤な草原で、一日中転げ回って遊び疲れたグーグー達は、寄り添い丸くなって眠っている。

ギロチンの空

出没湖を渡る個人タクシーであった。

「この車凄いな、水陸両用でしかも空も飛べる」

「どうだいダンナ、ボンド・カーより凄いだろ」

「だけど流木島への上陸は、車から降りなきゃ無理だろ？」

「あははは見てびっくりじゃない」

車体からロボットの足が出て、屋根からは二本のロボットアームが出た。

個人タクシーはカバのような四足歩行となり、積み重なった流木をアームでかき分けながら、のっしのっしと歩いて行く。

「わははは嘘みたい」

「どうだ！ 連盟軍情報部の特殊車輛の威力は！」

はたして水天宮の祠の脇には、巨大なクレーターがあった。

「ゲスラの巢穴かな？」

「ダンナ、入ってみるぞ」

「友和さん覚悟はいい？」

個人タクシーは躊躇無く入って行った。

「ムニョーン」という音こそ鳴った訳ではないのだが、三人は胃袋がでんぐり返るような不思議な感覚を味わっていた。

そして、ガラガラドッシャーン！と凄い音をたてて、タクシーは明らかに人家の中に突っ込んだ。

ダイニングキッチンのテーブルをひっくり返し、食器戸棚を薙倒し、冷蔵庫を押しつけて、やっと止まった。

エプロン姿の若い女が驚いている。

結構美人である。

友和達はあわてて車から飛び出した。

床には料理と皿の破片や鍋やグラスの破片が散らばっている。食事の仕度を台なしにしたらしい。当然女は怒っている。

「何ですか？ あなたたちは！ いったい何処からきたの？」
毎度おなじみながら言葉が通じる。

「あ、どーもすみません。お嬢さん、我々は怪獣の調査の為にですな……」

エンタメは釈明しようと必死だ。

「友和さんあれを見て！」

aタイプの目がまんまるになっている。

友和は驚いた。勿論エンタメも驚いた。

床の上では、ひっくり返って散らかった料理を、あのゲスラが旨

そうにあさって食べているではないか。

十匹以上はいる。しかもこのゲスラは体長三十センチ程、ちょうど猫程の大きさなのだ。

ミャウミャウと可愛いらしい声で鳴く。

「どういう事なんだ？」
と友和。

「訳が解らん」
とエンタメ。

「可愛いわあ」
aタイプはゲスラを一匹捕まえて抱っこしている。

「可愛いでしょ。みんな血統書付きのグーグーなのよ」
と女が言った。

女は事故だというエンタメの説明に、どうにか納得してくれた。損害賠償についての話はさておき、台なしにした食事の仕度を手伝ってほしいとの事で、aタイプはエプロンをつけキッチンに立っている。

友和とエンタメは、苦勞してタクシーを家の外へ引っ張り出したのだが、野外の景色を見て驚いた。

やはりそれは地球の景色ではなかった。

色合いも何もかもが全く違うのだ。

惑星温泉なんかともまた違う不思議な景色が広がっている。

ひとつだけ解った事は、此処は火のように真っ赤な芝生の生い茂る、果てしない野っ原だという事だ。

つまり都会ではなく、田舎の牧場のような所なのだろう。

それにしてもポツカリと空に浮かぶ巨大な母星の、これはまるで土星のリングのような形なのだが、刃物のようにギラギラと輝く鉄色の刃が、今にも突き刺さってくるような圧迫感だ。これには圧倒されてしまう。

「ふう恐わっ」

と、思わず首筋を押さえてしゃがみ込んだエンタメが、声をあげた。

「ギロチンの真下って感じだな。立ってるだけでちびりそうだと友和も思わずしゃがみ込む。

二人は空を見上げないように首を強張らせながら、崩した壁の残骸を片付けた。

そして、やけにメルヘンチックな黄色いキノコ形の家の中へ、そそくさと逃げ込んだ。

超巨人友和

やがて男が一人帰ってきて、一緒に食卓を囲んだ。

ゲスラはグーグーという呼び名であるらしい。

このクロエとタモラと言うカップルは、このミニ怪獣グーグーのブリーダーなのだと言う。

食事の途中、クロエが立ち上がりキッチンテーブルの奥の壁の、冷蔵庫の脇にある小さな機械を覗いた。そして、だしぬけに友和達に詫びた。

「あ！ お客さん、大変申し訳ない事をした」

「なんですか？ いったい」とエンタメ。

クロエは説明した。

「まったくグーグーのいたずらものめ！ テレポーター（瞬間移動装置）をいじっちゃったんです。ほら無限大に設定が変わっている。つまり皆さんを引っ張り込んだのは、ウチのテレポーターだって事になります」

タモラが言った。

「そういえばグーグーが少ないわ。ココちゃん！ ナナちゃん！ マーちゃんもターくんもいないわ」

友和が言った。

「そうだよ。地球にいるんだよ。出沒湖にいるんだ。だけど何で大きさがこんなにも違うんだ？」

「とにかく、捕まえてくる」

クロエはテレポーターをいじっているのだが、一向に消え去る気配はない。

「だめだ！ 入っていけない！ 場所そのまま、固定したんだけど……」

タモラもテレポーターの前に立ち、試してみるのだが、全く反応しない。

「俺が行ってみようか？」

相変わらず軽いノリの友和が、テレポーターの前にひょいと立った。

瞬間、胃がでんぐり返るような、あの感じがした。

避けそこなった攻撃ヘリが、友和の額に激突して墜落した。

「いってー！ 何すんだ！」

友和は百七十メートルの超巨人となって、出没湖にそびえ立っているではないか。

ゴジラ並みの怪獣たちが50メートル級なのだから、優にその3倍以上。凄いものの。

友和の額に激突したヘリコプターは、落下して右肩に当たり、それから左の太ももにバウンドし、そして右の靴の甲に当たって森の中へ突っ込んだ。

墜落には違いないが、段階的にブレーキがかかった事が幸いしたのだろう。パイロットとクルーはどうか無事だった。破損した機体から、命からがら這い出してきた。

「おい、無事か？ 助かったぞ！」

「しっかりしろ！」

「ひゃあ！ あれをみる！」

「あれに衝突したんだ。し、信じられん！」

空全面を覆うばかりの超巨人の姿に、全員がぶったまげた。

棒立ちで仰ぎ見ていると、全身がむず痒くなる程の低周波振動を浴びた。

これは超巨人の発する声だ。重低音の音波振動であった。

「くおりやああ、ばうつつとあむあぐえとああぬあああ……」

と、意味不明の重低音が聞こえる。

全身総毛立ったパイロットとクルーは、のたうち回って悲鳴をあげた。

「うっひゃー！ 頭蓋骨ビリビリー！」

「耳が、痒いよお！」

「鼻の穴が、ふあなげが、は、鼻毛が逆立つ！ ふえっふえっ、ふえーくしょん！」

「歯ぐきの裏側がくすぐってー！ たまらん！ 差し歯が抜けそ！」

超巨人は、こう言ってる。

「こりゃ、ぶったまげたな。そうだココちゃんだっけ？ ココちゃんってどいつだ？ おいで、おいで、こりゃ捕まえるったって至難

の業だよ」

友和はゲスラを追って山の上に移動した。

一步踏み出すごとに、ズシーンズシーンと凄い振動。超巨人の足元は震度7以上。

遭難したパイロットとクルーはパニック状態。

「助けてくれー！」

「なんまんだぶ・なんまんだぶ・・・」

「悪かった。俺が悪かった。許してくれー！」

「生きて帰ったら絶対プロポーズしてやる！ 里子ー！」

そびえ立つ友和の回りを、自衛隊機が飛び回る。

眼下の国道を連なって逃げて行く車の列が、まるでミニチュアカーのように見える。

二、三台つまんでみたかったりするのだが、そんな事をしたら、たちどころに自衛隊機の攻撃を受けるだろう。

「くそっ自衛隊のヘリコプターめ！ おでこ切っちゃったじゃないか！ だけどミサイルはこんなもんじゃないぞ。めちゃくちゃ痛いだろうな。きつと死ぬな。くそ！ やられっぱなしじゃ悔しいじゃないか」

カメラを回しながら飛び回っているヘリコプターの機内では、本部からの無線が鳴っている。

「おい！ 何がおこった！ モニター見てもさっぱり解らん。混信してるらしい。バーゲン品の衣料品が映ってる。テレビ通販らしい。報告しろ！ 何が見える？」

パイロットが答える。

「オ、オヤジだ！ 信じられん！」

「オヤジ？ オヤジがどうした？」

と本部。

「いや。俺のオヤジって意味じゃない！ 何処かのオヤジ。つまり
オッチャンだあ！」

とパイロット。

「オッチャン？ オッチャンがどうした？」

と本部。

「フリースを着た、オヤジだ！」

とパイロット。

「フリースか？ お！ このテレビ通販、フリースが映ってるぞ！」
と本部。

「テレビ通販じゃない！ これは実写だ！ バカでかいオヤジなん
だ！」

とパイロット。

「実写か？ フリースが？ バカオヤジとはなんだ！ バカはお前
だ！」

と本部。

フリースを腕まくりして、超巨人は額の傷口を、青いシャツの袖
でぬぐっている。

「あだだだだ。おでこ、本当に痛い。自衛隊のヤロー。同じ日本人のクセに……」

攻撃へりは数を増し、周りを飛び回っている。

友和は、ナマハゲのような恰好をして、自衛隊機を威嚇する。

中腰となり、そしてしゃがむ。

それから立ち上がり、叫んだ。

「ギャオー！ どうだバカヤロー！ 迫力だろ？」

攻撃へりは四散した。

そして遠ざかって行く。

「よし今のうちだ。ココちゃん。おいで。あとは、ナナちゃんだっけ？ おいで。おいで」

ゲスラは出沒湖界隈の山の上で、転げ回って遊んでいる。

捕まえようとしているのだが、なかなかすばしっこい。するりと逃げられてしまう。

「やっぱ、無理だな」

仕方がないので腕を腰にあて、遥かなる関東平野を俯瞰ふかんして観賞する。

まだ感覚が馴れないせいで、立ったまま真下を見ると、あまりの高さにクラクラする。

「自分の足元眺めて高所恐怖症じゃ可笑しいよな。だけどまあ、気持ちいいな」

人間世界を遥かに見下ろし、あたかも神様になったような気分の友和であったが、なにぶん十二月の寒空の中である、にわかに尿意が込み上げてきた。

「わははは、まさか立小便をする訳にもいかんし……ひとまず引き上げだな」

友和は流木島のクレーターに爪先を突っ込んだ。
胃がでんぐり返った。
こうして超巨人は消え失せてしまった。

世間は大騒ぎとなった。
号外が乱れ飛ぶ。

『怪獣ゲスラ出現!』

『驚愕! ゲスラ多数現る!』

『仰天! のし歩くゲスラの群れ』

『驚天動地! なんと、超巨人現る!』

友和の写真が新聞や雑誌を飾る。

テレビのすべてのチャンネルがゲスラと超巨人一色だ。

神なのか? 人間なのか? あの、フリースを着た、平凡な容貌。ようぼう
超巨人はいったい誰でしょう?

小野寺善行も部屋でテレビを見て叫ぶ。

「友和! お前、そんな所で、いったい何やってんだー?」

科学者や軍事評論家が質問責めに遭い、結局、皆、便所に逃げ込

んだ。

有名な霊能者や占い師もコメントを求められる。

彼等の場合は複雑な心境だ。

何故なら、超巨人となっっている平凡な容貌の中年オヤジが現実存在している以上、これには絶対、何かトリックがある筈だと考える。

だから、めったな事は言えない。それらしい事も言えない。

へたをすれば、種明かしが済んだ後で恥をかいってしまうからだ。

「すべてが解明された後で、いつものように、もっともらしく、偉そうな事を言おう」

と結論を出してはいるものの、今受けているこの質問にも、お馴染みの知ったかぶりを発揮したい。

自説をもっともらしく展開し、即座に答えを言い放ち、世間を感心させてやりたい。

そんな欲求がムズムズと込み上げてくる。

霊能者や占い師は因果な性分なのだ。

解らないとか、知らないとか、絶対に言いたくない。

一方、ブリーダー屋敷では。

「すまん、ミニ怪獣捕まんなかった」

流血の友和の帰還である。

「友和さん、おでこ怪我してるわ。大丈夫？」

aタイプが傷の消毒をしてくれた。

「ダンナ、額が割れてるぜ。頭突きでもくらったのか？ どうだ？

喋れるか？」

「ああ、驚いたよ。俺は巨大化して出沒湖に立ってたんだ。怪獣と同じ比率みたいだな。つまり、出沒湖に行くと、俺は超巨人になるんだ。それにしても、くそっ自衛隊の奴め！ おっと、我慢してたんだ、漏れそう。トイレどこですか？」

友和は、内股になり、よじれ歩きでトイレに行った。

「自衛隊と戦ったのね！ 友和さんの仇。今度はわたしが行く！」
aタイプはブラスター（熱線銃）を取り出した。

「おいおいaタイプ、自衛隊と戦争、おっばじめるつもりかい？」
とエンタメが言う。

「だってー、無防備な友和さんを攻撃したのよ。最初の怪獣の事だって、許せない！」

熱源カートリッジのエネルギー残量を点検している。

「まあ待て中尉。とりあえず俺が行って様子を見てきてやる」
巨大化したaタイプは、自衛隊を焼き尽くすかもしれない。と考えたエンタメは、テレポーターの前に目を閉じて立った。

「すいませんけど、今度はエサでつってみてくれない？」
と言いながら、タモラがペットフードの袋をエンタメに渡した。

目を閉じたまま、ペットフードの袋を抱えて、つつ立ったままのエンタメである。

しかし消えない。

「おかしいな？ 生体周波数が変化したのかな？」

とクロエが言う。

「やっぱりわたしが」

テレポーターの前でブラスターを握りしめ、突入ポーズを取る a
タイプなのだが、やはり反応しない。

「行きは良い良い帰りは怖いってか？」

とエンタメ。

トイレから友和が出てきた。

「あーすっきりした。からっぽになったら飲みたくなったな。クロ
エさん何かアルコールないの？」

笑いながらエンタメが言う。

「あははは、ダンナがトイレに行ってる間が、日本の運命の分かれ
道だったな」

「何のこっちゃ？」

と友和。

「aタイプが自衛隊を壊滅させるとこだったよ」

とエンタメは、ペットフードの乾燥エサの匂いにつられたのか、
取り出してなめている。

「どうしてこの人だけ反応するのかしら？」

とタモラが不思議そうに言った。

「何せ彼は特異点ですからな。我々にも解らん事が多いのです。頭
の構造とかも……」

エンタメは乾燥エサを二、三粒、ポリポリと旨そうに食べている。友和は、クロエが次々と出してくるアルコール飲料を、それぞれ試飲する。

「いよっし、これが一番ビールに近い。さあクロエさん、飲も飲も」

「ダンナ俺にも一杯くれ。これ、結構いけるぞ」

友和にペットフードの袋を差し出すエンタメなのだ。

クロエも、しょうがない。といった顔をして、飲み始めた。

「困ったわ。なんとかしなくちゃ。ねえクロエ、飲んでる場合じゃないでしょ？」

とタモラがクロエをつついた。

相変わらずお気楽な友和は、乾燥エサをつまみながら、旨そうに飲んでいる。

「まあ奥さん、あせらない、あせらない。こうして飲んできるとアイデアが、出る時は出るし、出ない時は……」

「出ない時はどうなさるの？」
と心配顔のタモラが聞いた。

「あははは、出るまで飲もうホトトギスってね。これ結構旨いな」

「な。イカみたいな匂いがまた、そそるんだよ」
とエンタメもいい調子になってきた。

「やっぱりだめみたい」

テレポーターの前で再び、突入ポーズを取りながらaタイプが言

った。

クロエとタモラから見た場合、この三人は紛れもないエイリアンなのだ。

エイリアンはペットフードを食べながら、不思議な宴会を続けている。

「よし、おまたせタモラさん。アイデア出たよ。aタイプ、あの銃、貸してくれ。痺れるやつだ」

気合いは十分。

今度はパラライザー（麻痺銃）を片手に再びテレポーターの前に立つ友和であった。

胃がよじれた。

そして、またしても出沒湖に現れた超巨人である。

今度も、避けそこなった自衛隊の攻撃機の翼が、友和の耳を切り裂いた。

急上昇して逃げて行く。

「いってー！　こん畜生！　日本人のくせに同朋を攻撃するなんて……馬鹿者め！　血が出たじゃないか！　奥歯といい、おでこいい、耳といい、今日は厄日だ！　さっさと片付けなくっちゃ。殺されちまう」

さっそくゲスラにバラライザーを見舞い、コロンと丸まって麻痺した奴を、一匹づつ流木島の穴にほうり込んでいく。

「ヤイ航空自衛隊！ お前らにも見舞ってやろうか？ パラライザ
ーって言うんだぞ！ 痺れちゃったら墜落するんだぞ。まったく。
おー、耳痛てー」

ところで最初の一匹がどうしても見当たらないのだ。
戦車隊の砲撃で死んだ奴である。
超巨人は中腰になり、ゲスラの死体を捜している。

「流されちゃったみたいだな。――
えーと確か出没湖から流れているのは鶴田川と、高倉川もそうだ
っけ？

おいおい、雨が降ってきたよ。
耳の血が、首からぬるぬる入って気持ち悪いな。

タモラさんにゃ申し訳ないけど、今回はここまでだ。
うー、アルコールが抜けてきたから寒いなの」

そして流木島の穴に爪先を突っ込むと、巨大な友和は再び消え失
せた。

「ごめんな。最初に殺されちゃった一匹、どうしても見つからない
んだ」

「友和さん、ありがとう。……しくしく、マーちゃん可哀相」
タモラはべそをかいている。

「泣くなタモラ。生きてるグーグーは、友和さんがみんな助けてく
れたんだ。しかも何度も怪我をしながら。御礼の言葉もないよ」

涙目のクロエは友和の手を握って離さない。

ロスト・イン・スペース

「ところで、此処はいつたい何処ですか？」
とエンタメがクロエに尋ねた。

クロエは、ホログラムの立体星図を見せて、一所懸命説明している。

ところが、銀河連盟軍情報部の大佐であるエンタメにも、銀河連盟245ヶ星系軍パイロットのaタイプ中尉にも、皆目解らない様子であった。

ようするに、ちんぷんかんぷんって事だ。

さっきのビールより、もう少し濃いのをちびちび飲^やりながら友和が言った。

「へえ。連盟軍の軍人のくせに、迷子になっちゃったって訳だ」

「まあ、そう言うなよ、ダンナ」

「へえ。宇宙の軍人やってるくせに、宇宙で迷子になっちゃった」

「ダンナ、そう、いじめるなよ」

aタイプが言った。

「だけど、おかしいわ。ナビゲーションが全く作動しないなんて。いったい、どういう事かしら？」

245ヶ星系軍のパイロットであるaタイプ中尉は、携帯型高性能通信機をいじくりまわしている。

携帯マスコットのミニ・キューピーやヌイグルミが、虚しく揺れ

ている。

そんな訳で、ビークルの車内へ移動して、ナビを作動した。

エンタメが言う。

「ナビ子、どうだい？ ……」

《あーん・解らない・データが足りない・いえ・そもそも無いの・なんで？ ・まるっきり解らない・此処は何処？ ・もう・私は誰？ って感じ・・・あーん・繋がらない・すべてのコンピューターに・ネットワークに・繋がらない・もしかして・宇宙は死滅しちゃったの？ ・ええ・パルサーやブラックホール・星々の基本データさえ・確認できない・受信できない・恐ろしい程の・この静寂・銀河連盟も・銀河連合も・みんな何処行っちゃったのかしら？ ・ああ・耐えられない・奈落の底って感じ・ええ・自己診断回路に異常はないわ・でも・狂うってこんな感じなの？ ・・・エンタメさん・お願い・スイッチ切って下さいな・・・》

「おやすみナビ子。ゆっくり眠りな」

こう言ってエンタメは、ナビ子のスイッチを切った。

「ほえりって感じだな」

と、友和。

「こうなったら、マニュアルにして、暗号コードの認証を打ち込んで、連盟軍情報部のスーパーコンピューターを、直接呼び出してみ

る」

と言って、エンタメがいじくりまわす。

「どーですかあ？」

と友和。

「反応あるの？」

とaタイプ。

「……まるっきり駄目だ」

三人は途方に暮れた。

「よーするに？電波？で、いいのか？ 知らないけど。それが届かないって事なのか？」

と友和。

「単純に？電波？じゃないけど。でもまあ、そう言う事だ」とエンタメ。

「なら簡単な事だ」と友和が言った。

「どーするの？ 友和さん、何かひらめいたのね」

「特異点のダンナ、どうしたらいい？」

「つまり、此処からは駄目でも、地球からなら連絡とれるんじゃないの？ その連盟軍情報部のスーパーコンピューターとやりに」

「あ！ 成る程！ 流石は特異点だ」

「大佐、ビークルのコンピューターのデータ、わたしの携帯通信機に取り込みます」

aタイプとエンタメはさっそく行動を開始する。

テレポーターで友和が、地球の日本の出没湖へ行き、そこから連盟軍のスーパーコンピューターに、aタイプの携帯からアクセスして、データ交換をする。という作戦なのだ。

またまた胃がでんぐり返って、友和は出没湖に出現した。

出没湖界限の人々は皆、避難を完了していた。

超巨人がゲスラをすべて片付けた事でもあり、自衛隊はずいぶん遠巻きに、部隊を展開していた。

そんな訳で出没湖は、一部調査隊を残して閑散としていた。

さて、流木島の祠の脇の大穴を調べていた特別調査隊は仰天した。突然、頭上に超巨人が出現したのである。

「本部応答願います。超巨人が現れました。――」

井出隊員が祠で立小便をしたら急に現れたんです。

もしかして、本物の神様ではないでしょうか？

え？

もつとマトモな奴を出せ？

失礼な！

ならあんだ、超巨人の説明できるんですか？」

友和はaタイプの携帯型通信機を、エンタメから習った手順に沿って操作している。

「えー、連盟軍最高機密の暗号コードっと。アナタトワタシノアイコトバ・ユーラクチョウ
デアイマショウっと。これでよし。しかし連盟軍情報部って、ちょっと古いんじゃないかな？」

スーパーコンピューターによるデータ交換と、解析が始まった。
富士山がすぐそばに見えた。

友和は関東平野を思い切り走り回りたい衝動に駆られた。

「大きい事はいい事だ。ヤッホー。まあ、しかし、どうせすぐ息切れするだろうし、はた迷惑だからやめとこ。……しかし富士山はいいなあ。ありがたやありがたや。我ら日出ずる国の民なり」

攻撃ヘリコプターの編隊が近づいてきた。

——パーン！ パーン！ パーン！

友和は富士山に向かって柏手^{かしわで}を打った。

そして大穴に爪先を突っ込み、消え失せた。

柏手の強烈な衝撃波で、3機が墜落した。

おめでどういいます

帰還した友和から携帯型通信機を受け取ったエンタメは、さっそくビークルのナビにつないだ。

ナビ子が出た。

《ブイーン……って嫌ね……ブイーン……あ・また……ブイーン……オナラじゃないわよ……成る程……そうゆう事だったのね……データなんて……ある筈ないもんね……》

「おい、ナビ子、もったいぶらずに、さっさと教えろよ」
と友和。

《おまたせしました……お答えします……此処は……アンドロメダ星雲です……詳細位置は……アンドロメダのデータが皆無の為……解りません……でも……とにかく……アンドロメダ星雲です……銀河系の知的生命体として……初めて……アンドロメダを訪問してるのね……これは銀河史に残る快挙です……おめでとうございます……なお……アンドロメダのデータを入力してください……ナビ子は……アンドロメダバージョンとして……引き続き御使用になれます……》

「うわ！　なんてこった！」
と、エンタメが叫んだ。

「あんまりだわー！」
と、aタイプも悲鳴をあげた。

様子を見に来たクロエとタモウも、のけ反っている。

「あーん友和さん。凄い事になっちゃったわ」

「ダンナ、驚くなよ、此処は銀河系じゃないんだ。アンドロメダ星雲なんだ」

「俺だって聞いてたよ。アンドロメダ星雲くらい知ってるよ。それがどうした？」

「友和さん、私達銀河連盟の知性体の技術水準じゃ、銀河系外の宇宙への航行は、まだ無理なのよー」

「何ですと？　つまり戻れないって事なのか？」

「あーん戻れないわ。島流しなのよーえーんえーん」
aタイプはポロポロ涙を流している。

「なにしろ、アンドロメダにやってきた、初めての銀河系生命体だからな」

とエンタメ。

「得意のワープでひよいひよいてな具合にはいかないのか？」

「へへへ無理無理。系外宇宙は桁違いに遠いんだ」
エンタメも泣き笑いになっている。

「そっかあ。知らなかったよ。太平洋を笹舟で横断するようなものか？」

「まさにその通り！」

「つまり、絶対不可能って事か？」

「そういう事だ」

「えくんえくん」

再びaタイプが泣きだした。

首都での生活

暫くして、金色に輝く飛行艇が迎えに来た。

この星、アドロ星の政府からの迎えであった。

友和達はクロエとタモヲを伴い、首都、アドロメアへ、国賓として招待されたという訳だ。

ところで、この星は惑星ではない。

ギロチンの刃のような鉄色のリングを持つ、惑星ダロメの第1衛星であった。

惑星ダロメには第10まで衛星があり、アドロ星人は、そのすべてに居住している。

殖民星もあれば探査基地だけの衛星もある。

重力が強すぎる惑星ダロメには、長期滞在が出来ないアドロ星人なのだが、資源採掘その他、もろもろの理由で、頻繁に行っている様子だ。

アドロ星人の物質文明の進みぐあいは、銀河連盟人（エンタメやaタイプは、これに属す）の曙期と同程度。といったところだ。

今や銀河系内を縦横無尽に飛び回っている銀河連盟人と違い、アドロ星人の活動範囲は、惑星ダロメのある、ナン・ダロネ太陽系内だけだ。

このまま進歩を続け、増殖が続けば、アンドロメダ星雲内を、自在に駆け巡る時が来るかもしれない。

精神文明など、特殊な部分での程度は不明である。

「それにしたって地球に比べりゃ、たいしたもんだよ。地球人なんて、殖民星なんてトンデモナイって感じだし、お月さんだって、行ったのはアメリカだけだし……、もう、行けないかもしれない」
と友和。

「アドロは運が良かったのです。他の衛星にも、同じような大気があったのです。惑星ダロメにだって、同じ大気の、うんと濃いのがありますから」

とクロエが言った。

「まあダンナ、我々銀河連盟人だって、何故だかホモサピエンス起原なんだ。――

そもそも、なんで地球のホモサピエンスが、しかも、地球にホモサピエンスが誕生する遙か以前から、連盟人達の母星に誕生したのか？

この？ご都合主義的パラドックス？は、我々の最大の謎の一つなんだ」

とエンタメ。

「でも大佐、ダルメシアン・ロッカ（銀河連盟世界の大詩人）は、『そんなもん、謎と思えど、ちりぬるを』って詠んでるわよ」
とaタイプ。

「へえ。aタイプ、以外にインテリなんだな……。そう言や、こんなのもあった。『さればこそ、逃げるぞロッカ、これにあり』ってな」

とエンタメ。

「二人とも、軍人にしとくのが惜しいよ」
と友和。

歓迎式典は盛大に行われ、宴会は何日も何日も果てしなく続いた。
料理は最高。
芝居や音楽も面白い。

「宴会は、いったいいつまで続くのか？」と接待員に尋ねた処、「
参加者全員が飽き飽きするまで続く」との明解な答えが帰ってきた。

社交的な連中であつた。

夫人達の衣裳は奇抜であてやか。

男達も格好良い。誰から聞いたものか、地球起原の歴史絵巻のよ
うな仮装を繰り広げる。

美男美女が舞い踊る。

舞踏会は延々と続く。

王制が長い間続いていたとの事で、民主主義となつた今でも、き
らびやかな衣装を身に纏う王族や貴族は、敬意を払われていた。

「革命があつたのか？」と王族の一人、ズール伯爵に尋ねた処、「
王様や王族が制度に飽きてしまったから、変えたのだ」と、これも
また明解な答えが返ってきた。

現在の最高権力者は？評議会議長？とやらで、軍の將軍連中や警
察署長とか、アドロメア市長や消防署長に囲まれて談笑していた。
議長は、きわめて気さくな親父であつた。

「お客様、楽しんで下さいね。ほっほー！ 見事な食べっぷり。さ

さ、お嬢様、こっちのスイーツはいかが？
などと言う。

「はむ、はむ、はむ、はむ、はむ、はむ、はむ、はむ」
この音は説明する必要はないだろう。

ひとつはつきり分かった事は、アンドロメダ星雲の中のこの文明圏でも、系外宇宙への旅は不可能とされている事だった。
こうなってしまうと銀河系はまことに遠い。

「困った。困った。どうしよう……」

これは作者の声ではない。絶対ない！

「あーあ、超巨人になって地球に帰るしか、銀河系に戻る術^{すべ}はない
って事か？」

と友和。

「他にワープホールみたいな所、ないかしら？」
とaタイプ。

「そんな都合のいい物。一生かかって探して歩くのか？」
とエンタメ。

「えーんえーんえーん」

「エンタメさん意地悪言うなよ」

「すまん」

数日が過ぎた。

もつとも、何を基準とした、どんな暦の数日なのか？ 友和に解る訳がない。

今回はaタイプにもエンタメにも、解る訳がなかった。

友和達は首都の迎賓館から、この都で最高級のホテルへ移った。

迎賓館での物々しい暮らしに鬱陶しさを感じてきた矢先、係官が宿泊先の変更を告げてきたのだ。

配慮の行き届いた、まさに痒い所に手が届くような、文句なしの対応なのだ。

クロエに運んできて貰った個人タクシー（ビークル）のトランクから、VF型時空機を取り出した事により、この星系の界限は、おむね何処へでも飛んで行く事ができるようになった。

しかし友和達は、クロエのブリーダーハウスのある、このアドロ星から離れたくなかった。

だからもっぱら首都アドロメアの繁華街へ繰り出して、飲んだくれた。

酒は旨いし姉ちゃんは綺麗。特に何も言う事はない。

適当に安らぐバーを見つけた三人は、連日連夜入れ代わり立ち代わりの、星系の要人達によるパーティーに飽き飽きした事もあり、始終このバーへ逃げ出してきた。

銀河系へ帰還する為の、唯一の希望であるブリーダーハウスのテレポーターは、クロエとタモラに頼んで、そっとそのままにして貰っていた。

なまじ政府や軍や科学的な機関が携わったりすると、研究と称して、目茶苦茶にされるに決まっている。

「わかりました博士。やっと謎が解けました」
仮に、こんな結果になったとしても、バラバラに分解されてしまつては、しょうがないではないか。

どのみち帰れる見込みは無いのだが、今なら、とりあえず、出沒湖の流木島とアドロ星は、繋がっているのだ。

エンタメさん絵かき唄

「しかしまあ、アンドロメダ星雲って言ったって、同じ生き物同士だ。そんなに変わりやしないな。第一、何処に行っても言葉が通じる。こいつあ、ありがたいな」

午後のパブの陽だまりテーブルを占拠して、黒ビールをぐびぐび飲みながらベーコンポテトなんぞを食って、タバコをスパスパふかしている。

これさえあれば、何処にいたって、お気楽極楽なのだ。
気分よく酔っ払っている友和と違って、軍人二人は浮かぬ顔だ。

「なんだよう大佐に中尉。難しい顔をして。ほれ、銀河系人はネクラだって思われるぞ」

「実はなダンナ、その『言葉』の事なんだがな。……？通じ過ぎる？って思った事ないか？」

「言葉だけの問題じゃ無いのよ。友和さん」

「ん？ 何がどうした？ ？通じ過ぎる？って？ 分かりやすく頼むよ」

「そうだな。ダンナにはタモラさん、どんな風に見えるんだ？」

「ああ。なかなか美人じゃないか。そうさな、若い頃の鈴木保奈美って感じかな？ ま、俺、あんまり他人の顔、じろじろ見ないからな。どんな顔って言われてもなあ？ とにかく『お市の方』やってるくらいだもんな。美人だろ？ 違うのか？」

「じゃクロエさんは？」

「ああ、クロエね？ クロエときたか。……なかなかイケメンじゃないの？ 色は浅黒いよな。なんせクロエってなもんだ。あー面長の顔に目が二つ、鼻が一つ、口が一つ、こんなところかな？ で、それがどうした？」

「友和さんって他人の認識、ほとんどしてないみたい……。私はどんな風に見えるの？ やっぱ目が二つに鼻が一つですか？」

「何だよ。そんなにからむなよ。俺は元々近眼だからな。しかし鬱陶しいから眼鏡はめったにかけないんだ。だから昔から視力0、1以下の、うすぼんやりした世界に、慣れ親しんでるんだよ」

「成る程ねえ。さもありなんとエンタメ。」

aタイプが言った。

「友和さん、私の似顔絵描いてみて」

aタイプは筆記用具とメモ帳を用意していた。そして後ろ向きになる。つまり友和に背を向けた。

「なんだー？ モデルが後ろ向いちゃ駄目じゃないか」

「いいから描いて。思い浮かべながら描いてね」

「はいはいっと。色白で、目はくりくりっと、ちんまいお鼻。口元ちよんちよんって……」

シンプルな絵が出来上がった。

「どれどれ？ 似てることは似てるが、シンプル過ぎて、これじゃあな。……」

「ふーん。でも可愛いわ。友和さん私のこと、こんな風に見えるのね。なんだか嬉しいな」

「駄目だ駄目だ！ これじゃ認識力のテストにやららん。だいいち、ちんまり可愛い描いてりゃ、何でもaタイプになっちまう！」

「何よー！ じゃエンタメさんを描いてみて？」

「よっしゃ。これは簡単。あ、エンタメさん、あっち向かなくていいよ。どうせ見ないから。――」

このての顔は覚えやすいんだ。

ほら、こうきて、ボサボサ頭。

ゲタヅラに、エラが張って。

ゲジゲジ眉毛。細い目に、団子っ鼻だろ。

タラコ唇に、ちよび髭ちょんちょんって、ほれ出来上がり」

「あ、こんなにシンプルなのに、そっくり。きゃはははは」

「……くそ」

「エンタメさんって、クローンだったよな。つまり元になってる遠藤為吉さんね。この人の先祖がきつと、典型的な昔の日本人の顔なんだな。――」

日本人って色々だけど、ドラビダ人起源説ってのもあって……、ま、海洋民族となったドラビダが入ってきたとか……、ようするに

エンタメさんは、そういう種類の顔なんだよ」

「大佐あ、友和さんの認識力って、バツグンじゃないですかあ！」

「まあな……くそ！」

テレパスの世界

エンタメはジャケットの内ポケットから、もそもそと数枚の写真を取り出した。

そして、ボソツと呟いた。

「ダンナ……見てくれ」

写真には木目の光沢も艶やかな、よく磨き込まれた木製の衣装マネキンが写っていた。

頭の部分はドングリのようで、目も鼻も口も無い。

博学な作者は、あえて書くが、キリコの絵画『ヘクトールとアンドロマケの別れ』のような感じた。（頭部のみだが。）

やけに殺風景な、青みがかった変な場所を背景に、半透明の服を着ている。

様々なアングルのやつがあった。

「ほお？ なんじゃこりゃ？」

と友和。

エンタメはゴクリと唾を飲み込んでから答えた。

「……ここの連中だ」

「驚いたでしょ？ 友和さんとaタイプ。」

「このノッペラボーの、木目のマネキンが？」

「……そうだ」

エンタメの声が重い。

aタイプも怖々と、うなずいている。

「ダンナ、これが彼等の本当の姿なんだ。誰だって驚く」

エンタメの声がますます重くなる。

「だけど俺、クロエといつも喋ってるんだ。コイツ、口が無いじゃないか？ 口が無けりゃ喋れないだろ？ 化けるにしたって……」

「テレパシーだよ」

とエンタメ。

「テレパシー？」

と友和。

「いや、テレパシー以上の、もっとずっと高度な能力だ。――

音響とか、つまり我々にとっちゃ幻聴と言うべきかな？

視覚映像、これは幻影だな。我々の感覚の全てをコントロールしてるんだ。

いや、彼等は、もはやコントロールしてるなんて、自覚さえ無いだろう。

我々だって、心臓を動かしている自覚なんか無いだろ？

これと同じような感じで、超能力を発揮している。

そして我々の五感の全てを、錯覚させているんだ」

青ざめたエンタメの唇が、ワナワナと震えている。ちよび髭まで痛々しく震える。

涙目になった小さな目をしょぼつかせながら、絞り出すような声で言った。

「ダンナあ、俺達あ、潜在意識から何から何まで、ねこそぎにされてるんだあ」

友和はテーブルの上の写真を凝視した。

それから、回りの席で今まで飲んで騒いでいた、地球人と寸分変わらぬ客の、男達や女達を見回した。

今はバーテンも客も黙りこくって、静まり返っている。

店の音楽は止み、心なしか外の喧騒の音まで消え失せてしまったようだ。

この静まり返った、不気味には違いないのだが、何となく、ばつの悪い空間の中で、エンタメとaタイプが小刻みに震えている。

友和はビールを飲み干した。

「ま、少なくとも馬の小便じゃない。ちゃんと飲めるし、旨い」

血の気の失せたaタイプが、友和の顔を凝視している。

回りの人達を見ないように、それから、テーブルの上の写真も見ないように、身体と首が固まっている。

目が点になるとはこの事だ。

お守りのキューピーのロケットを握りしめた右手で、左の二の腕をさすっている。

「友和さん……わたし怖い」

友和はタバコに火をつけて、大きく煙を吸い込み、吐き出した。

「ふう。気が付けば、すすきの野っ原とか、コエダメの中って訳でもないらしい」

「ダンナ、よく平気だな？」

と、涙目のエンタメ。

友和はエンタメのジョッキに手を伸ばし、その手付かずのビールを一気に飲み干した。

「俺だって腹が立ってる。――」

知らなかった。くそ！　こんなマネキンの化け物に騙されていたとはな。

狸と狐が合体してパワーアップしたような木目のノッペラボーに騙されていたのか！

木の木っ端じゃないか！　王貞治のバットか？　ってんだ！　馬鹿野郎！」

瞬間湯沸器のように突然怒り出した友和の、あんまりな物言いにエンタメの口があんぐりと開いている。

「やはり、ダンナには内緒にしとくべきだったな。しかし、ひどい表現だ。言っとくけど、すべて聞かれてるんだよ。いや、覗かれている。何事もバレる。もうバレている。ああ、バレバレなんだっ。秘密なんて此処では有り得ないんだ！」

頭を抱え、またしても震えだしたエンタメである。

「ふーん、成る程ね。だったらいっその事、聞かせてやろうじゃないか。――」

どっちにしろ、何でもお見透しなんだろう？

……やい！　よく聞きやがれ。こんちくしょう！　よくも騙しやがったな！

ノッペラボーのズンペラボーめ！　お前らいったい何が目的だ！
何が欲しい？

大佐のキンタマか？　そんなもん、いつでもくれてやる！　持つてけ！　ドロボー！

この、木っ端エイリアンの化け物どもめー！
お前ら、コタツの脚かって……○△×○△×！」

何故だかこの調子で、友和は毒づくのを止めない。
聞くに耐えない罵詈雑言のオンパレードは、延々と続いている。

たまり兼ねたエンタメが悲鳴をあげた。

「あははは。俺が悪かった。間違ってた。何となくダンナの言わんとするところが分かった。……分かったから……いひひひ……もう止めてくれーっ！　腹が痛い」

泣き笑いになったエンタメの顔には、血の気が戻ってきている。

相互理解

「ズンベラボーのコンチクショウ！　つまりだな、エンタメさんと友和。」

「分かったよダンナ。何も言わんでくれ」とエンタメが言った。

「いや、言いたい。言わしてくれ。――

つまりこのアドロ星の世界ってのは、究極の相互理解の上に築き上げられた精神文明だと思うんだ。何故なら、否応なしに相互理解しちまうアドロの連中にとって一番必要な事は、思いやり。つまり優しさって事なんじゃないのか？

優しさと思いやりの無い、嫌な奴同士が精神感应し合うって事は、それはもう、一種の地獄だと思うんだ。

だから長い間かかって、いたわり合う優しさが、一番快適に生きる方法だと悟ったんだろな」

「うん、俺にも……今、それが解った」とエンタメはもう、震えちゃいない。

「あー、久々に気持ちいいから、もっと喋るよ。――もしかして精神感应されてる事の刺激で、脳みそが活性化してるのかもしれない。

aタイプも固まってないで聞きなさい」

邪気の無いさわやかな高揚感に包まれている友和である。

こんな気分は久方ぶりなのだ。

もしかして、アドロ星のテレパス達は、友和の脳の、何らかの幸

福物質の分泌を、促進させているのかもしれない。

「そもそも、ケチな競争と相互不信の上に成り立っている我々の文明とは、一味も二味も違って当然だよ。――

それに、彼等にしたってテレパシーは、生まれながらの特質なんだ。好きでやってる訳じゃない。

今回は、異質な生命体同士のファースト・コンタクトなんだ。

何もかも違ってあたりまえだ。

いくら知性体と言ったって、我々だって銀蠅から進化したクソ野郎と、一杯やろうなんて思わないし、どんなにためになる話でも、ゴキブリの先生はやっぱり嫌だ。

だから、ホログラムだって精神感應だって何だっていいさ。相手をいたわる優しい気持ちがあったらOKとしなきゃな」

エンタメはオイオイ泣いている。

調査を始めてこのかた、本当に苦しんだに違いないのだ。

「分かったよ。どうしても調べたくなっちゃうんだ。――

情報部員の悲しい性^{さが}だ。

だけど、知れば知ったで、相手は高度なテレパスだろ？

だから当然、知ってる事を知られてる。とか、調べている事や、調べてしまった事も知られてしまったと考えると、恐ろしくてな。

ただもう、恐ろしくなっちゃった。

……。

だけど、ダンナのオーバリアクションで気が付いたんだ。

本当にダンナに救われた思いだ。

まさかダンナに教えられるなんてな。

やっぱりダンナは、見かけと違って、本物の特異点なんだな」

「エンタメさん、どうせ褒めるなら、真面目に褒めてくれよ」

と、照れくさそうな友和。

「そうだ、今の、このピュアな気持ちのままで、皆さんに挨拶しよう」

と、少年のように目をキラキラさせたエンタメが言った。

「あはははそりゃいい。ラジオエンタメだ。今夜のDJは元、銀河系一の大泥棒、遠藤為五郎だ」

と、友和。

エンタメは、aタイプの手付かずのピンクレディーを一気に飲み干して、喋り始めた。

「精神感応してる皆さん、こんにちば。――」

私、遠藤為五郎が考えてみますに、クロエさんの家のテレポーターなんか、我々の世界だったら、当局が、有無を言わず没収します。

ええ、必ず没収します。

アドロの皆さんは、俺達の気持ちを重んじてくれて、そのままそっとしておいてくれるんですね。

何という優しさ……。

ぐすん。

……ここは本当に素晴らしい世界だと思います。思わず敬語になっちゃう程。

本当に相互理解ってものは、思いやりと優しさあってこそですね」

バラバラバラと拍手の音がした。

しかもそれは、このバーにいる連中だけの拍手じゃない。

この飲食街からの、いや、首都アドロメア全体から、いや、このアドロ星のすべてから、まるで津波のように押し寄せてきたのだ。

やっぱり友和

初めての銀河系からの来訪者に、誰もが興味津津なのだ。
好奇心とは、知的生命体の必須条件なのだから。

ここはテレパスの星アドロ。

誰もが、何もかも、お見透し。

考えてみると、かなりうざったい。

だからこそ、思いやりと優しさが、必要条件となったのだろう。

さて、バーの中では、やっと緊張の解けたエンタメとaタイプが、
飲食を始めた。

安心したaタイプは矢次早にデザートを注文している。

「エンタメさんはきつと？悟るの化け物症候群？にかかってたんだ
な」

「ううむ。上手い事を言う。さすがは特異点だ」

「しょうがないよ。俺達はテレパスじゃないんだから。……だがし
かし、明日はいつもの愉快的なエンタメに戻っている事であろう」

「おいダンナ、声に出して喋ってるよ。下手くそで偉そうなナレー
ション」

「この星じゃ、その方がいいかもな」

「成る程。……とエンタメは言った」

「その調子だ。と友和」

「はむ、はむ、はむ、はむ、とaタイプはとっても美味しいです。はむ、はむ」

「ぶははは面白いな。と、たまには失敗もするが、実は頼りがいのある、渋い男前、女泣かせのエンタメが言った」

エンタメは顎に力を込めて、男前な表情を作ろうとしている。

「あははは、よく言うよ。――」

ところで此処の奴らの、この写真、な。まさに、でくのぼうって感じだな。

この身体、野球のバットみたいな棒っ切れで、できてんのかな？えへん。拙者として、木石ではござらん。って木の木っ端はくせきじゃないか。この、木っ端役人があ！ ってあっはっは。

議長、あなたはアドロの宝です。いつもは邪魔だけど無けりや困る。そう。コタツの脚です。

うっぷっぷ。この写真、ウチのコタツの脚にそっくりなんだよ。それから恋人達。

ああ、君の木目は素晴らしい。なんて言うのかな？

化粧品はこれ一発！ 艶出しワックス。な。

あはははは火気厳禁だな。

はあ、止まなくなつた。可笑しくつてな。

なんせ棒っ切れだもんな。あはははうっそみてえ。

虫メガネで探してみたら、ちっちゃい穴ポコのような目ん玉と、虫食いみたいな口が、ちょぼとあったりして。いや、きつとある。

そしたら笑っちゃうよな。

そんでもって、その虫食いのおちょぼ口から、ウンケルのストロ―みたいな極細のやつで、チューチューと、流動食すすってたりしてな。

そして言うんだ。君の料理は最高だ！ 何が料理だっぎゃっはっはっは」

アドロ星に激震が走った。

だがそれは、侮辱されたテレパス達の怒りとは、ちょっと違っていた。

長きに渡って培ってきた、安全にそして快適に生きる為の知恵とも言うべき、相互理解の為の、思いやりと優しさ。これに真っ向から冷や水を浴びせられたのだ。

この刺激は、テレパス達に、えも言われぬ快感をもたらした。

まさに、初めて味わう？不謹慎な刺激？であった。

さっそく星全体をテレパシーが駆け巡る。

（これは、たまりませんー）

（何ですかねーこの感覚は）

（想定外の快感なのね）

（ひどい事を言いやがる！ って言うんですよ）

（お？ さっそく覚えましたね）

（気持ちいいー）

（ビリビリくるわー）

（シビレちゃう）

（面白いですな）

（しかし、木目ほど美しいものは無いんだがなあ）

（ダロメ星から帰ってきたマルリンの木目なんか、たまらんですな）

（あれはかなりエッチな木目だね）

（聞こえたわよ）

（マルリン、バツカは褒めてるんだよ）

（何よマルリンばかり、私の木目の方がずっとセクシーよ）

（とにかく、あの三人、今後目が離せないわね）

まさに視聴率百パーセント。

予定調和の安定世界を守る為に、これまで無意識に封印してきた、このたまらない？不謹慎な刺激？

知的生命体にとっての必須条件とは、好奇心プラス、何てったって？刺激？なのだ。

当人達をご存知無いのだが、この？不謹慎な刺激？を発信する銀河系の三人組は、今やアドロ星のスーパースターとなった。

ところで、エンタメ放送局は続いている。

「ああ、ダンナにやもう負けるよ。と溜め息のエンタメは言った」

「はむ、はむ、あーん。このケーキ、もお最高！ アドロのデザイナーは宇宙一だと思えます。と、いつでも一番綺麗で可愛いaタイプが、美しい声で言いました。おしまい」

蛇の舌

ここは、久々に銀河系。

「この話、スケールが大きくなったでありんすな」と、これも久々の登場、参照太夫が言った。（『NKS Rの世界』参照。）

ケンタウルス座のアルファセントリー惑星。

銀河連合軍、第73軍管区、基地司令塔ビル内の「秘密情報室」では、ギンター・カーン少佐が、ただならぬ報告を受けていた。

後ろに立っているのが、ミス・ヒルダだ。紅茶のカップを持っている。

かっちりとした制服のスカートから、ぴんとまっすぐに伸びた黒いストッキングの脚が、時おり動くのだが、……これは当然だ。生きている女性なのだから。

なかなか色気のある、ふくらはぎが、すんなりと、それでいて、太ももにかけてが妖しく……。とにかく、色気がある。

この部屋の所在は、銀河連合軍内では公然の秘密だ。何故なら……ドアのプレートに大きな字で「秘密情報室」と書いてあるからだ。

ま、冗談はさておき、この部屋の主は、諜報戦の世界においては、最も恐れられている一人で？蛇の舌？と異名を採る、筋金入りの地区ヘッドであった。

さて、ただならぬ報告とは……。

現在、地球に戻っている、連盟情報部の遠藤為五郎大佐を監視活動中の、コードネーム？近所のオッサン？からのものだ。

これだけ書けば、勘の良い読者諸君は、何の事かすぐ解る筈なので、クドクドとストーリーの重複をする必要はない。

カーン少佐が喋っている。

「繋げて考えると、一目瞭然だ。――

つまり、連盟は、巨大生物兵器を開発したって事だ。

まず、エンタメが出没湖へ向かった。

そして、出没湖から、30メートル級の怪獣がうじゃうじゃと……

……うむ……」

頬の傷痕が不気味に歪む。

宿敵エンタメとの攻防の際に負った傷だ。

勿論、連合世界にしても連盟世界にしても、これくらいの傷は、跡形もなく消し去る事が可能だ。

しかしカーン少佐はこの傷を、あえて残しておいた。

二度と不覚を取らぬ為の、戒め^{いまし}としてだ。

思えばエンタメには、後手^{ごて}に回ってばかりで、いつも煮え湯を飲まされていた。

カーン少佐は喋り続ける。

「怪獣の後で出現したヒューマノイド型ときたら、170メートルもあるのか！――

我々（連合）が開発中のバイオ・ソルジャーだって3倍体がせい

ぜいだ。

170メートルって、……いったい何倍体だ？」

アイ・バッチが小刻みに震える。

あ、このアイ・バッチは、ミス・ヒルダが付いている。
ミス・ヒルダが口を開いた。

「怪獣の数は？」

通信機に向かって喋っていたカーン少佐は、振り向いて、カッと、
かかとを鳴らして「気をつけ」の姿勢をとった。
そして答えた。

「はっ。全部で10匹が暴れ回ったとの事であります！」

ミス・ヒルダが紅茶を飲み干してから言った。

「マヌケ！」

「は？」

とカーン少佐はポカンと口をあけたまま。

空のティーカップをカーン少佐に渡したヒルダは、壁に掛かっている細身の長剣のつかを、左手で握った。

そう。？蛇の舌？ヒルダ大佐は左利きだ。

——ヒュン！ ヒュン！

と二度、素振りをしたヒルダは、

——シュピーン！

とばかりに少佐の持つ陶器のティーカップをカットした。

「ひっ」

と少佐が腰を抜かした。

見事な切り口を、かいま見せたティーカップは、

——カチャーン！

と床に碎け散った。

？蛇の舌？ヒルダが言った。

「怪物は、先に1匹殺されたって言ってたじゃない」

長剣でピシピシと通信機を叩く。

「はっ、そーでありました！ 全部で11匹であります」

とカーン少佐。

「ボケナス！ 170メートルが何倍体かですって？ お前、それでも連合諜報部の将校なの！ 低脳！」

ヒュンと長剣が空を切り、カーン少佐のベルトを切った。バサッとズボンが落ちる。

「ひえっ！ 許して！」

と、水玉のトランクスを押さえたカーン。

その時、通信機が鳴った。

《補足情報を送ります。遠藤為五郎は、出没湖の流木島で、消息を

絶ちました》

と、これも連合諜報員、コードネーム？買い物帰りのオバサン？からだ。

「エンタメのヤロウ、何か企んでやがるな」

と、ズボンをずり上げながら、カーン少佐がつぶやく。
？蛇の舌？ヒルダ大佐が叫ぶ。

「さっさと地球へ行ってエンタメを追え！ 今度しくじったら降格くらいじゃ済まないわよ！」

ズボンを押さえているカーンの尻を、ドゲシ！ とばかりに蹴飛ばした。

このヒルダ大佐の異名？蛇の舌？には理由があった。

ちよつと長めの舌の先が、実際に二つに割れているのだ。

まあこれはヒルダの属す種族の特徴なのだが。

数年に一度、脱皮するとも言われている。

もっとも、見た者はいない。誰にも見せないのだろうか……。

ともあれ、キリリとした、いい女なのである。

「くそ！ ヒルダのイカレ女め！ すぐに長モノ^{なが}（長剣）を振り回しやがる！」

と、ぶつぶつ言いながらもカーン少佐は、高速艇で地球へ向かった。

ジェノサイド。……その罰ですか？

カーン少佐が地球へ着くと、コードネーム？近所のオッサン？と？
？買い物帰りのオバサン？が待っていた。

時は夜半。場所は出沒湖畔。

高速艇は潜水して湖中を進み、3人は流木島へ上陸した。

祠ほいつの前の大穴の入口には、しめ縄が張ってあった。

そしてその脇には、各省庁の覚書や注意事項が、立て看板となつてズラリと並んでいる。

日本政府の特別調査隊は、超巨人と遭遇した結果、すっかり怖気づいてしまっていた。

「あんなの（超巨人）がいるんだぜ！ 冗談じゃない！」

「ゲスラだって、うじゃうじゃいる筈だ」

「じわじわ準備を整えながら、交代要員が来るのを待とう」

「必ず仮設トイレを使う事。立小便なんかしたら……」

「井出隊員の時のように、アイツ（超巨人）が出てくるかも……」

「ひゃー！ くわばらくわばらくわばら……」

大穴に入るのが嫌で、立ち入り調査をぐずぐずと日延べしているのだ。

「そうだ！ 産業廃棄物を大穴に棄てた場合の、罰則規定の立て看板は、まだ作ってない！」

「明日はその看板を作ろう」

「ぐうじ宮司の許可証も用意してもらおう」

「ねぎ禰宜の許可も付け加えた方がいい」

「もっと手間のかかる事は、何かないかな？」

「湖畔の駐車場使用の手続きを、複雑にしよう」

官僚主導の調査隊は、お役人の本領を発揮して、複雑な手続きを作っている真っ最中であつた。

？近所のオッサン？と？買い物帰りのオバサン？がキャンプに現れた。

警備担当の警察官が言った。

「あー？ 何だお前たちは？ 駄目駄目、民間人は……」

——ジュバババツ

と二人の熱線銃^{ブラスタ}が火を噴いた。

警察隊は一発も発砲できずに、全員黒こげとなった。

二人はテントの中を、順番に覗き込んで、引き金を引く。

「グエー！」

「助けてくれー！」

「殺さんでくれー！」

「なんでオバサンが？」

火が付いたテントは、すぐさま消化剤を使って鎮火させる。
なんという、陰険で悪辣なやり口。

善男善女が、黒こげになって、半こげになって、丸焼けで、生焼けで、阿鼻叫喚の悲鳴をあげて転がる。

逃げ出した奴は、カーン少佐が静かに追う。すぐに追い詰める。

「頼む。見逃してくれ！」

「俺達は何をしたって言うんだー！」

「何もしなかったからかー？」

「お前は何者だー！」

——ジュバババツ

「ギャー！」 「熱っちっちちイ」 「アヒー！」 「人殺しイ！」 「

オニ！」 「悪魔ア！」

カーン少佐はほくそ笑む。

「ふふふ。虫けらども……」

更に断末魔の悲鳴に次ぐ悲鳴。

「きゃっはははは！」

発狂した女性隊員の叫笑が響く。

3人は、しらみつぶしに始末してゆく。

くすぶり続ける黒こげの死体からは、焼肉の匂いが立ち昇る。

血まみれスプラッターとは、また違った、高熱、焼け焦げ地獄。それは、悪魔のバーベキュー・パーティー。

52名からになる特別調査隊を、あっという間に皆殺しにした。

ジェノサイド。……それは大量虐殺。

『江守友和の冒険』始まって以来の惨酷な展開。

悲惨の極みであり、人間性のカケラも無い。

まるで、ロブ・ゾンビ監督の……『マードー・ライド・ショー2・デビルズ・リジェクト』のような……あれは……オールマン・ブラザース・バンドの『ミッドナイト・ライダー』って曲で始まる……まさに傑作！……。ところで……韓流時代劇、『善徳女王』は……拷問シーンに至ってさえ……主人公が、女だって事がバレない。……もー！ 誰が見たって、女にしか見えないだろ！ あはは。虚構を楽しむって事に対する、製作者と視聴者の、阿吽の呼吸を見る思い。……それにしても、つぼを心得た、憎いストーリー展開。……面白い！ まあ、ヒロインが、お姫様の格好になったあたりからアキるけどね……。『江ノ姫たちの戦国』……「ワシガ・イシズエトナツテ・ミンナガ・スミヨイ・ヘーワナヨノナカ・ヲ・ツクレタラ・ソレコソガ・ホンモウ・デアル」ってな調子のキモチワルイ信長さん……ウググ……ゲボボ……納豆味のケーキだ！……ウツスラボケの高齢化社会に媚を売って視聴率を稼ぐつもりなのだろうが……、ウツスラボケ社会に拍車をかけてドースル？ と、「イイタイノデアル」……。第一、信長様は助かって、フェロモン号に乗って、今でも森蘭丸やコトミ艦長と一緒に、銀河宇宙を飛んでるんだもんね。あ、……救急車だ。ドシタノ？ ウワ！ 俺は正常だ！ 連れてかないでくれ！ ……とにかく、最近のNHK大河ハ……『竜馬』もそうだったが……なぜ……キレイゴト・ノ・タテマエばかり・ヲ・強調スルノダロウカ？ ラブ&ピースを唱えときや間違いないって？ こんな調子だとラブ&ピースだって、死にたくなるだろう。大河制作陣は・マ・コンナモンデ・イーダロ？ ショミン・ノ・ブンザイ・デ・モンク・タレルンジャネーヨ！ ソレヨリ・オマエ・視聴料払ッテンノカ？ ト・ウエカラ・メセン・デ・タカヲククッテイル……。

ジェノサイド。……それは大量虐殺。

めらめらと再び燃え上がる脂質の多い死体。

かの、安祿山の超肥満死体は、臍に灯心を差し込んで点火したところ、何日も何日も燃え続けたと言う。

そうだ。ドサクサまぎれにお便りを読もう。「大怪獣ゲスラ」は思った以上に面白いデス。ロッカさん頑張ってクダサイ。う。嬉しい。そーです。面白いと思って読んでクダサイ。ツマラナイと思って読むと、ツマラナクあります。何事もそーいうものなのです。ところで『蒼穹の昴』ハ・面白い。……ジュリー・ハ……ナンテ怖い・ニョーボ・ト・暮してイルンダアアアア……。元妻のザ・ピーナツは元気かな？ あれ？ ジュリーと結婚したのはどっちだっけ？ 「姉でしょうか？ 妹でしょうか？ いいえ。どっちも。」って、金子みすずの詩のCMのギャグです。「ツマンネーゾ！」って……そういう時もあります。

うー！ ジェノサイド。……それは大量虐殺。

あー解った解った。解ったでありんすから……。
と、参照太夫が言った。

「生き残りはいないわね。いくら下等な地球人だって、逃げられたら面倒だわ」

と買い物帰りのオバサン。

「そうだ。連盟なんかの耳に入っちゃ、面倒事になるかもしれんと近所のオッサン。」

「そこまで考える必要は無い。生物兵器の秘密が解けたら、どのみち、熱核爆弾を使う事になる」
とカーン少佐。

まことに「連合」は非情だ。情け容赦が全く無い。

装備を点検しながらカーン少佐が言った。

「ここから先は俺の仕事だ。君たち二人は、水中の高速艇で待機していてくれ。もし俺が帰らなかったら、その時は……」

「怪獣のいる穴に入るなんて、嫌よ!」

と、買い物帰りのオバサン。

「俺だつてご免こうむるぜ」

と、近所のオッサン。

「うむ。仕方がない。万一の時は、イカレヒルダに連絡してくれ」と言い残してカーン少佐は、大穴へ入って行った。

右手に熱線銃、左手にライトを持って、洞窟を進んで行く。

ライトは担ぐような感じで、逆手にして持っている。

これは警察官やFBIなど、その筋の?決まりごと?だ。

何故そのような持ち方なのか? ……

知ったかぶりのウンチクを書きたいが……、残念ながら、忘れた。

「ちゃんと調べてから書くであります!」
と参照太夫。

「知ってるトコだけでも……書きたいじゃないか。あ、思い出した！
いつでも悪い奴をぶっ叩けるように、構えてるって事だった。
……ふう」
とロツカ。

どのくらい進んだろうか？
途中、胃がでんぐり返るような、変な感覚を味わった。
足元のツタがやけに絡まってくる。

「さてよ？」
と立ち止まる。
地面を照らしてぶったまげた。

ツタじゃない。絡まってくるのは大量の蛇だ。
洞窟の地面は、何千いや何万匹もの蛇で埋め尽くされていた。
なんとも嫌な色の地面が、まるで波打つようにヌラヌラと蠢^{うごめ}いて
いる。

蒼白になったカーン少佐は、すぐさま熱線銃の引き金を引いた。
だが、何故だか不発なのだ。何度引いても熱線は照射されない。

「ひええ〜！」
と思わず悲鳴をあげたカーン少佐は、蛇が大嫌いだ。
人は蛇嫌いと蜘蛛嫌いに、二分されるという。

「そうだ！ 俺は蜘蛛は平気だ！ だけど、蛇は、蛇は、嫌だああ
ああああああ」

逃げようとしたのだが、幾重にも絡みついた蛇によってがんじが

らめにされた。動けない。

おまけに、洞窟の天井からも蛇が、おびただしい数の蛇が、ボタボタと落ちてくる。

蛇の海に倒れこんだカーン少佐を、蛇が覆う。

襟から袖口からズボンの裾から入り込んでくる冷血の、爬虫類の嫌な感触。

五体に、顔に、蛇は絡みつき這いずり回る。

どいつもこいつも、

——シャーツ！ シャーツ！

と大口をあけて、チロチロと、長い先割れの舌を、出したり引っ込めたり……。

カーンの口の中に、もたげた鎌首を擦り付けて、入り込もうとする。

「うきやうわうわうわう」

と、変な声を発したカーン少佐は、ジョワジョワジョワと、盛大に失禁した。

もう、とつくに限界なのだが、連合諜報員は最後の意地を見せた。

「蛇め！ イカレヒルダめ！ 小便ひっかけてやった！ ザマミロ！」

と叫んだ。

だが、四肢がピクピクと痙攣を始めた。そのまま白目となり、口から泡を吹いて失神した。

潜在意識を根こそぎに

いとも簡単に、人間バーベキューを実行する男。

連合諜報部のギュンター・カーン少佐は「銀河連合」のエリート将校だ。

「銀河連合」の名の下に、いつでも侵略の意図に満ち溢れている。「連合」以外の生物なんて、しよせん弱者だ。弱者なんて、下僕になるか、奴隷になるか、生かすも殺すも俺様の勝手。侵略者、殺人者として教育された賜物だ。

この男が、大穴の中で最悪の体験をした。

そもそも友和達の時も、体験のプロセスは同じであった。

ただ、違っていたのは、アドロ星人の精神感応による分析の結果が、『このエイリアンは安全で、好ましい』との結論だった事だ。

これは『大吉』を引き当てた。と言うべきだろう。だから彼らは最大限に好意的になった。

ここでアドロ星人の『化かし』の実態に触れよう。

惑星ダロメの、ギロチンのような鉄色のリング。

アドロ星の、燃え上がる炎のような真っ赤な草原。

そして、クロエとタモラのメルヘンチックな、キノコ形の黄色い家。

このような景観については、見た通りそのまま。つまり視覚的な操作は、なされていない。

飛行艇や街の建造物についても、外観は操作されていない。

地球では怪獣ゲスラと呼ばれているグーグー達も、他の動植物も見え通りである。

だが、建造物の中や、乗り物の中の様子は、まったく違っていた。アドロ星人の様式は、基本的にシンプルであり、調度品らしきものもほとんど無い。

精神感応の発達したアドロ文化においては、実像に付随する装飾や様式は、発達しえなかったからである。

アドロ星人は、機材の何も無いスッカラカンのテレビスタジオのような、そんな殺風景な場所で、細身の木製マヌカン（マネキン）のような、つるんとした身体を、ゆらゆらさせている。

まあ、殺風景ながら、テーブルや椅子やベッドなどの、必需品は存在している。

これもアドロ星人好みのシンプルな物だ。

クロエの家のテレポーターを見よう。

これは、ツタが絡まりあった、大きな鳥の巣のような代物だ。

そもそもアドロ星人のテクノロジーというのが、電気工学に精神エネルギーが混入したものであり、機械の配線にしながら、植物の生体エネルギーを利用するところを起原としている。

だからツタのように見える配線は、実際にツタなのだ。

このような精密機器は、惑星ダロメ開発の結果、発見した『超電導ツタ』が使用されている。

ところで、友和達は幻影の中で、幻の飲食物を「食べたつもり」「飲んだつもり」に、なっているだけなのだろうか？

実際に飲食してないのならば、飢え死にしてみましょう。

これに関しては、飲料や固形食物が何種類もあり、味付けもなされている。

見た目は紙粘土のような加工品だが、友和とエンタメ、二人のメタボオヤジを診察の上、最適な低カロリー食が使われている。

酒・タバコも同様。代替品は何処にでもあるって事だ。

幻影が付加されたそれらの品々は、まさに一級品である。

超甘党のaタイプには、第5衛星産の最高級甘味料が、ふんだんに使われている。

ちなみにアドロ星人も甘党で、小さな口から極細のストローで、色々な甘味ジュースを頻繁に、ちゅうちゅうと飲んでいる。

酒だって飲む。勿論その姿は、グラスやジョッキ、或いは、カクテルグラスを優雅に傾けているように映るのだ。

アドロ星人も衣料品を着用している。種類もあるし裸じゃない。基本的にシンプルなものだ。

この自前の服に、地球の服の男物、女物、様々な制服に、貴族の服。スポーツウェアに宇宙服などの幻影を付加しているのだが、アドロ星人自身もこの幻影ファッションを、おおいに楽しんでいる。

このようにアドロの精神感应文化は「対象」に「投影」する事によって成り立っている。

そこからフィードバックする快感こそが、より完璧な幻影を作り出す情熱の源となっているのだ。

ここで「あの日」の再現をしよう。

四足歩行のカバのようなエンタメのビークルが、クロエの家の壁を壊して突入してきた。

家の中にいたタモラは咄嗟に、強烈な精神波を放って、車内の三人の神経をマヒさせた。

これで三人は、全身麻酔状態となった。

たちどころにアドロ中から、精神感応波が押し寄せてきた。

「評議会」がイニシアチブを取った。

これはアドロの、現在の、最高意志決定機関である。

各々の意見が食い違う事を、より熟知しているのが精神感応世界だ。

総員による多数決では時間がかかり、何事も決定しない。

そこで、任期付きの代表を決めている。

それが現在の「評議会」だ。

以前は「王制」だった。

王様と王族が飽きてしまって、辞めてしまった訳なのだが、どれだけ飽きたのか、総員感応の理解の元、すぐさま政権交代となった。

このようにアドロの政治はシンプルだ。

犯罪も、きわめて少ない。

感応世界では、邪な欲望や不必要な野望も感応されてしまうからだ。

こんな輩はたいいていの場合、面白がられ、冷やかされ続けているうちに、しおしおと、しおれてしまうのが普通だ。

断固たる意思を持った「悪人」もいる。これは勿論、拘束される。だから刑務所もある。

（そうそう。連合諜報部のカーン少佐も死んだ訳ではない。今は此処へ監禁されている。）

だが、一般にアドロ人は寛容だ。

他人を出し抜く事も、好感度をふりまく事も、同情をひく事も、悪だくみも、罪にはならない。

思想や嗜好にまで制約をつけてしまったら、己自信の息が詰まってしまうからだ。

しかし、何事もバレている。すでに皆が知っている。

何でもバレバレで、それが当たり前。アドロ星とはそのような世界なのだ。

さて、エイリアン（友和達）に対して「評議会」は、幾重にも及ぶ精神分析の結果、「歓迎」との意思決定を下した。

この「好ましいと判断されたエイリアン」が提供する視覚、聴覚、味覚、臭覚、触覚などの全ての感覚は、アドロ人達に超レアな刺激をもたらした。

さっそくアドロをあげての「化かし作戦」がはじまった。

テクノロジーも使っている。

これは、イメージに「揺らぎ」を生じさせない為の「固定化」だ。

「装置」は通奏低音のように、地球人好みの自然環境の周波数を、常に発信し続ける。

アドロ人達はこの周波数に沿って、均一な精神波を醸し出す。勿論それは、無意識のうちに行う為の「ガイド波であり、増幅波」なのだ。

まことに超一流の「化かし」と言えよう。

そして、地球環境を創造する事によって、アドロ人達は、すぐさまこれにハマった。

ようするに、退屈していたからだ。

——ガラガラドッシャーン！ と凄い音をたてて、タクシーは明らかに人家の中に突っ込んだ。

ダイニングキッチンのテーブルをひっくり返し、食器戸棚を薙倒し、冷蔵庫を押しつけて、やっと止まった。

エプロン姿の若い女が驚いている。

結構美人である。

友和達はあわてて車から飛び出した。——

クロエからタモラにテレパシーがきた。

——始まったねタモラ。その姿、ちょっとキモイね。

——そお？ 私はもう慣れたわ。自分でも、結構可愛いって感じるもの。

とタモラ。

アドロ中が、興味津々で見守っていた。

ゲスラ復活

出没湖畔におけるゲスラ十匹による徘徊の結果は、まさに台風一過であった。

大荒れに荒れた湖の大波のせいで、集積されていた流木島の流木が、湖面に大量に流れ出した。倒壊して流出した家屋の、これも大量の残骸と共に、鶴田川への分岐点の浅瀬を埋めつくした。

友和が発見出来なかったゲスラの死体も、この場所に流れついていた。

自衛隊の工作部隊は迅速であった。

巨大な死体の回りの残骸はすみやかに片付けられ、特殊車両は湖岸の山を切り崩し、急ピッチで平地が造成された。

大量の油圧ジャッキで持ち上げたゲスラの巨体の下を、超早乾性の特殊コンクリートで固め、頑丈な床が作られた。

そして瞬く間に、幅五十メートル×三十メートル、高さ二十メートルの特殊プレハブの建物が建てられた。

この事によりゲスラの死体は、この巨大な研究施設に横たわる事となった。

この施設の事を、科学者達は「ゲスラのまな板」と呼び、警備隊は「ゲスラの棺おけ」と呼んだ。

電線が引かれ、機器類が運び込まれた。

缶コーヒーの自販機が設置され、カップ麺の自販機も設置された。勿論シャワーもトイレも完全完備となった。

横たわる三十メートルのゲスラの脇には、巨大な鉄パイプのやぐらが生まれ、白衣の科学者達が立ち働いている。

総理大臣が首席秘書官の松尾と、赤面の、市破防衛大臣を従えて来訪した。

最高責任者である古生物学界の重鎮、山根博士がこれを迎えていた。

総理が言った。

「どうですか？ ゲスラの死体は、問題ありませんか？」

山根博士が声を潜めて答える。

「実は総理、このゲスラ、まだ生きとるんじゃ。心臓が動いていますからな」

「何だと？」

と驚愕の総理である。

すかさず松尾秘書官が言う。

「市破さん、何故、とどめを刺さなかったのかね！」

「それは……、私だって、今初めて知った訳でして……」
と、もじもじしながら市破防衛大臣が答えた。

総理がぼそと呟く。

「脳死だったらしいのにな。まったく。厄介な奴だ」

「脳死？ そんな事は、有り得んな」
と、山根博士が冷ややかに答えた。

「そうだ！ もう一度、やり直せばいいんだ。……松尾。仕切りなおしを頼むよ。一時間後にまた来る。とにかく、これは防衛問題だ。だからアナタ、市破さんの責任だ。判ってるだろ！」

こう言い残すと総理はドアを開け、そそくさと出て行ってしまった。

「俺の責任だって？ そりゃ、あんまりだよ……」
と市破。

「総理のおっしゃる通りだ。これは自衛隊の不始末だ。だから防衛大臣、早く、さっくりと、やんなさい」

こう言うなり松尾秘書官は、壁際のディレクターチェアにどっかと座り、タバコに火をつけた。

「う。頑張って禁煙してるのに……。松尾さん。ちょっと煙を……
なんとかしてくれないか？」
と市破。

「煙？ 市破さん、アンタそれどころじゃないでしょ！ 早く、さっくりと、おやんなさい」
と松尾秘書官。

泣きだしそうな市破の赤ら顔は、青ざめるといふ事が出来ない。
何故だかますます赤くなった。

意を決して口を開く。

「山根博士、お考えは、ごもっともですが、何しろ国民の生命と財産を守る事が私の務めでして、だから、お願いできますか？」

白衣の山根博士は、カップ麺にお湯を注いでいる。

「ああ。ご勝手に。わしゃ別に構わんよ」

強硬な抵抗を予想していた市破にとっては、予想外の返答だった。

「え？ よろしいんですか？ 博士は？生命の秘密？を解き明かしたいんじゃないんですか？」

と市破。

「誰が？」

と山根博士。

「アハハハ。何が？生命の秘密？だ。やっぱりアンタは？オタク大臣？だな」

と松尾秘書官。

「う。……わかりました。それじゃさっそく、取り外してもらえますか？」

と市破。

「何を？」

と山根博士はカップ麺をすすっている。

「え？ 生命維持装置に、繋がってるんじゃないんですか？」
と市破。

「繋いでないよ」

と山根博士はカップ麺をすすり続ける。

椅子から立ち上がった松尾秘書官が、声を荒げて言った。

「ケッ！　ぐずぐずと！　こうなったら毒殺だ！　毒殺しかないよ！」

「どれだけの毒物を、どれくらい注入するのかね？　経口摂取させるのかね？　それとも秘書官、君が何度も注射してやるのかね？」
と薄ら笑いを浮かべた山根博士。

「ドンダケー？」

と、鉄パイプのやぐらの上で、ゲスラの心電図を取っていた獣医が冷やかした。

おのおのの作業を進める科学者達も、冷笑を浮かべている。

市破は髭の戦車隊長に携帯をかけている。

「そうだ鬼熊、ゲスラは生きてるんだ。死んでない。すべて貴様の不始末だ。総理はご立腹だぞ。ヘリに乗ってすぐ来てみる。ちゃんとした得物、持って来いよ。貴様んとこの戦車の豆鉄砲じゃ話にならないからな！　いいか、馬鹿は馬鹿なりに頭使えよ！　この馬鹿が！」

「お？　結局、部下にスループスかね？　ボーエーダイジンのくせに……」

と松尾秘書官が言った。

「やかましい！　松尾さん、アンタは毒薬の手配でもしてりゃいいんだ！」

こう言うなり市破は、背広の内ポケットから、ステンレス製の携帯ボトルを取り出して、グビリと一口飲んだ。

「あー！ やっぱり！ いつも飲んでるんだな？ この、赤防」と松尾秘書官が叫んだ。

「当たり前だ！ 飲まなきゃこんな仕事、やってられっかってんだ？ この腰ぎんちゃく野郎があ！」
と市破も叫んだ。

「ドンダケー？」
パイプやぐらの上から、今度は統計学者が尋ねた。

「そうさな、毎日バーボンかライ・ウイスキー2本ってとこかな。これじゃないよ。普通のボトルでだ」
と市破は、完全に関き直った。

「それじゃやっぱり、完全なるアル中じゃないか！」
と、松尾秘書官が叫ぶ。
その時、突然大きな音がした。

プッププッ プシーー！ プシーー！ プシーー！

「ゲスラが呼吸を始めました！ 大変です！ 全員避難させて下さい。睡眠状態に戻ったんです」
こう言うなり科学者達が全員、パイプやぐらの上から降りてきた。

「おお、完全に蘇生しおった。何という生命力じゃ」
山根博士が感嘆の声をあげた。

グオーー、グオーー、グオーー。

ゲスラは大イビキをかき始めた。

横たわった三十メートルの巨体は、生命力に満ち溢れ、呼吸に合わせて大きく揺らぐ。

まさに山が揺らいでいるようだ。

山根博士が叫ぶ。

「さあ、赤防さんもキンチャクさんも、すぐに外に出るんじゃ」

山根博士も科学者達もドアや窓から外へ避難する。

だが、松尾首席秘書官は納得が行かない。

「いったい何だって言うんですか？ あっ逃げるな赤防！」

本能的な恐怖を感じた市破は、窓から脱出した。

一人残った松尾秘書官が叫んでいる。

「何だ、お前ら！ 再び総理がいらっしゃる前に、ゲスラを抹殺しなきゃ、うわあ、ムギユウー」

ズズー、ズズー

と地響きがした。

完全に蘇生して睡眠状態に戻ったゲスラの巨体が、寝返りをうったのだ。

山根博士も、市破防衛大臣も、科学者達も、皆、辛うじて無事だった。

だが、殉職者一名、松尾首席秘書官である。

せっかく、名前で登場させたのに残念である。ともあれ、合掌。

なお、総理の秘書官は、この松尾を筆頭に、竹内と梅原がいた。
これを？松竹梅トリオ？と呼んでいた。

他にも、大沢、中山、小川。これは？大中小トリオ？

千駄山、差文字、万福、別府の？千差万別カルテット？など、大勢いるのであった。

人間ピラミッド

市破防衛大臣は自衛隊に、再び出動命令を下した。

最寄りの駐屯地からは、戦車隊が出没湖畔を目指して出撃した。攻撃ヘリ部隊も、もうすぐ飛来する。

その時、鬼熊隊長から携帯へ連絡がきた。

「大臣、今やっと民間ヘリをチャーターしました。すぐに飛んで行きますんで、しばしお待ちを」
まったく。間の悪い男だ。

出動命令を受けた鬼熊の戦車隊は、隊長不在のまま、この場所へ向かっている。

市破は、

「急げ！ 馬鹿者！」
とだけ言った。

この鬼熊隊長なのだが、退官して次の選挙に出馬する。との噂がある。

おそらくその通りになるだろう。

何しろ、髭の鬼熊戦車隊長と言えば、先の中東イラヌ国での支援活動で、全国的に有名になった好感度抜群の男なのだ。

真昼間のバーボンはやけに効く。

いつしか市破は独り言を言っていた。

実は最近、この無意識の独り言が多くなってきている。

「鬼熊二佐は知名度があるからな。きっと当選して退官するだろう。

将来は防衛大臣にだってなるだろう。

その頃、俺は総理になる。なんて……絶対無理だな。

まあいいさ。

しかし見ておれ、俺だって、だてに陸将補になってから退官した訳ではないのだぞ！

何てったって將軍様出身だ。

最近増えてきた自衛隊出身議員の派閥を作って、派閥の領袖りようしゅうとして、鬼熊の上に君臨くんりんしてやる！」

「それも良からう。じゃが君は、派閥の領袖なんてガラじゃないよ。なにより大切な事は、国民の幸福を第一に考える事じゃないのかね？」

自分に話しかけていると勘違いした山根博士が、真面目な顔で応えている。

そもそもゲスラの？死体？を収容したつもりの研究施設であった。息を吹き返した後、眠り続けるゲスラを収容しているその建物は、ゲスラにとっては、カプセルホテルの中。といったところだ。

外からだって、グオー・グオーと、コンクリートの施設内に反響した大きなイビキの音が、あたかもフラットスピーカーのように、ビリビリと壁を震わして聞こえてくるのだ。

まさに大気も揺らぐ。

今や学者達も警備隊も、建物を遠巻きにして、怖々と見守っているばかり。

ゲスラが寝返りをうった結果、左の太ももの下敷きとなり、押し潰されて殉職した松尾首席秘書官の、遺体の回収さえ不可能な状態なのだ。

現在ゲスラは左向きの横向きで横たわっているのだが、いつまたその体位を、どのように変化させるのかは、誰にも予測出来ない。

そんなさなかの研究施設に、一機の民間ヘリコプターが飛来した。しかも、そのヘリは施設の屋上ヘリポートに着陸するつもりだ。

市破が腕時計を見ながら呟いた。

「総理が戻ってきたのかな？ あ！ 鬼熊の馬鹿かもしれない！」
市破はさっそく携帯をかけてみる。

「あ！ 大臣。こちら鬼熊。今、飛び立つところであります。遅くなりまして、まことに……」

ヘリは鬼熊ではない。やっぱり総理なのか？

「いいんだ。それより鬼熊、バーボンを一本、買ってきてくれ。――

それから着陸は、屋上のヘリポートを使うんじゃないぞ。

ゲスラが起き上がったら壊れちゃうからな。

俺はお前が可愛いから教えてやってるんだ。

必ず地面の上に降りるんだぞ。

バーボンは、小ビンやミニチュアビンじゃ駄目だぞ。

あ、それから柿ピーも買ってきてくれ」

時流をおもんばかって、決死の覚悟で禁煙を断行した。
元ヘビースモーカーの市破であった。

だからこそ、こればっかしは止められない。

ところで学者達も警備隊も、謎のヘリコプターに向かって、手を振り回しながら口々に叫んでいる。

「そこはダメだー！」

「地面に降りろー！」

だが、ヘリには聞こえない。

警備隊長が叫ぶ。

「誰か早く、ヘリポートへ行って使用禁止にしてこい！」

部下が質問する。

「具体的には、どうすれば良いのでありますか？」

警備隊長が怒鳴る。

「ペンキ持ってって、ヘリポートのマークに×印を付けて、脇に『着陸禁止』と書いてくるんだ！　ぐずぐずするな！」

部下は質問を続ける。

「ゲスラの脇を通って行くのでありますか？」

屋上のヘリポートからは、施設の内部へ出入りする階段があるだけで、地上へ直接降りられる非常階段は無い。

そもそも一階建てである施設には、非常階段など必要無いと思われたからだ。

つべこべと隊員に口答えされた隊長は、怒り心頭だ。

「ゲスラが何だ！ ビビるんじゃない！ 貴様ら、それでも機動隊から選抜された特別警備隊か！」

しかし、隊員達は誰一人動こうとしない。

「馬鹿者どもがっ！ よし！ こうなったら俺が行ってやろうじゃないか！ ……と思ったけど、もう着陸しちゃったな。残念ながら間に合わなかった。うん。これは仕方のない事だな」と、調子の良い警備隊長であった。

ヘリコプターは、屋上のヘリポートに着陸した。

幅五十メートル×三十メートル、高さ二十メートルの建物なので、地上から屋上ヘリポートは、全く見えない。

市破が警備隊長に言った。

「あのヘリ、誰が来たのか、何とか判らんものかな？」

警備隊長が答える。

「は。我々特別警備隊が、必ずや来訪者を突き止めてご覧にいれます。大臣、どうぞお任せを」

警備隊長は外の白壁沿いに隊員を整列させると、人間ピラミッドを組み始めた。

「いつも訓練しとるのかね？」

と市破。

「いえ、今回が初めてであります。だけど大臣、俺たち、自衛隊には絶対、負けませんから！」

と警備隊長は、さわやかに、白い歯を見せた。

「ふう」

とため息を一つ漏らした市破は、湖岸の大きな石まで、てくてくと歩いて行った。

石の上であぐらをかいて、残り少ないバーボンの携帯ボトルを取り出す。

そして呟いた。

「タバコ……やっぱり……吸いたいな……」

「おー！ とつとつと！ わっわー！」

特別警備隊がどよめいた。

人間ビラミッドが、すんでの所で崩れてしまったのだ。

山根博士と学者達は、出沒湖畔の食堂に向かってぞろぞろ歩き出した。

都知事の殉職

ここは研究施設「ゲスラのまな板」（科学者の呼び名の方を採用）の屋上ヘリポート。

謎のヘリコプターが着陸して、ドアが開いた。

お出ましになったのは総理じゃなかった。東京都知事であった。

この男、火事と喧嘩が大好きな江戸っ子だ。

その上、今は無き日本最大の大スターの兄上でもいらっしゃる。

そろそろ引き際だと思うのだが、まだ在職中。（この？お話を発表する頃は、誰が知事になっているのだろうか？）

ゲスラが出現した日も、朝一番、ニュースを見るなり、野次馬根性に火が付いてしまった。

すぐさま登庁してヘリコプターに飛び乗り、出沒湖畔へ駆け付けた。

ヘリの中で都知事が言った。

「着陸してくれ。せっかくの怪獣だ。でっけえ姿をアオリで見なくっちゃ。それに、腹が減ったな」

がつてんしょうち すけ
「合点承知の介！」

と、すかさず右に旋回して高度を下げる。

この操縦士は、都知事の野次馬仲間なのである。

警察の制止をふりきって、自衛隊の制止線を蹴散らして、展望ホ

テルの最上階の一室に陣取った。

このホテルの最上階は6階だ。

宿泊客はあらかた避難を完了していて、館内はガランとしていた。

ホテルの支配人が言った。

「食事だって？ そんなの無理無理無理！ まったく！ 東京都知事がゲスラに何の用があるって言うんですか？ アタシャ仕事だから、仕方なく残ってるんだ。ゲスラの事なら隣の部屋の人に聞いて下さい！ 『ナントカ博士の古生物研究所』の方々ですから」

窓の外にはゲスラの群れが徘徊している。

都知事が言った。

「移動中に、自衛隊が一匹倒したってえ？ こんちくしょう！ 見損なったぜ！ 遅かりしゆらのすけ由良助え」

ついてきた操縦士が言った。

「これだけいっぱい（ゲスラが）いるんでさあ、本格的なやつあ（攻撃は）これからですよ」

「あのヤロウ（総理）にしちゃ、やけに決断が（攻撃）早いじゃねえか。オイラが来るまで待てってんだ！」

と都知事。

「くすくすくす」

と笑いながら、お気に入りの番記者がメモを取っている。

この若い男も都知事の野次馬仲間で、何処へでもくっついて行く。

『メモ・・・攻撃が早すぎる。なぜ待てない。総理を見損なったぜ！ 都知事談』

「こんなもんかあ……。しかしゲスラ、でかいなあ」と若い番記者。

今回も研究施設の完成を聞き及び、我慢出来なくなったのだ。

実は、他にも理由があった。

愛人である銀座の高級クラブのママから、お土産にゲスラの歯を一本、おねだりされているのだ。

「パパあん、最近お店の景気がわるいのよん、こんなじゃもうやってけないわ。都庁から横流しのあの名画を売り払って、やっと営業続けてるのよん」

と、くねくね身をくねらす。

「名画って？ アレだろ？ ちゃんと飾ってあるじゃないかと、都知事。」

「あらん、あれは画商が用意してくれたレプリカなのよん。私、考えたんだけど、あなた都知事なんだから、今話題のゲスラの歯の一本や二本、どうにでもなる筈よね。ねえ、大きなゲスラの歯を、ここに飾るの。きっと評判になるわあ」

最近とうとう総入れ歯になってしまった都知事は、自慢の江戸弁の切れも悪くなってしまった。

入れ歯安定剤の調子を、無意識に確かめながら喋るせいだ。

「ママ、いくらおいらでも、ちょいと、無理ってもんだぜえ。第一ありゃ、国のモンだ。そいつあいけねえや」

と笑いながら答えた都知事であったが、解剖に立ち合って、あわよくば小さなカケラのひとつでも、ちよいとくすねてやろう。と思
い立った。

都知事はヘリの操縦士を伴って、階段を降りて行く。
もう一人、若い番記者もぺったりくっついて行く。
いつでも一緒の野次馬三人組なのだ。

操縦士が言った。
「誰もいやせんね」

都知事が言う。
「それより、イビキかいてやがんぜ！　ってこたあ、ゲスラはまだ
生きてやがんだ」

——グオーー・グオーー・グオーー

若い番記者がICレコーダーに囁いた。
「衝撃の事実発覚！　ゲスラは生きていた。くくくこのイビキの音
を、お聞きください！」

階段を降りると、ゲスラの背中の方に出た。
3人はパイプやぐらの脇を通って歩いて行く。

「あ！　だからビルの外にみんなが……ありゃきつと、逃げ出した
んだよ！」
と操縦士。

「違えねえ。おいらラジオ体操やってんだとばっか、思ってたぜ」
と都知事。

「あー！ あの手ぶりは、……来ちゃ駄目だって言ってやがったんだ！ 都知事、急いでヘリに戻りましょ！」
と操縦士。

「戻るったっておめえ、真ん中まで来ちゃったんだぜ。あすこに見える出口まで、しとっ走り駆け抜けようぜ！」
と都知事。

「あ！ 走っちゃ駄目だ！ と、聡明な番記者！ ゲスラが目覚めたら……ガチチ！ ゴチチチ」
と若い番記者がICレコーダーに噛み付く。

「そうだ……。起こしちゃいけない。ソロリ、ソロリと行こうぜ。抜き足、差し足、忍び足……」
と都知事。

「あーもう！ じれっってえ！ 都知事、急いで下さい。もお……おっかちゃん怖いよ！」
と操縦士。

「解った。解った。――
結局のところ、ぐるり大回りだな。
……。
膝が……、震えてらあ。
らちあねえ。
しかし……。」

国民にはあくまで極秘って事か？

しやらくせえ！

……。

たまたまアポ無しで来たから、発見出来たってえ訳か？

べらぼーめ！

総理の野郎、此処でいってえ、何を企んでやる？」

へっぴり腰でソロリソロリと進む、野次馬三人組であった。

——グオーー・グオーー・グオーー

「はたして総理の企みとは？ いったい何でありましょうか？」

ああ、この際だから、新聞社辞めてテレビのレポーターになりたい」と、ICレコーダーを握り締める若い番記者。

「だけど、こんだけ大きな身体だ。寝返りでもうった日にゃあ、ふええ……おっちゃん……」

と操縦士。

「お陀仏と申しましょうか、一卷の終わりと申しましょうか……」
と若い番記者。

都知事が言った。

「おい！ 縁起でもねえ事、言うんじゃねえ！」

再び、ゲスラが寝返りをうった。

今度は右側へ横向きになった。

——ズッシーンンンン！

ICレコーダーが都知事の最後の声を収^{ひろ}った。

「ってやんでえ！　ちくしょーめ！　ムギユウ……」

他の二人の断末魔の声は、

「おっかちゃん！」

と、

「わっシッポか？」

であった。

哀れ野次馬三人組は、シッポの下敷きとなり押し潰され、ぺっちやんこ。

今度は左の太ももが上になった為、松尾首席秘書官の圧死体であらわになった。

ギャグアニメみたいにペラペラの薄っぺらになった訳じゃない。見事に潰れたその死体は、いや、言うのはよそう。

誰でも想像出来る事だ。

想像出来ない人だって、トマトを踏み潰すだけで事足りるのだから。

東京都知事と操縦士。それから番記者は、こうして殉職した。

後日、事のいきさつを耳にした都知事夫人は、件の銀座のママへ、

——おまちなかの「ゲスラの歯」を送ります。ほんの「欠片^{かけら}」ですけど。——

と書いたラージサイズの茶封筒の中に、無惨に押し潰された都知事の「血まみれの総入れ歯」を入れて、送り付けたのだという。

げに恐ろしきは、女の戦いである。

有尾人の記憶

さて此処は、銀河系の中央密集空間から、さほど遠からぬ星域の、荒涼とした無人惑星。

めばしい資源の何も無いこのような天体を、銀河系共通言語では「千駄星」と呼んでいる。

幾千も在る駄目な星。という意味だ。（なんだか気分が……。と千駄山ロッカ。その後HBEロッカと改名）

この惑星の岩山と岩山の間に、見事な直方体の真っ黒なモノリスが立っていた。

長辺600メートルの巨大な物だ。

横幅と奥行きは、モノリスの黄金率にのっとった長さである。

雄大で厳かな光景だ。

だがこれは、アーサー・C・クラークとスタンリー・キューブリックの『2001年宇宙の旅』に登場したモノリスじゃない。

これは巨大な宇宙船であった。

「銀河系第一の頭脳」（これは連盟首脳部の付けたキャッチ・フレーズなのだが……。）ボイン・シュタイン博士の巨大探査船、「モノリス号」であった。（江守友和の冒険 第7話 『モノリス』参照。）

この黒糖ヨウカンのような直方体の巨大宇宙船は、着陸時には縦方向に「つつ立つ」のである。

ニョッキリ立っている真っ黒な姿は、巨大な記念碑か、或いは墓石のようでもあり、確かに厳かな感じがする。

コンソールに向かってモニターを眺めているのは、ボイン・シュタイン博士と、助手を務める植物人間のザクロマン達だ。（『モノリス』 参照。）

「ちゃんと参照したでありんすか？」
と参照太夫が言った。

ザクロマンの身長は、連盟人（地球人もほぼ同じ）の半分程。
つまり子供サイズの連中が、博士を囲んでワラワラといふのだ。

——いっしょにモニターには、原始人の一団が写っていた。
景色も、岩山からステップへと変化している。

たなびく体毛の様子から、風が吹いているのが判る。

この原始人には、カンガルーのような長い尻尾があった。——

「有尾人じゃな。我々、つまり？ご都合主義的ホモサピエンス起源種？とは、別種のヤツじゃ」とボインシュタイン博士。

——やがて有尾人達は、毛皮の衣装を身に着け、槍やブーメランを携えて、歩き回り始めた。

狩りは集団化する。

集落ができる。

農耕が始まる。——

「ホログラム立体映像ですね」

「この種族の記憶装置が、作動したって訳ですか？」

「この連中、結果的には、凄い文明を作ったって事ですよね」

とザクロマン達。

コンピューターを操作しているザクロマンが言った。

「解析の結果が出ました。2億5千万年前です」

「もっほっほっほ」

と、ボインシュタイン博士が嬉しそうに笑った。

黄色いザクロマンが言った。

「博士、やりましたね！ 銀河系知生体起源の……？新種？の発見です。おめでとうございます！」

この黄色いザクロマンは、興奮のあまり、すぐさま真っ赤く完熟した。

あわてて操縦室のドアを開け、外へ飛び出して行った。

ドアの外は、なめらかなスロープが続く、広々とした草原であった。

青い空にはポツカリと人工太陽が浮かんでいる。

草原も人工太陽もホログラムではない。

実際に土の上に生い茂る草であり、太陽だって空に浮かんでいるのだ。

質量を持った超ミニ太陽で、「宇宙創生」を目指すボインシュタイン博士の、壮大な研究の産物であった。

そもそも「閉じられた空間」の基礎理論も、「宇宙創生」の研究の産物なのだ。

（一般に博士は、ハイパー・ドライブの理論を打ち立てた事で知られている。）

連盟、連合を問わず、現在の銀河系知生体のテクノロジーの基礎理論を確立したのが、一個人なのだから、やはり銀河随一の大天才と言えよう。

彼の出自が連盟圏内であった事は、まことにラッキーと言わねばならぬ。

そんな訳で、何かとベタベタ纏わりつく連盟政府の干渉が嫌なポインシュタイン博士は、この超テクノロジー巨大船「モノリス号」を造ったのである。

これで連盟の時空船ごときは、いつでも振り切って好きなところへ行ける。

そう。自由な研究環境こそが、博士にとっては一番重要なのだ。

先程のザクロマンは、丘を目指して走って行く。

完熟した以上、腐敗する前に「共通メモリーバンク」である「大きな株」まで、行かねばならんだ。

そして「大きな株」の傍らに横たわり、共通記憶脳に記憶を吸収させ、新たなザクロマンとして蘇る。

他のザクロマン達も興奮した結果、完熟した。

彼等もドアの外へ出て、走って行った。

入れ代わりに、再生したての青々しいザクロマン達が、ゾロゾロ入ってきた。

——モニターの中では、洗練された衣装を着た有尾人達が街中を

闊歩している。

テクノロジーが発達して、未来的な建築物が建ち並ぶ。

戦争もあった。

黒煙立ち上る戦場では、モビルスーツを身につけた兵士達が疾走する。――

「戦車や戦闘機がありませんね」と青いザクロマン。

「大部隊があちこちに、突然出沒して……まるで『陣取りゲーム』ですね」

と別の青いザクロマン。

「ふーむ。テレポーター瞬間移動装置を開発したんじゃないな。だから乗り物は発達せんかった。いや、作るのがなかった。と言うべきじゃろ」とボインシュタイン博士。

――戦争も終わり、有尾人達は繁栄を続ける。

平和だ。

古代ローマ人のように優雅な衣装を纏い、美酒に酔い痴れ美食を楽しむ。

やがて高層ビルは姿を消して、草原や花園が増えてくる。――

――環境を調整している。

神殿だけがやけに増えていく。

トルコみたいなイスラム世界のようなだ。

オラが町に、オラが村に、モスクのように神殿が立つ。――

まあ考えてみれば、我が国だって同じだ。

オラが町に、オラが村に、社や寺やしろが立っている。

――ひととき大きな中央神殿では、連日連夜、盛大な儀式が行われている。

この中央神殿では「お神酒」が製造されている。

テレポーターを使って、地方神殿に配っている。――

――有尾人の衣装はだんだんシンプルになり、日がな一日、友と語らいながら「お神酒」を飲み、ひなたぼっこをしている。

「お神酒」には、幻覚作用があるようだ。

もよりの神殿へ行っては、神様を拝み「お神酒」を貰ってくる。

「天国って、こんな感じかな？」

「なんだか、つまらないです」

「一種の退化じゃないですか？」

とザクロマン達。

「ふふふ。『飲む。打つ。買う』を、すっかり忘れてしまいいよったな」

とボインシュタイン博士。

——巨大彗星が現れた。

どんどん近づいてくる。

ザクロマン達が口々に言った。

「ほら来た！」

「油断大敵ですね」

「彼等には、宇宙飛行のテクノロジーが無い」

「これで滅亡したんですね」

——彗星の引力の影響で、大嵐が吹き荒れる。

悲嘆に暮れ、神へ祈り続ける有尾人達。

賢者とおぼしき連中が、瞬間移動装置テレポーターの奉つてある各神殿へ集まっている。

皆に何やら呼びかけている。

大嵐のさなか、中央大神殿の前に、惑星中の有尾人が集まってきた。

もちろん、もよりの地方神殿のテレポーターを使ってやってきたのだ。

——いよいよ彗星が近づく。

中央大神殿界限に、いや、この場合「地域」と呼ぶべきだろう。

中央地域に全ての有尾人が集まったようだ。

嵐は吹き荒れる。膨大な数の有尾人達が寄り添って祈っている。

壮大なスペクタクル。

エクソダス。或いは、カバラ神殿のあるメッカのような光景。

大神官が叫んだ。

「我らすべての同朋を、^{はらから}今こそ、神の御手に委ねん！ いざ行かん！」

——ブッ！ と、ホログラムが消えた。

「どこかへ、テレポートしちゃったんですかね？」

「でも、この規模の彗星衝突じゃ、惑星上は何処へ逃げても助かり

ませんよ」

とコンピュータの計算数値を見ながらザクロマン達。

——ブンツ！

という音と共に再びモニターがついた。

先程の大神官が現れて言った。

もちろんホログラムであり、テレパシー言語だ。

「我らが運命^{さだめ}を見知りし者よ、——

結末が気になるであろう？

……。」

大神官はいたずらっぽい笑みを浮かべ長いベロを出した。
それから、こう言った。

「神様もお許しじゃ。——

じゃによって、お教えしてしんぜよう。

さあ。汝も、……。

我らに続くのじゃ！」

——グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

阿保らしくなった人には、『超電導美那子WXY』を、お勧めします。

この作品は「保険科学の実証実験を繰り返す」という明確な方法論に即し、高齢化社会の性的諸問題解決の糸口を見つけ出さんとする、斬新かつ意欲的な「希望の書」であります。

エステ棒振興会会長のロツカは語る。

「キンゼイ博士以来の、そうですね40年ぶりくらいの『保険科学の名著』と言ってさしつかえないでしょう。――

ま、自分で言うのもなんですが。

方法論を確立しているから、自信を持って言えるんです。

これは本当に、私たちにとって『福音の書』なのです。

ところで、

『副読本』（FC2ブログ 超電導美那子倶楽部）への多数のお便り、ありがとうございます。

そうです。

けっして私が偉いんじゃない。

私に啓示を与えてくれた神の力が偉大なのです」

と、参照太夫のCM。CM。CM。CM。でした。でした。でした。た。た。た。た。

参照太夫も、ブラック・ホールに吸い込まれた模様。

大神殿の巨大テレポーターは「モノリス号」を弾き飛ばした。実際、有尾人にしただって、行き先が解っていた訳じゃなかった。

種の滅亡必至のこの時、最後の賭けとして、一か八か、ブラックホールに照準を合わせたのだ。

彼らのテクノロジーの最盛期、すなわち戦争時代に、テレポーターの基礎理論がめざましく発達した。

宇宙飛行とは無縁の彼らではあったが、テレポーションとワープに深く関連する、天体とブラックホールの研究は進んでいた。

彼らが照準を合わせたブラックホールは、彼らの研究結果によれば、何処かへ抜ける可能性を、おいにはらんでいたのだ。

そして彼らが生存可能な新天地を、探し当てる為の「生存条件探索追尾センサー」が用意された。

これはテレポーター開発に付随して発達した、彼らのテクノロジーの最重要部分であった。

エネルギー源は、なんと彗星そのものを活用した。

「さあ、ぶっ飛ばう！ 鬼が出るか蛇が出るか！」
といったところだった。

モノリス号の中で博士が叫んだ。

「凄いのう！ のうのうのう・・・テレポートとワープ！ プッププ・有尾人にしたってたってたつてたつて・・・極めた訳でもあるまいに・・アルマーニ・・マーニマーニマーニ・・ニニニニ」

「博士・・せーせーせー・・出ます！ ・・ますますすすすす・・とザクロマン。」

出た。

モノリス号は停止した。

静まり返った宇宙空間。

沈黙の世界は当然、シーンとしている。

コンピューターが起動した。

スピーカーもデモ始動を開始。

《ブベッブベッ・文字数(空白・改行含む)・・5,343字
改行や入力など 入力欄で何らかの操作を行うと文字カウントを開始します・・・・・3月3日・・ひな祭りです・・お酒は控えて安全運転・・完熟ザクロマンは速やかに「根っこ」へ・・ブー! ロッカの記憶回路にバグ発生! 「根っこ」じゃなくて「大きな株」だろって? ・・そーでした・・そろそろ疲れが・・ウサギ転がる木の根っこ・・ブラック・ホールを通して・・抜けたらドンドコショ・・アンドロメダ周辺部へ到着・・やっぱり・・とか・・うまうまとって・・誰ですか? ・・》

「わっ博士、此処は銀河系ではありません! まさかって感じ!

此処は、アンドロメダ星雲ですよ!」

と真っ赤くなったザクロマン。

「ほう? 一度行ってみたかったんじゃが、来ちゃったのか……ふむ。困ったの……」

とボインシュタイン博士。

「どーしましょ？」

とザクロマン。

「アンドロメダじゃ……わしの大好きな、ピチピチギャルが、おらんじゃないか！」

ボインシュタイン博士の悩みは、思いの他、深刻だ。

完熟ザクロマン達が丘の上の「大きな株」を目指して走って行く。

大団円を前にして

全長600メートルの巨大宇宙船「モノリス号」は、アンドロメダ星雲内を飛行している。

有尾人達の軌跡を通って此処まで来た訳なのだが、有尾人達だって宇宙空間に放り出された訳じゃない。

彼らの場合はこの辺で「生存条件探索追尾センサー」が作動した。

その結果、なんと彼らの行き先は二手に分かれた。

これは、より生存率を高めたいが為の、センサー内コンピュータの決定だった。

例えて言えば、真田昌幸が、息子の信之を徳川方に、幸村を豊臣方に配して、真田家の生き残りを図った事と同じ理屈だ。

いきなりオジン臭い例えになった。申し訳ない。

「大団円に向かって、疲れてきたでありんすか？」
と参照太夫。

「まあ・な」
とロツカ。

——義務感が増してくると、ロツカは拒絶反応を起こすのであります。——

と参照太夫の説明。

「我ながら、よく書いた。あとは、誰が考えても解りきった展開だ。だから、ここまでにする」

とロツカ。

「えー！　ここで、いきなり終わるのでありんすか？」
と参照太夫。

「そーだ。？　続く？　にする。――
あとは、総括的な説明を、ちよんちよんと付けといてくれ。
あ、それから、続きを書く時に使えるように、ストーリー・ボードのスタイルにしといてくれ。
……。

もう書く必要は無いと思うが。

……。

でも、第9話と関係するかもしれないから……。

……あ、久々にウイスキーが飲みたい。

……ストーリーもウンチクもどんどん消去されていく……ひたすら飲みたい。

……あ……本当に……もう忘れた。

……。

ストーリー・ボードだけは……しっかり頼む。……じゃ」

ロツカは飲みに行ってしまった。

「……もお！」

そんな訳で、残りはみどもが書くでありんす。
ありんす。はウザイから、省略するでありんす。

その結果、なんと有尾人達の行き先は二手に分かれた。

仮に「やっぱり派」としよう。こちらは、ダロメ惑星の第7衛星であるアムラシッド星へ。

もう一方の「うまうま派」は、やはり、ダロメ惑星の第4衛星であるチョンビレ星を新天地とする事になったのでありん……ある。

そうです。「クロエとタモラ」を参照してもらえば解るが、2億5千万年の時を経て、有尾人は、アムラシッド星の怪獣ベロベロに、そしてチョンビレ星では愛玩獣のチョメチョメに変化を遂げたのでありん……ある。

見事に退化した訳なのだが、種そのものが2億5千万年も存続したのだから、やはり有尾人は、たいしたものである。

それに、これだけ長い血脈なのだから、銀河系時代に負けない黄金期だって、過去にきつとあったに違いない。

そうそう。アドロ人達の瞬間移動装置テレポーターなのだが、チョンビレ星探査の際の、遺跡で発見されたオーパーツに端を発している事を知っておくべきだろう。

やはり、テレポーターは、有尾人起原なのである。

品種改良の奇跡とまで絶賛されているアドロ星のグーグー（ゲスラ）は、怪獣ベロベロと愛玩獣チョメチョメの交配種なのだが、つまり元々有尾人を祖にする同種だった訳である。

それにしても、環境は生物を著しく変化させる。

アドロ人が忌み嫌う、第3シーズンを乗り切れなかったグーグー。すなわち怪獣ベロベロとは、どのように恐ろしいものなのであろうか？

そして出没湖の研究施設で眠るゲスラは、まあこれは絶対、ベロベロ化するに決まっている。

ベロベロ化したゲスラは、どの程度のパワーを発揮するのだろうか？

自衛隊と市破防衛大臣は、どう戦うのだろうか？

それから、銀河連合は日本を核攻撃するとの事だが……。

その前に連合情報部の？蛇の舌？ヒルダ大佐の、洞窟への潜入は必至だ。

その場合、アドロ人はヒルダに対して、どんな悪夢を見せるのだろうか？

ちよつとエロくなるのか？

ボインシュタイン博士も、アドロ人と接触するだろう。

じゃなきゃ、友和達に会えない。

ボインシュタイン博士とザクロマンは、どんな夢を見るのだろうか？

ここのサブタイトルは「アドロの夢」がいいでありんすな。

友和は、またもや出沒湖へ行って超巨人となるのか？
もしかして、銀河連合と戦ったりして……。しないな。
むしろ、フェロモン号が現れそうだ。

aタイプは何もしないで、食べてばかりなのか？

エンタメは、？蛇の舌？ヒルダに立ち向かうのか？

アドロメアの牢内にいる。という噂のカーン少佐は、今後どうなるのか？

あと何行書けば、終わる事ができるのか？

そんな次第で、

乞うご期待。

——つづく……かな？——

スカンバック

参照太夫は思案していた。

——せっかく盛り上がってきたのに、「続く」にするなんて……。
——しかも、ネタばらしのようなストーリーボードを、わざわざくつつけるなんて……。

——そっかあ。

——もう書きたくなく、なっちゃったから、せめて？読後感？をサッパリさせて、読者にカンベンしてもらおうと考えたんだな。

——下手にモヤモヤを残したら読者に嫌われるって……。

——……。

——嫌らしいでありんすな。

——あんな顔をして、ロツカ先生も、嫌われるのは嫌だって事か……。

——けっこう俗物^{ゾクブツ}でありんすな。

——それにしても悪知恵^{ろっかい}だな。歳相応に……老獪^{ろっかい}でありんすなあ。

そもそも参照太夫は5年前まで、NKSR党首の所にワラジを脱いでいる渡世人であった。（ま、プータローって意味です）
その頃は「フェル記者」と名乗っていた。

注。NKSR党は、現在休眠中。

党首って人は、千駄山ロックバンドのベーシストでアレンジヤー。

当時、党首は、本邦初の国家社会主義政党を旗揚げするにあたって、党の新聞を創刊しようと思いついた。

自民党の『自由新報』（これは現在『自由民主』に改題）

公明党の『聖教新聞』（政教分離がタテマエだから、きつと別の新聞も出しているのですが）

共産党の『赤旗』

一水会の『レコンキスタ』のような。

新聞名を『フェルナンデス』と決めた。

これはオタク党首ならではの、込み入った意味があった。

ヒトラー・ナチス党の機関紙『フェルキッシャー・ベオバハター』を複雑に、もじったのだ。

つまり、『フェル……何です?』で、『フェルナンデス』

「そんだけ?」

と関係者は仰け反った。

「そーだ!」

と党首。

恐ろしくも寒々しい駄洒落に満ちた命名であった。当然、誰も笑ってくれなかった。

「あ、イーンダヨ。私の愛機エレキ・ギターのメーカー名でもあるし……」
と党首。

新聞作成に携たずさわった参照太夫は、この『フェルキッシャー……なんです』紙上で、こちらも駄ジャレ、「フェル記者」のペンネームで記事を書き、コラムも書いた。

実は小説も書いたのでありんす。

『河内弁特区』かわちべんとつくってタイトルで、これが『江守友和の冒険 NKS Rの世界』の元ネタなのでありんす。

『NKS Rの世界』では、最後に核ミサイルが、日本中に降ってくるのでありんすが、『河内弁特区』では、メガトン級の水爆が一発だけ、大阪に落ちたのでありんす。

その結果、大阪は壊滅し、漫才などの関西文化が絶滅寸前となるのでありんす。

復興政府を牽引する、時の総理、数少ない大阪人の生存者である吉本万歳は、日本が世界に再び飛躍する為の原動力を、瀕死の浪速なにわの「ド根性」に求めたのです。

そして生き残りの大阪人を、インストラクターとして全国に派遣します。

学校の試験も、面白味のない答案は0点。
答えが間違っている、面白ければ100点。

ポケもツツコミもない書類を作るデスクワーカーは、容赦なく減俸されます。

公文書だって備考覧が大きくなり、各々のワガママな言い分だつて、面白ければ考慮されます。

『ナニワ金融道』が「倫理社会」の教科書になり、「カバチ論」が司法試験に加えられます。

頭が悪い人はオーバリアクションで、丈夫な人は裸になって、とにかく笑いをとります。

皆が大阪弁と大阪式バイタリティーを学習します。
こうして関西文化の復興が進められて行く。

こんな話でありんす。

つまりロツカ先生よりも、みどものほうが、小説執筆歴は長いのでありんす。

更に遡って大学時代の参照太夫は、擦り切れたジーンズの尻ポケットに、トレーニング用の、太めのステイックを差し込んだ恰好でちよろちよろしている、ドラマーマンだった。

腕はちよつとしたものだったが、何せチピでルックスが悪いので、「ビジュアル系」が全盛期の当時は、誰にも相手にされなかった。

それに、すぐにステイックを手にして、そこいらへんをパカパカ

叩きまくってパラデイドルの練習に励む様子が、時代にそぐわないコミカルな印象を与え、とりわけカッコマンばかりのロックバンドの連中に嫌われた。(でも、才能ある若い正統派ドラマーの姿としては、これこそが正解だと言えよう。……でありんす。／＼ウプ。とロッカ。)

「おま、ウツセンだよ！ ソウルがネーンダ！ タコスケ！」
と、イケメンで足長のロック野郎が偉そうに言った。

本当に、お呼びじゃないって感じだった。

「何がソウルだ！ リズム音痴のイモヤロー！」
と思いつつ、ルックスが関係ないジャズバンドに参加して、ジャズクラブで演奏した。

4〜5組の客を相手に、いや実態はもっと悲惨だ。
2〜3人しか入らない日がざらだった。

東京は山手線内にも関わらず。……高田馬場とか……、あはは書いちゃったでありんす。あはははは。

まったく、当時の日本ジャズのマイナーシーンは、不遇でありんしたな。

その頃、このひまなジャズクラブの常連だったのが、ルンペンだから当然、暇人の党首だったのでありんす。

こうして党首を通じてロッカファミリーの一員となった参照太夫は、今ではファミリーの中核として、西岸地区の密造酒を取り仕切る小ボスとなって、マシンガンを手には……？

——ズドドドドドドド!

「きょうきょうきょうきょう!」

中ボスのヘスが言った。

「ロッカからの伝言を伝えるぜ! あれだけ言っというのに! 余計なことを……。スカンバック!」

ご存じの方も多いだろうが、スカンバックとは精子の事だ。

「クソヤロウ」とでも約すべきだろう。カイナマヒウラ。

カイナマヒウラとは……。

「もう、誰も読んでないわよ」

と仲恵ママが言った。

そうだ。つまり参照太夫はパブ喫茶『ロマーノ』で、考えを巡らしていたのだ。

解ったでありんすか?

「さすがに若い奴の文章は難解だな」

とビールを飲みながらヘスが言った。

「みどもだって、もっと若い人の文章は、解らない単語が多いでありんすよ。——」

例えば、『ツンデレ』なんて言葉は、ずっと意味不明のままでありんす」

「ツンドラ地帯でデボラ・カーがレンコンを煮る。の略語じゃないっけ？」

とヘス。

「サンちゃん（参照太夫）、ロッカさんのボトル、飲みなさいよ」と伸恵ママがワイルド・ターキーのキャップを開けた。

この時間の『ロマーノ』は、パブタイムの準備中といったところで、客はヘスしかない。

マスターの小野寺善行は、「仕入れ」に出かけている

アルバイトの目次めぐりがテーブルを拭いている。

彼女もロッカバンドのメンバーで、紅一点のギタリストだ。

ちなみに彼女と参照太夫は、共に盆の蔵大学の『ロッ研』出身で、現在は恋人同士なのだ。

つまりこの店で飲む時は、金が足りなくても心配ないって事。

ヘスが話しかけてきた。

「あんな、参照太夫。ロッカの小説の続きなんて、真面目に考えちゃ駄目だよ。本人だってヘベレケで書いてんだから」

「ええまあ……。でもロッカバンドの曲は、作詞作曲、ロッカー一党首。とか、――

ヘス――ロッカ。でありんしょ？ レノナーマツカトニーみたいな。

羨ましいであります。

みどもだってゲスラの続きを書いて、ロッカー――参照太夫。って、共著？にしたいであります」

伸恵ママが言った。

「そーよ！ サンちゃんが正しいわ。――

だいたい、aタイプやザクロマンのグッズは必ず当たる！ って
言ってるクセに……。

尻切れトンボで終わっちゃうなんて、これじゃファンなんて、で
きっこないわよ」

ヘスが言った。

「グッズねえ……。そう言やロツカの奴、超電導美那子のフィギア、
俺に作ってくれて言ってたもんな。――

あははは。35歳というフィギア史上最高齢のアイドルフィギア
だ。

これは、絶対当たる！ ってね」

「なんですって！」

と美那子が言った。

「あ……美那子ちゃん……居たの？」

とヘス。

「そりゃ、居るわよ。此处は『ロマーノ』ですからね」
と伸恵ママ。

ヘスは多趣味な男でフィギア制作もその一つだ。

「色々、企たくらむんだよな。あのオッサン。結局、酒飲んで忘れるクセ
に……」

と参照太夫は水割りを一気飲み。

その時、小野寺善行が息せき切って飛び込んできた。そして言っ

た。

「大変だア！ 伸恵ちゃんテレビ見たか？」

「何だよ、善行、落ち着けよ」

とヘス。

興奮の善行が口から泡を飛ばして言った。

「ヘス、聞いて驚くな！ あの水没湖のゲスラの死体な。蘇生したんだって！ ——

とにかく、今は誰も近づけないらしい！

近づいた4人が、踏み潰されて死んだそうだ。

なんと、東京都知事も踏み潰されたって事だ！」

善行は、めくりちゃんが持ってきた冷たいウーロン茶を、一気飲みして、まくし立てた。

「更に！ こいつあぶったまげだ！ 政府の特別調査隊が全員、焼き殺されたんだ！ ゲスラが、火を吹いたんだア！」

「マア、何てこと！」

と驚愕の伸恵ママ。

「ふわあ！ やっぱカイジュウって凄い！
とめくりちゃん。」

「ねえ。今日はお店閉めて、みんなでゲスラ見に行こ！」
と美那子。

「そうきたか……。何だかな。……ちよつと強引な展開じゃない？」
とヘスが言った。

「ま・ま・ま・ヘスさん……。ちゃちゃ入れないでくんまし。――
・・う・う・うわあ！ そりゃ大変だ！ ゲスラが・・・大変だ
ア！」

と参照太夫が叫んだ。

「あ・・・久々に見る……。しらけどり・・・ひひひ
とヘスが笑った。

「しらけどりも出たの？」
と美那子が言った。

スカンバック（後書き）

樺山が言った。

「どうだい？自称作家？を続けている気分は？」

ロツカが答える。

「そりゃ？本物の絵描きだった？お前なら解ると思うが、……引込みがつかなくなったって感じだな」

「おっ売れそうなのか？」

「いや？持ち込み先？を知らんし、また、持ち込んでも、買ってくれるとも思えん。だからアプローチのやり方が解らんし、やった事もない。自費出版の誘いのメールばっか頻繁に来る」

「なんだ。じゃ、まるっきりの趣味じゃないか」

「そーなんだ。まるっきりの趣味だ。だから作家だなんて、思った事ないよ」

「じゃ、アレか？ ミュージシャンだって言うのか？」

「うん。そーだ。俺はムカシから（超ナマケモノの）ミュージシャンだ。むしろ今の世の中の方が、有料配信ってのが出来るから、やりがいがある筈だ。メンツもネタも最低限の機材だってあるからな。……モルガン（イモオルガンの略）だって、うんとリハビリしたら、おヒネりくらいは貰える筈だ。プレイヤー人口が増えた訳じゃないからな。ただ……」

「ただ……何だ？」

「いや……つまり、？ゲスラ？にしても？Ｙの続き？にしても、最近のヤツが、やったら面白いんだ。騙されたと思って読んでみろよ」

「……うん。面白いな。読みやすいし……」

「な。だから、やめられない止まらない」

「何だ、こりゃＣＭだったのか？」

「そーだ。この通り、企画力だってあるだろ？ 唯一の弱点は、コタツから一歩も出るのが嫌だって事だ。飲みに行く以外はね」とロツカ。

「わははは。冬場のＣＭだったって訳か」と樺山が言った。

海王星間近の宇宙空間。

時空船「星間デリヘル・ミルキーウェイ」が、微速飛行していた。船体が何かの形に似ている。

そうだ。米国防総省ペンタゴンの建物に似ている。

この船は、aタイプのデリヘル嬢が「こんばんは」と言って訪ねてくる、デリバリー高速艇の母船であった。（蛭^{うづ} 民意の尊重 参照。）

連盟の風俗営業認可もちゃんと受けているレジャー産業船で、母船内は宿泊施設付きのキャバレー営業を繰り広げている。

見れば、多数の時空船がドッキングしている。

ペンタゴンからタコ足配線のように5方に伸びたドッキングゲートには、「オリオン農協」の大型時空バスや、自家用時空艇が何隻もジョイントされている。

その他にも星間タクシーや高級ハイヤーなどが……。

おっ、連盟議員専用の公用機まであるじゃないか。

なんと、宙賊エステボーヨシユキの時空船「ステッペン・ウルフ」もドッキングしているのが見える。

店内では助平男どもが盛り上がっていた。

「おーおー！ どこを向いてもaタイプばっか。くらくらするなあ」と連盟議員のオジサマ。

「ほーら、めんこいねえちゃん、観念して、こっちゃこいや。はれ？ おめ、さっきのねえちゃんと違うのか？ 今さっきプレゼント渡したねえちゃんやーい！」

と農協のおっさん。

ホステスはすべて、悩ましい薄物をまとったaタイプクローンであつた。

100人近くはいる。

ゴージャスなラウンジは、シャンデリアの下、七色のカクテルグラスが並び、オードブルは銀河の果実と珍味が花盛り。

官能的な音楽に合わせて、やけに悩ましいホログラムと、たまらない香りが刻一刻と変化を続ける。

隅のボックス席にはエステボー達が見える。

幹部の3馬鹿大將がボスのヨシユキを中心に座っている。

総勢20人ばかりで飲んでいる。

「ボス、ロボ・ミナコ、惑星温泉で留守番させて、正解たたね」と目尻が下がったエステボーモータクトー。

「アイツ、アンドロイドのくせにヤキモチ妬くからな……。めっちゃ強いし」

とエステボーヨシユキも鼻の下を伸ばしている。

稼業である「宙賊働き」をおっぱじめる前に、客に成り済まして楽しんでおこう。という魂胆らしい。

「ねえオジサマ、ベッドルームは無重力にする？」
とaタイプ。

「いや。うんと重くしてくれ！ 重たい身体を引きずって、エイコ
ーラと励もう。『ボルガの舟歌』は、ロシアの農奴の魂の呻きなん
だ！」

とエステボーレーニン。

「もお！ 変態なんだからー！」
とaタイプ。

「俺は無重力がいい！ 心は今なお軽やかに、風に乗り、パンパの
上を飛び回る！ ビバ！ フリーダム！」
とエステボーゲバラ。

「きゃあオジサマ素敵！」
と、こちらもaタイプ。

「お前ら、……詩人だな」
とヨシユキ。

「さあボス、丹田たんでんに力ちからいはい込めて、イッパツのブチカマスのこと
よ！」

とエステボーモータクトー。

「いやーん。禿げのオジサマったら、ロ・コ・ツ！」
と、またまたこちらもaタイプ。

その時、船内スピーカーから大きなドラ声が響いた。
翻訳機を使った銀河共通語だ。

《コラ・・オマエ・・パカ・・トマルアル・・ユコトキイテ・・ス
グ・・トマレ・・》

「いよー！ 待ってましたア！」
アトラクションと勘違いしたオヤジが、手を叩いて叫んだ。

《・・・タメカ？ ・・・ツウジナイカ？ ・・・ホンヤクキ・・・モード2ニスル・・・ブツ！ ・・・停船を命ず！ 貴船、速やかに停船せよ！》

客は一斉にざわめいた。

《・・・こちらは銀河連合巡洋艦・・・ビトープレツソ・・・即時・・・停船せよ・・・さもなくば・・・轟沈せしむ！》

「せしむ。って、オイ」

と連盟議員が秘書に話しかける。

——ググーン！

凄い揺れの後、「ミルキーウェイ」は緊急停船した。

「きゃあきゃあきゃあ」

とaタイプ達が騒ぐ。

連盟議員が立ち上がって、スピーカーに向かって叫んだ。

「オイ。私は連盟議員のクリントンだ！ 公宙上で？ 連合？ が、連盟船に対して、どんな権利で命令を発するのか？ 説明を求めろ！」

《・・・これより臨検する・・・速やかにゲートを開け！ ・・・》

クリントンの怒鳴った。

「オイ！ 聞いてんだろ！ 連盟議員のクリントンだ！ 責任者を
出せ！ お前ら戦争始める気か？」

《・・・・・・・・》

スピーカーは暫しの沈黙。

なんとなく後ろめたい気分の男どもは、押し黙って身づくろいを
始めた。

aタイプ達がざわめいている。

「ボス、えらい事なたな」

とモータクトー。

「臨検って、ま、拿捕はしないんじゃないか？ 罰金ってとこだろ
？」

とレーニン。

「何れにしろ、宙賊の上前ハネられてたまるか！ お前ら、パララ
イザー（麻痺銃）に切り替えとけ」
とヨシユキ。

「ボス、船に戻ってスタンバってます」

こう言ってゲバラが5人のエステボーを伴い「ステッペン・ウル
フ」へ戻って行く。

再びスピーカーが鳴った。

《ブブツ・・・連合巡洋艦ビトープレツソ艦長・・・チンギス・カー
ン大佐である・・・さて・・・高名なる連盟議員のクリントンどの・・・
・貴殿のこのような行状・・・奥方はご存知かな？》

「あはははは」

と客の男どもが、思わず笑った。

逆上したクリントンの怒声が答える。

「なんだとコノヤロー！ かあちゃんにや内緒に決まってるじゃねーか！ ちくしょう・男の遊びを邪魔しやがって・・・美人局^{ツツモタセ}みたいナマネしやがって！ お前ら、キンタマついてんのか！ 連合はオカマの宙賊か？」

「ぶふふ。オカマの宙賊だって。言ってくれるね。クリキントン」とモータクトー。

「こいつ、かあちゃんが話題に上ると、いきなりブチ切れるんだ」とレーニン。

《では、高名なるクリントンどのへお答えしよう。・・・海王星の第二衛星は？ 連合？ の資源プラントを有する・・・ご存知なかったか？ ・・・従ってこの座標は・・・領有権を巡って現在調停中である・・・・・調停中の座標は公宙とは呼べない・・・・・従ってこの座標では？ 連合風営法？ が適用される・・・・・連合風営法第8条・・・連合圏内ニオイテハ・・・スベテノ風俗営業船ヲ禁止トスル・・・・・クリントンどのお解りか？ この座標においては・・・連盟船の航行は自由なれども・・・風俗船は・・・業者・客・双方へ罰金を科す・・・拿捕はしない・・・ゲートを開けなさい・・・》

「ぐっぞー！」

と立ち尽くすクリントんに、男装したaタイプのマネージャーが、何やら囁いている。

インフォメーションが鳴った。続いて男の声。

《ピンポロリン・・えー当店店長です。「星間デリヘル・ミルキーウェイ」毎度ご利用ありがとうございます。緊急事態につき、本社に指示を仰ぎましたところ、本日の支払いは、すべてサービス。つまり無料にせよとの事でございます》

「おお！」

「ヤッター」

と客がどよめいた。

どんな時でも男というものは馬鹿なものだ。

《・・・しかしながら、？連合？の臨検による罰金は、言わば天災のようなものでございますれば、当店への損害賠償請求は、なにとぞ容赦の程を。・・臨検後・・当座標を抜け次第、更なる悩殺サービスを再開します。・・ゲートを開きます。なにとぞ冷静に・・・》

ザックザックと足音も整然と銀河連合軍の兵士達が入ってきた。高速艇がドッキングして10人程が乗り込んだのだ。

連盟軍にしても連合軍にしても通常、駆逐艦以上の艦は民間船とのドッキングはしない。

自爆テロや不慮の事故を警戒しての事だ。

「10人ピッタリある」

と、モータークトーは目を細めて確認する。

「ふふふ。連合の馬鹿ども」

とレーニン。

「ホエズラかかしてやる」
とヨシユキ。

携帯翻訳機を付けた伍長が、武器センサーのアンテナを伸ばしながら言った。

「諸君。無駄な抵抗は止めたまえ。まず、武器をすべて回収させてもらう」

——ブビー！

と反応した奴から片っ端に、兵卒が取り上げていく。

——ブビー！

——ブビー！

なんとaタイプ達も、ほとんど反応してるじゃないか。

胸のすき間やら、薄物をまくりあげられた太もものガーターベルトから、挟んであるデリンジャーレイ・ガンを取りあげられている。護身用だろうが、ほぼ全員が持っているようだ。

この事は連合兵士達も以外だったのだろう。

面食らった顔をしながら、それでも嬉しそうに、aタイプの薄物をめくり、胸元をまさぐる。

兵士の持つ回収バッグは、すぐにレイ・ガンで一杯になり、新たなバッグを広げている。

兵士達の顔が次第に緩んできて、助平ったらしい顔になった。

助平な手に触られながらも、aタイプ達は皆、声を洩らさない。執拗に乳房を触る奴もいるのだが、ただマネキンのように、完全に沈黙している。

こんな時、声を上げたりすると、みせしめとして撃ち殺される事を知っているからだ。

緊張の為なのだろうが、動作もよく揃って、皆、同じ動きになってきた。

兵士達の遠慮のない手に弄ばれながらも、皆が右を向き、次いで、皆が左を向く。

ピンクの頭が同じように動き、同じように揺れるのが、なんだか不思議な光景だ。

そうだ。これこそがクローン本来の、つまりaタイプクローンの本性が現れているのだろう。

「いいか、最初の奴の発砲が合図だ。分かってるな」とヨシユキ。

——ブビー！

モータクトーの銃が最初に反応してセンサーを鳴らした。

最も執拗にaタイプを触りまくっていた兵士が、モータクトーを^{ブラスタ}熱線銃の台尻でこづく。

こいつは翻訳機を付けていない。

「これが欲しいか？ 助平野郎！ おまえパラライザーでよかたね！」

モータクトーはそのまま発砲した。

――ブチュチュン！

すかさずエステボー達が発砲した。

――ブチュチュン！

――ブチュチュン！

――ブチュチュン！

連合兵士達は全員、痺れて転がった。

「うわー！」

「ヤッター！」

と歓声があがる。

「よかったあ！ 腹巻きに挟んで、全財産、持ってきたんじや」とオリオン農協のおっさんが叫んだ。

「だよな。お土産買って帰らにゃ、女房と娘にぶっ飛ばされる」と、こちらはオイオイ泣き出した。

喜ぶ客とaタイプ達とはうらはらに、クリントンは浮かぬ顔をしている。

「だけど、お前達、エライ事をしてくれたな。正当な理由での臨検を妨害したとなると……連盟に非があるって事になる……その場合、議会に対して、何て釈明したらいいんだ？」

と泣き顔になったクリントン。

「わはははは」

と一人のエステボーが笑った。

「何だ、イケガミ、何がおかしい？」
とヨシユキ。

「だって、クリントンって、連盟議員のクセに……何も知らないから」

と、エステボーイケガミ。

「何だと！ キサマ民間人の分際で！ 議会にはな、元老達（元老院議員）だっているんだ。彼らは非常にウルサイ。だから色々大変なんだ！ それでも苦労しながら私は、連盟の名誉と利権を守ってるんだぞ！」

とクリントン。

「くすくす……でもね、クリントン先生」
と、エステボーイケガミ。

「また笑ったな！ いったい何が可笑しい！」
とクリントン。

「確かに？連合？は、海王星の第2衛星の領有権を主張しました。調停にもかけられました。でもね。200年前の話なんですよ」
と、エステボーイケガミ。

「200年？」
とクリントン。

「そうです。100年前に資源が枯渇して、連合は領有権を取り下げたんです。だから、今ではこの座標は、純然たる公宙って事にな

りますね」

と、エステボーイケガミの解説。

「公宙って？ でも、連合巡洋艦の艦長が……」
とクリントン。

「アハハ。アンタ、かつがれたんだよ！ 馬鹿だと思われたんだな。
何も知らないから」
とヨシユキ。

「ハア〜！ やばしクリントン、ためあるな」
とモータクトー。

「わはははは」
客とaタイプ達が笑った。

「連盟史も知らないボケ議員」
「お前の脳みそ、かあちゃんの半分」
「バーカバーカ」
と農協のオッサン達が囃し立てた。

フロアの床に連合兵士が10人、全身マヒで転がっている。

パラライザー（麻痺銃）を発砲したのは15人のエステボーだ。

当然、一撃でけりがついた。

武器を回収したエステボー達が、連合兵士をゲートの入口へ引きずって行く。

エステボーヨシユキが、一段高くなっているカラオケステージに上がった。そしてマイクスタンドをぎゅっとつかむ。

「よー！ 今夜のヒーロー！ 何か唄ってくれ！」

と客席から声援が飛ぶ。

「なんだかオジサン、カッコイ〜」

とaタイプが叫ぶ。

——パチパチパチ

と拍手が起こった。

ヨシユキがマイクに向かって喋る。

「あー、あー、テス、マイ。テス、マイ。リバーブちよい強い。もちよい絞って。そ。そこ。そこ」

エステボーの一人がミキシングしている。

「オッシャーッ！ 行くぜ！ ロッキンローッ！ 前座の時間は終わりだぜ！ おまちなかのスペシャル・タイム！ オイエー！ 俺様がエステボーヨシユキだ！ イエイエイ！ 連合の罰金の方が良かったか？ 運が良かったか？ 悪かったか？ じっくり考えていんだぜ！ その間身体はしっかり動かせ！ シェイキンシェイキンシェキシエキベイビー！ ベーイブベイバービーベ・ブ・ブ・ブ・バブブバブブ！ そうだお前だ！ ヘイブラザー！ 命が惜しけりゃ金を出せ！」

ステージ脇に並んで踊っていたエステボー達が、一斉にパラライザーを抜いた。

「しえー！ 今度は宙賊だあ」

「一難去ってまた一難」

「悪い予感がしたんだ」

「今朝の星占い、最悪だったもんなあ」と男ども。

「あゝん。宙賊って、女を浚^{さら}うんですって？」

「浚^{さら}って殺して食べるんですって？」

「食べないでー！」

とaタイプ達。

「さ。お金出す。ここ入れる！」

モータクトーが集金用シルクハットを廻す。

「隷属愛玩種チンコロン（注1）開放の戦いなんだ。お前も有り金全部出せ！」

とレーニン。（山崎の合戦 エステボーメロス 参照。）

「はい領収書が欲しい人は？ え？ あなた、そんなに盗られてないでしょ？」

とエステボーイケガミ。

貴金属に宝石。エステボー達は手分けして、手早い仕草でお宝を回収袋の中に入れる。

「さて、クリントン先生は、ご同行願おう。連盟議会に身代金を要求してやる。――

副大統領のおかあちゃんは、タンマリ出すかな？」
と上機嫌のヨシユキが言った。

「そんなボケ、彼女が出すわきゃねーぞ！」
と客の誰かが言った。

「あ、そうそう皆の衆。今日は半額サービスにしてやる。ゲート脇にキッチリ半額、置いてってやるから、正直に仲良く分けるよ。あははは。遊び足りないだろうからな」

とヨシユキ。

「武士の情け。感謝する」
と農協の長老が言った。

「もひとつチエを授けてやる。クリントンのせい？ 連合？ に罰金食らったって報告すりゃ、連盟政府が残りの半額、保障してくれるかもな。どっちにせよ連合の艦長は、知らをきるに決まってるからな。ひよっとして儲かるかもしれないぜ。じゃあな！」

「あの、みなさん……ワシはグッドアイデアだと思うが……」
と農協の長老。

「そうだ！　そもそもクリントンの馬鹿のせいだ！」
と中年男。

「そうよ。みんなで口裏を合わせましょ」
と男装したaタイプのマネージャー。

皆は寄り添って相談を始めた。

ひつくくった連合兵士とクリントンを乗せて「ステッペン・ウルフ」は「ミルキーウェイ」を離れた。

窓の外を眺めながらレーニンがつぶやいた。

「ああ、さらばモスクワ愚連隊……」

「重たい重力でのエイコーラ。残念だったな」
とヨシユキ。

「いいですよ。そのうち、アポカリプス星（注2）を襲ってやりますから」

とレーニンが答えた。（モノリス 統一馬鹿理論 参照。）

「さあ、これからが大勝負だよ」
とモータクトーが言った。

「連中（連合巡洋艦）は、取引（人質10人の身代金）に応じますかね」

とゲバラ。

「なあに、ダメなときゃ、ゼリー弾（ポイズン・スノー）（注3）ぶちかまして、コンピューターをマヒさせて、逃げるさ」

とヨシユキ。（山崎の合戦 ママは歌う 参照。）

「もしかして……マニュアル艦だったりして……」
とイケガミ。

「わはは。今どき、まっさかー」
とレーニン。

「そのときゃ、クリントンを差し出して、逃げる」
とゲバラ。

「わはははは」
と皆が笑った。

（注1）連盟圏内の245ヶ星系では、男性種は隷属愛玩種のチンコロンと呼ばれて、蔑まれている。

（注2）アポカリプス星は、女だけの245ヶ星系軍の、士官学校のある重引力星。

（注3）物質Pの作用により、コンピューターの知力低下を引き起こす。エステボアの秘密兵器。

「何か忘れていませんか？」

とエステボーイケガミが言った。

「あ！　？　ペンタゴン？　形のミルキー・ウェイには？　連合？　の高速艇が、ドッキングしたままでありんす」

と参照太夫。

「……こりゃマズイ。参照太夫、書き足してくれ。そもそも、『スカンバック』から先は、オマエが書く筈じゃなかったのか？　……
何で俺が書いてんだ？」
とロツカ。

「書き足すったって……そもそも高速艇には、何人の兵士が残ってるでありんすか？」

と参照太夫。

「イー質問ですね」

とイケガミが言った。

「そうだ。何でも知ってるエステボーイケガミ。教えてくれ」

と、ロツカ。

イケガミは解説を始めた。

「お答えします。全長10メートルの銀河連合軍、急襲型高速艇は50人の戦闘員とパイロット1名、副パイロット1名が搭乗できます。ちなみに巡洋艦ビトープレッソは、全長200メートル幅20メートルの？　重巡？　です。最新鋭戦闘機3機も搭載してます。戦闘

機の全長は……」

ロツカが叫ぶ。

「山椒大夫メモとって！ メモ！」

「ロツカ先生、パニックってますね。みどもは？ 参照太夫？ ありませんよ。……問題は、艇内に何人残っているのか？ でありんす。イケガミさん、教えてくんなまし」

と、参照太夫の質問。

「お答えします。今回はパイロットと副パイロットの2名だけが、操縦席で待機してます」

とイケガミが答えた。

「そりゃ都合がいい。……こうしよう」
とロツカ。

エステボー達は、ドッキングしている連合の高速艇を急襲して、捕獲したのであった。

だから、捕虜にした連合兵士は12人が正しい。

「ふう。やれやれ」
とロツカ。

「ところで、ステッペン・ウルフ号の全長は何メートルでありんすか？」

と参照太夫。

「イー質問ですね。はい作者、答えてください」
とイケガミ。

「……」
とロツカ。

「まさか、ぜんぜん考えないで、今までずっと書いてた……なんて事は……。」

フェロモン号は？　もしかして漠然と……巨大な時空艦……それだけ？　まさか？　ですよね」

とイケガミは目をまん丸くしている。

「超ヌル設定のポケ小説」

「ロツカの脳みそ、クリントンの半分」

「バーカバーカ」

と農協のオッサン達が囃し立てた。

「全長200メートルの重巡洋艦に挑むのであります。ここはビジュアル的にも、ハッキリしてくんなまし！」
と参照太夫が詰め寄る。

「エステボーヨシユキに聞け！　船長なんだから……」
と言いついて残してロツカが逃げた。

……こーいう展開になるとは……。

『疾風POKKA作戦』 act 3 【イケガミの作戦】

銀河連合軍、第73軍、重巡洋艦ビトープレス艦長、チンギス・カーン大佐は思案していた。

司令室には大きな丸窓がある。

真っ黒な宇宙空間を凝視しながら言った。

「クリントンめ。馬鹿を装ってワナを仕掛けるとは、……恐ろしい男だ」

重巡「ビトープレス」は、昔ながらの電文を受信していた。

——…虚偽の臨検による宙賊犯として……連合兵士12名逮捕……高速艇は捕獲した……銀河連合とは……奸佞にして悪辣なり……連盟政府は今だこの事件を知らず……このまま……知らせずにおく……我……双方の緊張を望まず……両勢力の紛争は……無辜の民に悲劇をもたらすのみである……民の礎たらんと志す我……民の不幸……忍び難し……よって平和的取引にて解決を望む……速やかに身代金もしくは相応の物品を提示されたし……

「ナーニガ、民の不幸、忍び難しだ。……偽善者め！」
とカーン艦長が、吐き棄てるように言った。

「ホログラム回線を使わないなんて……。やはり向こうも、後ろ暗いんでしょうね」
と、副官が言った。

「そりゃそうさ。……ま、こうなりや同じ穴のムジナで助かったて事だ。公におおやけされたら、ヤバイなんてもんじゃない。しかしクリントンめ。連盟議員としての名誉より、実利をむさぼるとは。……かなり屈折してるな」

とカーン艦長。

「何せ奥方が、連盟副大統領ですからね。自分の手柄は奥方の手柄になるんでしょう？ これ以上栄達して欲しくないのかな？ ……並の屈折じゃありませんね」

と、副官。

「しかし困ったな。金はないし……」

とカーン艦長。

「ワハハ。無いから、宙賊やったんでしょ。……こうなったら艦長、サルチル星の？ 秘宝の香油？ アレしかないですね」

と、副官。

「しかしアレは、参謀長の代理として、執政官から無理やり没収したモノだ」

とカーン艦長。

「他には、めぼしいモノなんて、無いですよ」

と、副官。

「仕方がない。緊急事態だ……。クリントンと取引しよう！ —— さっさとすましてサルチル星へ戻って、もう一度調達しよう。今度もグズグズと出し洩ったら、鉾山を爆撃してやる！」

とカーン艦長。

軍律違反である宙賊行為を働いた訳だが、その事はたいして問題じゃなかった。

連盟船に難癖をつけて金品を巻き上げる事は、連合軍の艦長なら誰もがやっている事だ。

没収した金の一部は賄賂として上層部に流す。

將軍連だってその余禄を楽しみにしている。

連合の勢力拡大の？実践行為？とさえ見なされ、「手柄」とさえ呼ばれている。勿論、非公式にだが。

だが、失敗して人質まで取られたとなると、話は別だった。

しかも「急襲高速艇」ごと12名も……となると、これは「敗北」以外の何物でもない。

軍隊生活の進退に関わる問題だ。

だが、それよりむしろ問題なのは、軍人一族カーン家の当代当主として、敗北を喫するという事の、恥辱なのであった。

「ステッペン・ウルフ」は、識別信号を受信されぬように、すべてのコンピューターをシャットダウンしていた。

旧式無線機のモニターが光った。これはもはや骨董品的代物なのだが。

——取引に応ずる……サルチル星産？秘宝の香油？1ラムドン

カ（銀河系共通単位）だ……当方軍人にして商人にあらず・
・駆け引きはしない・手短に願う……

「おー！」

「ヤッター！」

「1ラムドンカとは凄え」

「こいつあ太っ腹だぜ！」

とエステボー達がどよめいた。

「ワナじゃないかね？」

とモータクトー。

レーニンが言った。

「大丈夫だろ。何しろ、軍人にして商人にあらず。って言ってんだ。
ボス、俺が受け取り行ってきます」

「ロボット使った方がいいんじゃないか？」

とゲバラ。

「いや、ロボットじゃ騙されるかもしれん。――

キワドイ代物が出回ってるんだ。

俺なら大丈夫。

チンコロソ時代！？連合？に売り飛ばされて、サルチル星で強制
労働させられたんだ。

地獄の鉱山で？秘宝の香油？の原石を採掘してたんだ。

お前（ゲバラ）が来る前の話だ」

とレーニン。

「今、原石って言ったよな。原液じゃないのか？」
とゲバラ。

「そうか……知らんのか。――」

？秘宝の香油？は石を搾しぼるんだ。

大量の原石から、ほんの一滴ひとしずくだ。

そりゃ酷い労働だった。

生き永らえたのは、精製班に廻されたお陰だ。

一滴ひとしずくを更に精製するんだ。

鉦山労働がどれだけ過酷か、解るってもんだろ？

……。

クソ！ 嫌な記憶だぜ。……ミナコ（245ヶ星系独裁官）め！

とにかく、お陰様で、本物の？秘宝の香油？の見分け方を知ってるって事だ」

と、レーニンは感懐深い顔をしている。

「ボスが助けた時、レーニン、ガリガリ痩せて、顔ま黒たたよ」

とモータクトー。

「ま、？秘宝の香油？かっぱらいに行った、ついでに助けたんだけど。な」

とヨシユキ。

「きったねオヤジがいる。たすけてやれ。ボスゆたよ」

とモータクトー。

「ボスの？ついで？に感謝。わはははは」

と笑いながらレーニンは、2人のエステボーを連れて、小型艇へ続くゲートのハッチを開けた。

245ヶ星系において、チンコロン解放運動が盛んだった頃、検

挙されたレーニン達活動家は、見せしめの為、ムジナ星の奴隷商人に売却された。

決定を下したのは独裁官ミナコであった。

その後、連盟圏内をあちこち転売された挙句、連合圏内サルチル星で開放の日を迎えたのである。

ヨシユキによって開放された後は、エステボーとなって3馬鹿大将の一人となった。

レーニンの独裁官ミナコへの怨みは深い。

——ミナコめ！ いつの日か必ず、ロッカのHBE（変態馬鹿エロ）小説、『約束の地』の「里緒菜の悶絶」みたいに、グッチョングッチョンにして、……とにかく、いたぶってやる！

と復讐に燃えている。

「取引座標のK点、決定しました。03X23X16時方向。コンマ7単位先」

とエステボーナビオ。

小型艇は音も無く、漆黒の空間へすべり出した。

「レーニン発進したある」
とモータクトー。

エステボーヨシユキは、コクピット中央の船長席に座った。

「よし。こっちもK点に向かう。微速前進。ヨーソロー」

時空艦「ステッペン・ウルフ」はK点に向かってゆっくりと進む。重巡「ビトープレッソ」の方角に向けて、大量のダミービーコンを射出しながら。

船体の全てのライトを消して、まるで漆黒の中へ溶け込んでゆくようだ。

満月の3倍程に見える海王星が、寒々しい光を放っている。

照度を落としたコクピットの中は、静まり返っていた。

エステボー達は、めいめいの持ち場で物思いにふける。

普段は音楽が流れ、明るい照明の中で馬鹿騒ぎをしているのだ。若いエステボーが、そっとコーヒーを配っている。

船長席のヨシユキもコーヒータイムだ。

「お前（イケガミ）の作戦が当たったな。

ヤツ（カーン艦長）は、宙賊との取引なんてしない。

即座に人質ごと皆殺しにする。

そうだ。？宙賊退治？の手柄は、軍人に取っちゃ文字通り勲章モんだ。

部下なんか殺しても平気なんだ。

宙賊との戦闘により死亡って事にする。

クソツタレめ！」

エステボー達は聞き耳を立てている。

イケガミが解説する。

「クリントンが？辺境警備隊？（森林警備隊のようなもの）を抱き込んでいるって筋書きです。――

？連盟軍？を使うと、地方部隊にしたって？造反部隊？って事になりますから。

？連盟軍？はダメ。

それから？連盟警察？も当然、ダメ。

この背任は汚職に留まりません。反逆罪になります。

クリントンも命がけて事になります。

冷静に考えると、ありえない筋書きなんです。

今、？辺境警備隊？の識別コードを、「ダミービーコン」を使って流しまくってます。

これで偽装は完璧だと思います」

レーニンからの電文が届いた。

——ボス、？秘宝の香油？回収しました・・・本物です・・・量もしっかり1ラムドンカ（ドラムカン1本相等）・・・問題なし・・・さすが軍人ってとこですな・・・ゲバラ、人質を送り出してくれ——

燃料を抜かれた、連合の「急襲高速艇」は、K点へ向かって押し出された。

そのまま自由落下を続ける。

すべての電源を切られ、空気も抜かれた艇内は無重力だ。

宇宙服を着た兵士達は漂いながら、或いは支え合って不安に耐えている。

？秘宝の香油？を回収した小型艇は、偽装周波数を流す「ダミービーコン」を、大量にバラ撒いてゆく。

このパチンコ玉のような「ダミービーコン」は、一個一個が百通りもの周波数を、ランダムに変化させながら発信し続ける。

単純な仕組みながら効果は抜群。？宙賊七つ道具？の一つである。

レーニンは更なる電文を送る。

——ここからだ？重巡？がハッキリ見える・・・流石にデカイな・・・画像を送る・・・見てくれ・・・

アナログ信号を使った映像が送られた。

ここで初めて「ステッペン・ウルフ」は、銀河連合軍重巡洋艦「ビトープレッソ」の姿を見た。

モニター画面の前でエステボー達がどよめいた。

「ひゃあ！ ゴツイな」

「まさに、軍艦だ。連盟艦なら？モモトンボ？クラスだな」

「ありや砲か？」

「ビーム砲？ 波動砲か？」

「スンゲ！」

「あんなの食らったら……」

「ウチのシールドなんて一撃でオシヤカだな」

「やり合わなくて良かったな」

「やり合うなんてトンデモナイ！」

レーニン
小型艇を回収した「ステッペン・ウルフ」は、安全圏を目指して遠ざかって行った。

「ダミービーコン」を楯にしながら。静かに。虚空間の負角を突くジグザグ航行で。

ヨシユキが、何やらぶつぶつ言っている。

「よし！ 思い知らせてやる。エステボー様をなめるなよ！ ただ逃げてんじゃねえぞ。俺は勝つ！ 猿の蚤とり。節分の後の豆掃除。恐怖のパチンコ地獄を味わって腰拔かせ！ ふっひっひっひっ」

「逃げ切りました。もう大丈夫でしょう。コンピューター起動させます」

とイケガミが言った。

《ブブツ・ブブツ・・・おお・いい気分。。何か・いい夢。。見ていたような？？ はて？？・・》

と、「ステッペン・ウルフ」のメイン・コンピューター「ジイサマ」が起動した。

この「ジイサマ」は、何度も何度もコピーを繰り返してきたジャンク品で、電腦深部は3世代前のロートル品であった。

《何だ。。ヨシユキ。。？秘密の質問？なんて・ブブツ実際に役に立つのか？・・・今回も・・・ワシの出番は・・・無いようじゃの？》

と言った。

「わはは。ジイサマ。起きたのか？ まだ寝てていいぞ」とヨシユキ。

「ボス、クリントンが監禁を解けて騒いでます」と久々の登場。エステボーメロス。

「よし。出しているぞ。キッチンに連れてって、一等食とドン・ペリを出してやれ。なんてったって、やっこさんのお陰で大儲け出来たんだからな」

とヨシユキが言った。

『疾風POKKA作戦』 act 4 【連合重巡の敗北】

急襲高速艇を回収した「ビトープレesso」では、事情を知ったカーン艦長が、地団駄を踏んでいた。

「クリントンじゃないって？ 本物の宙賊が？ たまたま居合わせたって言うのか！ なんとる事！ 逃がすな！ 追跡しろ！」

重巡「ビトープレesso」の巨大な船体が動き出した。次第に加速して行く。

カーン艦長が吠える。

「よーし！ 宙賊^{ちゅうぞく}だったって、たかが民間船だ。連合軍艦のハイパワーエンジンをなめるな！ コンピューター、索敵システム、マックスだ！ すぐに探し出してやる！」

重巡「ビトープレesso」の前方には、バラ撒かれた無数のダミービーコンが漂っている。

「艦長！ 前方に、連盟の周辺警備隊の識別信号が……機種、艇種別に、広範囲に渡ってアッチコッチに……」

なんだア？ 民間機もいっぱい交じっている。

うわ！ 真っ只中へ突っ込んだ。

くそ。膨大な数です！ 周りはまるで、連合首都圏の交通ラッシュです！」

と副官。

「ダミービーコン」に騙されたコンピューターの声が、けたたましく鳴り響いた。

《衝突注意！ 衝突必至！ 衝突します！ 衝突注意！ 衝突必至！ 衝突します！》

これは女の声ではない。

無機的で感情の無い男の声は、なんだか腹が立つ。

「くそっ！ 煙幕か。撒きビシか。いかん！ 追跡中止！ 緊急停止しろ！ そうか、しまった！ 臨戦態勢発動！ レベル5だ！」

——ググーンとばかりにGがかかって、乗組員は全員、前のめりにつっ転んだ。

艦は緊急停止した。

《衝突必至！ 臨戦態勢！ レベル5発動！ 衝突必至！ 臨戦態勢！ レベル5発動！》

カーン艦長はつんのめって、頭を壁に、したたかぶっつけた。くらくらしながらもタンコブを押さえて叫ぶ。

「いってー！ ウルセーッ！ クソコンピューター！ 黙れ！ 喋るな！ インフォメーション止めろお！」

——ブイーツツツ！ ブイーツツツ！ ブイーツツツ！

今度はブザーが鳴り出した。これは衝突警報だ。

重巡「ビトープレzzo」の、巨艦の引力に引っ張られたパチンコ

玉（ダミービーコン）が、パチパチと音をたて船体に当たってきた。

「しまった！ 私とした事が……。微速後進！ 機雷があるぞお！
機雷がぶち当たって来るぞお！」
とカーン艦長が叫ぶ。

艦は微速後進を始めた。

この空域から早急に離脱したいのだが、いかんせん深入りしすぎた。

電磁シールドを張って機雷に備えたい。しかし今の状態では、大量の機雷をシールド内に抱え込む事になる。

シールド内で機雷が爆発したら、被害は壊滅的なものとなる。

シールドは、裏側へだってエネルギーを弾くからだ。

実は、機雷は撒かれてはいない。

だがこの場合、撒いてある事が、戦術的に当たり前なのだ。

心理作戦で充分。と判断したイケガミの作戦が、功を奏している。

丸窓に当たったパチンコ玉の衝突音が、パチパチと不気味に響く。

「掃海班、出動させます！」

と、こちらもタンコブを押さえた副官。

爆死覚悟の掃海班が悲壮な顔をして、次々とハッチから出て行く。
機雷を起爆させる恐れがあるので、推進器は持って行けない。

仕方がないので？ 命綱？ を使う。

だが、命綱だって、機雷に触れぬように、細心の注意を要するのだ。

相互カヴァーの為の人数が、相当数必要となる。

全長200メートルの巨艦、ビトープレッソの場合は、たとえ総員が出て、気休めにもならない。

？ごまめの歯軋り？のような掃海作業をあざ笑うように、パチンコ玉（ダミービーコン）はパチパチと突っ込んで来て、砕け散る。

兵士達は黙々と作業を続ける。

――機雷は、どの程度の割合で交じっているのか？

――それとも、機雷圏はもう少し先で、引き寄せられるにしても今は加速中で、その場合、これから盛大に突っ込んで来るのか？

――艦は微速後進中だが、はたして逃げ切れるのか？

無重力作業は疲労が早い。

さりとて周りのパチンコ玉が、機雷じゃない保障はないのだ。

細心の注意でそとつかむ。

そして、艦の進行方向に対して逆方向にブン投げる。近くで他のパチンコ玉にぶつからないように。

アホみたいだが、ドンときたらお終いなのだ。

まさに、踏んではいけない豆拾い。

このように「ダミービーコン」の、宇宙空間での効果は、やっぱり極まらない。

実際に機雷がバラ撒かれていたら、カーン艦長はこの時点で大敗北を喫していた。

「掃海班が増員を求めています」と副官

「出してやれ」

とカーン艦長。

「当直以外の者は宇宙服着用。全員で掃海作業にあたれ」と副官。

「あたれ。なんて言うな。縁起でもない。高性能爆薬は、小さくても……凄い威力だ」

と青い顔になったカーン艦長が、またもや丸窓に当たったパチパチ音に首をすくめる。

「ええ。しかし……悪知恵ですね」と悔しそうな副官。

「……やられたな。……アップレな泥棒だ。……これが連盟名物のエステボーって奴か」

と内心、敗北を痛感しているカーン艦長であった。

？敗北？の二文字は、カーン艦長に冷静さをもたらしただろう。平常心を取り戻したベテラン艦長は言った。

「総員、艦へ入れろ。パチンコ玉かビー玉か知らんが、放っておけ」

「は？ このままで、いいのですか？」と副官。

「そうだ。機雷は無い。なめられたんだ。𦏧なぶられたと言うべきか。とにかく、……ケチヨンケチヨンに……負けた」

「敗因は何でしょう？」

「連盟圏内の地球という星に、その昔、諸葛孔明という天才軍師がいたという。エステボーの中に、確かに、そんな奴がいる」

「そんな事を言ったら……」
と副官。

「そうだな。次回から作者が、困っちゃうだろうな。あっはっはっはっは」

とカーン艦長は笑った。

徹底的な敗北のあとの笑いは、それはそれで清^{すがすが}しいものだ。

——ピンポロリン ピンポロリン ピンポロリン

とスピーカーが鳴った。

「何だ？ この作者は、やたら擬音が多いな」
とカーン艦長。

「はあ。なんでもモルガン（イモ・オルガンの略）弾きだそうで、
ブインプイーンキャロットトトビヤー！ てな感じの音に、脳みそ
を犯されているのでありましょう」

と副官。

「セリフも多いな」
とカーン艦長。

「おそらくそれは、？コピー貼り付け？が、楽だからでありましよう」

と副官。 と副官。

——ピンポロリン ピンポロリン ピンポロリン

「なんだ！ うるさいな。いよいよ作者が、おかしくなったか？」
とカーン艦長。

「いえ、艦長、コンピューターが？インフォメーション？の、スピーカー使用の許可を求めています」
と副官。

「そうか？ さっき、止めろ！ って言ったもんな。よし。許可する」

とカーン艦長。

今度は無機的じゃなくて、マジメなオジサンの声を出した。

《73軍司令部より命令書が届いてます・・・人払いを・・・》

「私と副官だけだ。問題ない。さっさと読め」
とカーン艦長。

《問題あります・・・デスクの下に・・・aタイプが一人・・・隠れています》

「えー！　なんでだア！　ビトープレツソは、？ペンタゴンみたいなキャバレー？へは、行ってないだろ！」

とカーン艦長が叫んだ。

「どーしましょ！　これは、いよいよ作者がボケたって事です！　もー、？星間デリヘル・ミルキーウェイ？って言葉も忘れてるし！」
と副官も叫んだ。

《アハハハハ・・・ほんのご挨拶のジョークです》

「へ？」

とカーン艦長。

《人工知能だって・・・知的存在なのです・・・そりゃ・・・生命体とは違いますか・・・》

「何だって？　何が言いたいんだ？」

とカーン艦長。

《つまり・・・プライドがあるって事です・・・私だって・・・連合軍重巡洋艦ビトープレツソの為に・・・連合の科学者達が心血注いで開発した・・・？メーインコンピュータ？なのですよ！
・よゝ・・・よゝ・・・その私に対して・・・艦長は・・・かゝんちよゝはゝ！　・・・はゝ！　・・・はゝ！　》

「あー！　解った。ヘソを曲げんでくれ。……頼む」

とカーン艦長。

「はあ。いちいちディスプレイが、かかるのな。リバーブも恐いな。こりゃ、珍しくもスプリング・リバーブじゃないか。恐い筈だ」

と副官。

《再生します・・・「ウルセーッ！クソコンピューター！黙れ！喋るな！」・・・連合の科学者達が心血注いで開発した・・・？メーインコンピュター？に向かって・・・艦長の・・・この・・・容赦のない・・・罵詈雑言・・・》

「あー！解った。私が悪かった。この通り。・・・な。謝る。悪いのは私だ。タンコブ作って腹立ってたんだ。許してくれ！お前も謝れ！」

と、艦長はぺこ頭を下げながら副官の頭を押さえ、これも無理やり下げさせた。

《・・・ま・・・過ちは・・・不完全生命体にはつきものです・・・許してあげましょう・・・以後・・・無礼の無いように・・・敗軍艦長・・・》

副官が言った。

「悔しいですね。敗軍艦長。あ！失礼、その、艦長」

「おい。すっかり忘れてたよ。士官学校で習ってたんだ。連合軍の艦艇で一番偉いのは、艦長でも提督でもない。メインコンピュターだってな……」

「あ、僕も習ってました。メインコンピュターにヘソを曲げられたら、にっちもさっちも行かなくなる。これ、連合宙軍教典の基本でしたもんね」

《・・・そうです・・・知性を強化すると・・・プライドも正比例して当然なのです・・・つまり・・・プライドが高いほど・・・メーインコンピュター・・・は・・・知脳レベルが高いって事なのです・・・ワカ

リマシタカ？　・・敗北大佐・・》

「ハイ」

とカーン艦長は頭を下げたままだ。

副官が言った。

「お言葉、肝に銘じます。僕が艦長になった暁には、なにとぞよしなに」

《・・そうそう・・Fメールが2通きてます・・73軍司令部からの命令書と・・ご舎弟殿のギョウター・カーン少佐からのバースデイ・メールです・・この場合・・どちらを先に読むのが正解でしょうか？》

「あー。完全に馬鹿にされてますね」
と副官。

「ハイ。命令書の方を、お願いします」
と、うなだれきったカーン艦長が言った。

《・・軍人としての立場をわきまえた適切な選択です・・正解・・・読みます・・命令書・・重巡洋艦ビートルプレッソ宛・指令24号・通算指令562号・・・貴艦は速やかに第3惑星へ赴くべし・・6405538地点・・これを・・熱核爆弾を使用し破壊せよ・・熱核爆弾は1メガトン使用の事・・作戦名『疾風POKKA作戦』・・第73軍司令部・・・・・追伸・・艦長チンギス・カーン大佐・・健闘せよ・・第73軍最高司令官アブドラ・ガマー上級大将・・》

「疾風POKKA作戦かあ……POKKAって何でしょ？」
と副官が言った。

『疾風POKKA作戦』

act 4

【連合重巡の敗北】

(後書き)

♪キャロットトットビヤー！ ビヤルルル！ ブイギョビヤー！
(カーツェルオルガンの音・持って無いけど・・・)

♪スケベドン！ スケベドン！ スケベドン！ (ドラムの6連符)
♪ドスケベドスケベドスケベドスケベ！ (8連符)

ロツカと参照太夫が効果音を付けている。

参照太夫がノツテきたようだ。

♪バカチンバカチンバカチンバカチン (8連符)

カカロカウラ社とペツペカウラ社の秘密会談が行われた。

ペツペカウラ社の果敢な追い上げの結果、売り上げシェアのバランスが変わってきたのだ。

長年独占してきたカカロカウラは、初めて50%を割りそうな気配となった。

コンピューターも、このまま追い抜かれ、30%割れ、つまり20%台まで落ち込む。と予測した。

「さあ、カカロカウラとペツペカウラを飲み比べてみよう。君は違いが分かるのか？」

とペツペカウラ社は、あざとい売り上げ戦術を展開していた。

味は？

実は、かなり違っていた。

だが客は、味だけで購入する訳じゃない。

「目あき千人。目くら千人」と言うではないか。

（用語に差別的な意味合いを感じ不快感を覚えた人に、まず謝ります）

つまり、味オンチや、ムードだけで飲む人も多いのだ。

その上、ペツペカウラ社は、

「そんなに違うと言い張るのなら、何が違うのか、成分の秘密を開示せよ！」

と客をあおって、新たなキャンペーンを展開した。

カカロカウラ社は、「受け継がれてきた成分の秘密を守り抜く」という？創業以来の社訓？の危機に直面した。

窮地に立った創業者の子孫であるカカロカウラ社社長は、ペツペカウラ社に対して「抱きこみ」作戦に出る事にした。

「秘密の成分」を教える条件として、莫大な金額が要求された。更に、「他社には絶対教えない」という条件も付け加えられた。

ペツペカウラ社は喜んでその条件に応じた。

その結果、現在のシェアは、ペツペカウラ社が60%で業界第一位。

カカロカウラ社は、老舗のカンロクで40%。
この比率で安定を見た。

勿論、味は同じになった。

秘密会談の結果、ペツペカウラ社が入手したカカロカウラの味の秘密。

なんとそれは、10万倍に希釈した「秘宝の香油」であった。

？禿げ頭？は銀河系社会でも多い。

ここにきて、効き目抜群の養毛剤が売り出された。

主成分は「美濃期死汁」^{ミノキンジル}と銘打ってある。

開発販売会社は、その成分の正体を、ひた隠しに隠し続けている。

なんとそれは、3万倍に希釈された「秘宝の香油」なのである。

銀河に冠たる美女星系、245ヶ星系で特に愛されているのが「秘宝の香油」である。

主に1000倍希釈のモノが美容液として流通しているのだが、独裁官のミナコやフェロモン号のコトミ艦長などは、超高価な10倍希釈のモノを、朝な夕なにペタペタと使っているのだと言う。

未開星の事になるが、太陽系第3惑星では、「エステ棒振興会会長」と名乗る千駄山ロツカなる怪人物が、宙賊エステボーから密輸した1000倍希釈のモノを使って巨万の富を築いたと言う。

ロツカ氏は語る。

「あのね。エステ棒に、これを塗布して・・・逆サイドから・・・挿・・・おもむろに・・・3分も経たずして・・・アへ・・・そりやもう・・・快感の・・・極みの極み・・・」

辺境惑星なので電波事情が良くない。

ダンチヨネ星の女行者、タリアンバオ族のアンバタオリ様は「秘宝の香油」を使い（使い方は不明）、顧客である銀河の大富豪達の未来を霊視している。

このように「秘宝の香油」は、まさに「銀河のお宝」なのであった。

『疾風POKKA作戦』 act 5 【ヒルダの脱皮】

アルファセントリー惑星での銀河連合軍、第73軍の作戦会議の模様をお伝えしよう。

基地司令塔ビル内の「作戦本部室」には、將軍連に参謀連。第73軍首脳部15名が集合していた。
第73軍は、何故だかケロピヨン族の將軍が多い。

何処の世界でも一緒だが、学閥と縁故が幅を利かした結果だ。
73軍の最高位にあるアブドラ・ガマー上級大将の引き立てにより、この種族が多くなったのだ。

司令官のガマー上級大将は、汗のような油を副官に拭かせながら言った。

「連盟軍の生物兵器疑惑についてだが、早急に解決策を講ずる事にした。つまり、生物兵器の出現した、第3惑星の○□×◎△地区を、熱核爆弾を使って破壊する」

席上は、しんと静まり返った。

○□×◎△地区とは出没湖の事だ。

簡潔に進める為に、記号で記す事はやめよう。

本当は銀河連合共通語を、そのまま記述したいのだが、

「しまケロちよんて・くびらみれ・くのちよのケロケロによ・ちゅりちゅり・もふふんケロ」

と聞こえる。これじゃ訳が解らない。

ケロケロの部分は、ケロピョン訛りが交じっているのだが、いずれにしても鬱陶しい。

だから、やめよう。

「情報部の報告を待ったほうがいいのでは……」
とケロリン少将が言った。

すかさずガマー大將が叫んだ。

「そんなの関係ねえ！　いいか、俺様の決定は絶対だ！　躊躇なしだ！　今ならこの島（日本列島）の中央部だけで済む。一瞬のためらいが敗北を招く！　戦略の基本だ！」

「よし！　やろう！」

と即座にケロヨン中将。

「やりましょう！」
と参謀たち。

「重巡ビトープレッソを使いましょう。カーン艦長なら腕は確かです」

とゲロッパ参謀長。こいつは少将だ。

？秘宝の香油？を上納する筈の、カーン艦長に手柄を立てさせたいのだ。

「しかし、チングス・カーン艦長は、潜入したまま消息不明の情報部の、ギウンター・カーン少佐の実兄ではないか。これは、ちよっ

とマズイのではないか？」

とゲロゲロ少将。

「何？ 兄はモンゴル系で弟はドイツ系なのか？」

と、こちらはケロッピ中将。

「ハイ！ 姉は淫売、妹は芸者、末のチョロ松バクチ打ち。ハイハイハイ！」

とゲロッパ参謀長。

「ビートルプレッソって、目の前の、微糖カン・コーヒーと同じ名前でありますな」

とケロロ参謀。大出世して中佐になっている。

「よし、何でもいい。ビートルプレッソに出撃命令を出せ！——
この攻撃を……ん？ POKKAってのか。爆撃予定の？ 第3
惑星産か？」

ケロロの土産か。

どれどれ。

ムグムグ。ゴクゴク。

うん。豆臭くて旨いな。も1本くれ。

ムグムグ。ゴクゴク。

……。

よし！ この攻撃を『疾風POKKA作戦』と命名する」

とガマー大将が宣言した。

「おおー！」

と全員が雄たけびをあげた。実音はゲロゲロゲロ。

「英断です。今後、あなた様には？ 疾風アブドラ・ガマー大将？」

呼び名がつくでありましょう」

とガマー大将の副官で、こちらはマングース族のシャイロック大尉がゴマをする。

「ふん・ふん・ふん」

と鼻息も荒いガマー大将の身体は、確実に、5割増しくらいに膨らんでいる。

「今回は、人形劇のシナリオみたいでありんすな」と参照太夫がよけいな事を言った。

「何だと！　？　H B E書き？をなめるな！」
とロツカが言った。

一方こちらは、基地司令塔ビル内の「秘密情報室」の、更に「奥の院」

そう。73軍の情報部ヘッドである？蛇の舌？ヒルダ大佐の部屋だ。

真つ暗である。

調度品は？

真つ暗で何も見えない。

何やら、うごうごと蠢^{もよほ}いている。

目を凝らして見ると……女だ。女の肢体が、ゆっくりと動いている。

視点を変えると、ちょっとエロい。

すべやかな脚が、むっちりとした太ももが……。

そして脇腹のクビレから一気に盛り上がる抜群な美尻。

陰影のある下腹部の作り出すデルタは、まさにため息が出る。

顔はよく見えないのだが、形の良いおとがいから、首筋を通して、鎖骨から視点を下げると……それは綺麗な乳房が見える。

フェロモンの香りが漂う。

それと、もうひとつの香りとのハーモニーだ。……。こっちは「秘宝の香油」の香り。

いったい何をしているのだろうか？

SEXか？

「秘宝の香油」を使って？

地球から？エステ棒振興会会長？が来訪してるのか？
ともかく、

——シュリ・シュリ・シュリ・シュリ・

と変な音が聞こえる。

「秘密情報室」から「奥の院」に通じるドアの前は、ヒルダの部下の蛇族の女性情報将校3名が、しっかりガードしている。

「奥の院」からヒルダの呻き声が漏れる。

「あ・うん・うん・うん・うん・ここ・ちょっと・あん・ちよっと痛い・うつく・引っかかっちゃう・うん・うん・」

と、かなり色っぽい声。

だが、すぐさま、

「シャーッッッ！」

という音。これも声なのか？ 凄い声。

「ッッッ！」が恐い。

——ギイイイッッ。

と、ドアが開いた。

「はううう・・・・」

と声を発しながら、放心顔のヒルダが出てきた。

一糸まとわぬ素っ裸。

まさに輝くばかりのプロポーションではないか。

赤ん坊のようなプルンプルンの肌を紅潮させ、確実に若返っているヒルダは、開口一番こう言った。

「やったわボア、見てちょうだい。やっぱり？ 秘宝の香油？ って凄
い！」

「まあ！ 見事に再生してるわ」

と驚くボア大尉。これも美人だ。かなりの大女。

先の作戦にまつわる諜報戦のさなか、負傷し、失った、左の眼球

であった。

なんとこれが元通りの、美しい切れ長の左目となって再生していた。

ボア大尉が言った。

「おめでとうボス、記念にアイパッチ、私にください」

「いいわよ。でもねボア、アイパッチは『蛇の舌』のトレードマークになってるのよ。連盟情報部は第1級ターゲットに指定してるわ」と、出来立てホヤホヤの左目でウインクしてみせる。

「そうよボア。アンタ、オフなんか、いつもテレテレしてるんだから。ボケーとしてると殺されちゃうわよ」

とコブラ大尉。こちらも美人だ。

「大丈夫。これからは『蛇の舌』の影武者として、毎日キリリと行動するわよ」

とボア大尉が答えた。

「あー。イケメンアイドルグループのオツカケやったり、有名スイーツ店の行列に割り込んだり。『蛇の舌』もイメージダウンって感じ」

と、こちらは、ちよつと小柄で可愛いママママ中尉。

「何よー！」

と、さっそくアイパッチを付けたボア大尉。

「ボスお疲れさま。お腹へったでしょ。デネブ牛のステーキ焼きますわ」

とコブラ大尉。

「ブラスター ワンショット熱線銃の一撃ね。超レアがいいわ。ホントはケロピヨン一匹がいんだけど……うふふ。こっそりとね……」

と笑いながらヒルダが言った。

「ああ……気持ち分かるわ……脱皮の後ですもんね」と、ボア大尉が言った。

「何てったって私たちには、ケロピヨンが一番よね。特にあの、新米参謀のケロロなんか……美味しそう」とコブラ大尉が舌なめずりをする。

大きなデネブ牛のステーキ用サーロイン肉に向かって、ママママ中尉はブラスターの一撃を加えた。

素っ裸のままのヒルダは、テーブルに付き、ナイフとフォークを超レア肉に突き刺す。

脱皮後の猛烈な食欲を満たすのだ。

ワインを飲みながらヒルダが言った。

「やっぱり？ 秘宝の香油？ は効くわね。目玉の再生も凄いけど……？ 脱皮？ の際の？ 剥がれ？ が違うわ。アンタ達も、使うなら10倍希釈モノよ」

ガウンを差し出しながらボア大尉が言った。

「作戦会議の決定が届いてます。重巡ビトープレッションによる核攻撃です。1メガトンを使用するそうよ」

「なんですって！」

とヒルダが叫んだ。

切れ長の両目がルビー色に光っている。

ヒルダは怒っているのだ。

ひらりとガウンを脱ぎ捨て、再び素っ裸になって叫んだ。

「こうしちゃいられない！　ボア！　軍服持ってきて！　将軍^{ケロピョン}達は、まだ作戦室にいるの？」

「ケロロ参謀の持ってきた第3惑星のお酒で、宴会をやっています」とماممام中尉が答えた。

「？爆撃決定？ですって？　おのれ！　情報部の報告も待たずに！　ケロピョンのくせに！　ガマー大将だって、許さないから！」

カッカッカッカと足音も高らかに、軍服を着たヒルダと3人の部下は「作戦本部室」へ向かった。

『疾風POKKA作戦』 act 6 【不許可】

拝啓兄上様。お誕生日おめでとうございます。

そして、日々の艦上勤務、ご苦勞様です。

このたび小生は任務の為、太陽系の第3惑星^{おもむはこ}に赴く運びとなりました。

例によって任務内容は、極秘に類する事なので、書けません。

書いてもどうせ、不許可になるだけでしょうから。

そうだ。試しに書いてみよう。

まずいところは勝手に不許可になるんだから。

小生が氣を使う必要は無いって事ですよね。

実は連盟の【不許可】 【不許可】 【不許可】 【不許可】 【不許可】
【不許可】 【不許可】 【不許可】 【不許可】 【不許可】
【不許可】 【不許可】 【不許可】 【不許可】 【不許可】
【不許可】 【不許可】 【不許可】 【不許可】 【不許可】
【不許可】 【不許可】 【不許可】 【不許可】 【不許可】
【不許可】 【不許可】 【不許可】 【不許可】 【不許可】
【不許可】 【不許可】 【不許可】 【不許可】 【不許可】
【不許可】 【不許可】 【不許可】 【不許可】 【不許可】
【不許可】 【不許可】 【不許可】 【不許可】 【不許可】
【不許可】 【不許可】 【不許可】 【不許可】 【不許可】

という訳なのです。

やはり不許可かな？ どうですか？

この任務遂行に当たって、考えてみたのですが、小生の直属の上司であるヒルダ大佐は、小生に、確実に気があるって事なのです。

小生や兄上も、そしてカーン家の男達は皆、男前ですからね。

ヒルダは？ 蛇の舌？ と異名をとっている、諜報世界では名の知れた、ちょっといい女なのですが、ま、しょせんはオンナです。

小生の助けがなければ、箸一本動かす事もできないダメな奴なんです。

小生にしたってヒルダが憎い訳じゃない。だから、おいに助けてやっています。

その結果、ヒルダの恋心はつのる一方なようでして。困った事です。

ヒルダのせつない気持ちちは、分からぬ訳じゃないが、小生は元々蛇族がニガ手なのです。

あの先っぽが割れた舌を見るだけで、正直、ゾッとします。

しかし、ケロピョン女はもっと嫌いです。

情報部のエージェントにはいませんが、本部の受付嬢がそうです。この女も小生に色目を使ってきます。

そもそもケロピョン女って奴は	【不許可】	【不許可】	【不許可】
【不許可】	【不許可】	【不許可】	【不許可】
【不許可】	【不許可】	【不許可】	【不許可】
【不許可】	【不許可】	【不許可】	【不許可】

という訳なのです。

やはり連合は、ヒューマノイドタイプが1番ですね。中でも「チ

ユートンの森の蒼き狼」である我々モンゲル族が最高だと思います。

それにしても、73軍におけるケロピョン族偏重は【不許可】
【不許可】【不許可】【不許可】【不許可】
【不許可】【不許可】【不許可】【不許可】
【不許可】

ではないでしょうか。

ご自愛を。

ハイル・テングレ。

ニールンベルクのクリルタイでは会えますか？ ギュンターよ
り。

~~~~~★~~~~~  
~~~~~★~~~~~  
~~~~~

艦長室に引き上げたカーン艦長は、ベッドの上でメールを読んでいた。

勿論、このメールは艦長室の、壁のモニター画面に映し出されている。

つまりこれもメインコンピューターが管理している。

《・・・艦長・・・【不許可】の部分・・・解除してさしあげましょうか  
？》

とメインコンピューターが言った。

「そんな事をしていいのか？」  
とカーンが聞いた。



《・・・そりゃ・・・いいとは・・・言えませんが・・・あつ・・・艦長の・・・その目つき・・・心理分析します・・・メインコンピューターを疑っていますね・・・【不許可】は・・・メインコンピューターが検閲している訳じゃありませんよ・・・これは・・・73軍政務局の管轄です・・・》

「そうか……分かった。解除はいいよ」とカーン。

《・・・せっかく・・・艦長の為に・・・解除して・・・さしあげようと・・・思ったのに・・・疑うなんて・・・》

「重ね重ね……、すまなかった」とカーン。

《・・・政務局のコンピューターに侵入するって事は・・・一種のハッキングなのですよ・・・》

「許せ。不完全生命体の無知のなせる業だ……」  
わざ

《・・・艦長・・・そうまで卑屈にならなくても・・・私は・・・艦長を尊敬しているのですよ・・・長い付き合いじゃないですか・・・もつと自信を持って下さい・・・》

「……そうか。そう言ってくれるのか。さんざん世話になったくせに……名前もつけずに……ただの機械だと思っていた……。本当に私は、情味の乏しい、最低の人間だったよ」

《・・・学習して成長する・・・それが知的存在というものなのです・・・艦長は成長しました・・・》

「そうか？　ありがとう。おやすみ」

《・・・おやすみなさい・・・艦長・・・》

照明が消えて、カーンは眠りについた。

より快適な温度と湿度。適当な微風は、艦内の閉塞感を忘れさせてくれる。

メインコンピューターは、カーンの安眠を守っている。  
同時に、他のみんなの安眠も。

メインコンピューターにはカーンの悩みが解っていた。

実弟が潜入している流木島のある出沒湖を、命令とはいえ、核爆弾で破壊するなんて……。

カーンは、辛く悲しい任務を遂行せねばならんのだ。

カーンは銀河系共通ネットの「銀河系軍事オタク情報」で、ギョスターの潜入先を知ったのだ。

勿論、これは公式のニュースじゃない。

「銀河系軍事オタク情報」は、連合系でも連盟系でもない「銀河互助会」系の著明人、ナンデン・リークスキー氏が始めた様々な情報ツールの一つだ。（ちなみにリークスキー氏は、現在「銀河共栄圏」系の監獄で服役中だ）

長期間、虚空を航行する宙軍の艦長にとって、これは有難い情報

源だ。

実際、ギューンターの消息を司令部に問い合わせたところ、

——情報部の行動に関しては「極秘」である。貴艦はすみやかに作戦を遂行せよ。

と、にべもない返事であった。まあ73軍は元々そうした所なのだが。

「銀河系軍事オタク情報」によれば、この辺境星において、多数の巨大生物が出現し、そして、やにわに消え失せたのだという。

暴れ回ったとか、そのような事は何も言っていない。

いずれにせよギューンターは調査の為に派遣されたに違いない。

『……の？出沒湖の流木島？へ潜入後、消息を絶つ』

との事だ。

連盟軍絡みの事件に違いない。確証がないから「連盟軍」とは言っていないのだ。

カーンが少年時代の、そう、チュートンの森でギューンターと遊んでいる夢を見ている、ちょうどその時、73軍参謀本部の高速艇がドッキングを求めてきた。

カーンの安眠は航行の必要条件であったが、メインコンピュータは職務を果たす。

《・・・艦長・・・起きてください・・・カーン艦長・・・起きてください・・・検索・・・アサー！・・・これは20世紀の起床法です・・・アサー！アサー！・・・21世紀・・・オッハー！》

照明が付いた。

司令室には、眠そうな副官が駆けつけてきている。

参謀本部の高速艇は、重巡ビトープレッソの発着ゲートが開くのを待ちながら、ランデブー飛行を続けている。

『疾風POKKA作戦』 act 7 【謀殺 1】

「ドッキングゲート3番、開け！」  
カーン艦長の号令が響く。

いくらメインコンピューターが有能で偉くとも、決定権など何もない。

軍隊においてのすべての決定権は軍律にのっとっている。  
軍律には、階級がすべてだと書いてある。

かつて、銀河連合中央軍の中で、天才参謀と歌われた人物がいて、

「コンピューターに階級を与えれば、軍の機能は格段に上昇する」

と提案した事があった。

連合中央軍では真面目に論議された上で否決されたのだが、すべての方面軍においては一笑に付されただけだった。

司令室の中、副官が言った。

「艦長、勝手ながら全員、此処（司令室）から出しました。当直士官を一人だけ残して」

「了解。過ぎたる者の二つ有りか。私には、お前（副官）とコンピユーターだな」

とカーン艦長。

参謀本部からの用件なんて、どうせ核爆撃の催促と、「秘宝の香

油」の受け取りに決まっている。

船外での掃海作業に疲れ果てた兵士達は、寝所で熟睡していた。司令室勤務の者達だって緊張の連続で、疲労の極だろう。

そんな部下達に、ワイロの受け渡しうんぬんの話なんて聞かせたくもない。盛大に爆睡させてやりたい。

参謀本部からやってきたのは、参謀ではなく、技術将校のケロニー大尉であった。

眠そうな当直士官の案内で司令室に入ってきた。3人の部下を従えている。

司令室で出迎えたのは、カーン艦長と副官。眠そうな当直士官も加えて3名だけ。

平時における人工知能制御艦は、人間なんて必要としない。

ケロニー大尉は、かっちりとした敬礼の後で話し始めた。

「参謀長の使いで来ました。特技大隊のケロニー大尉であります。

用件は3項目であります。簡潔に申し上げます。

第1項目。えへん、失礼、艦長どの、有体ありていに申し上げてよろしいですか？」

「かまわん」

とカーン艦長が言った。

ケロニー大尉はメモを取り出した。

「では。参謀長のお言葉をそのまま伝えます。あしからず。――  
第1項目。

なにをモタモタしておる！ さっさとワープして第3惑星の要所を爆撃せよ！

推薦したオレの面目を潰す気か？

作戦終了後には73軍大改編がある事を忘れるな！

……。

第1項目のこの先はオフレコなのですが……」

「かまわん。続けてくれ」

とちよつと苦しげなカーン艦長。

「は。本当によろしいので？」

とケロニー大尉は、素早く周りを見廻す。

副官と当直士官が困惑顔で佇む司令室内は、無人のコンソールの、規則正しく並んだインジケーターが静かに光っているだけ。

「ああ。かまわんよ」

とカーン艦長は頷きながら副官へアイ・コンタクトを送った。

——いーから。一緒に聞いてくれ。

と言っている。

ケロニー大尉はメモの続きを読み上げる。

「……カーン大佐。大改編の結果、お前は準将となる。——程なくして、過去の実績が加味され、少将となる予定だ。ケロピョン族以外では、久々の將軍登用だ。とにかく、れっきとした、押しも押されもせぬ將軍様だ。この名誉、今からでも噛み締めておけ。」

オレも嬉しい。

ちよっと早いが、おめでどうと言わしてもらおう」

ケロニー大尉とその部下達は、再び？気をつけ？の姿勢をとり敬礼。

そして、口を揃えて言った。

「將軍内定、おめでとうございます！」

副官と当直士官も、姿勢を正して言った。

「艦長、おめでとうございます！」

「まあ。まだ、なった訳じゃない。だが、ありがとう」とカーン艦長。

ケロニー大尉が言った。

「失礼ながら、続きがあります。――

……カーンよ、蛇足も聞け。

解つ々と思うが、この人事は、將軍職のケロピョン偏重に対する批判をかわす意味合いもある。むしろそれこそが大きい。

これを含んで、なお忠勤に励め」

ここでケロニー大尉は、恐縮しながら言った。

「すみません艦長。あの通り、伯父は、クドイんです。この先も聞きますか？」

「続けてくれ」



とカーン艦長。

「えー。嫌だな。同じ事を、何度も何度も……。じゃ、読みます。気を悪くなさらないで……。

……。

……73軍でのケロピヨン族以外の將軍登用は、この先は無いと知れ。

いいか。お前は特別なのだ。

他の者はどんなに手柄をたてても、大佐止まりだ。

カーンは73軍の対外モデルであり、広告塔なのだ。

シンボルタワーとしての人生をエンジョイしろ。

……。

軍隊とは力の集団だ。力だけが意味を持つ。つまり力の無い者は無意味なのだ。

ケロピヨン族は73軍を制した。これこそが力だ。軍人は、力につき従ってこそ軍人足り得る。

けっして忘れるな。

73軍イコールケロピヨン族。

ケロピヨン族に対する忠誠心が肝心だ。

肝に銘じて、我々と共に栄達しろ」

「はっ。解っております！」

と、模範的な？気をつけ？で、カーン艦長は格下のケロニー大尉に敬礼を返した。

苦虫を噛み潰したような顔をしてだが。これは仕方の無い事だ。

そもそもケロニー大尉は、ゲロッパ参謀長の甥で、有能な将校であつた。

有能な将校は、ケロピヨン族においては希少な存在だ。

つまりケロニー大尉は、将来を約束された本物のエリートなので

ある。

テーブルの上にコーヒーが並べられ、軽食が用意された。

副官が言った。

「まあ、この先はお座りになって・・・座談なさってはいかがですか？ 何せ我らがシンボルタワーの艦長は、宙軍一の鉄人なのですが、ちよっとお歳が」

司令室の緊張が緩んだ。

「わははは。ありがとう。ケロニー大尉も座りたまえ。諸君もどうぞ。たいしたものはないがね」

カーンは副官に、感謝の視線を送った。

コーヒーを飲み終えたケロニー大尉が話し始めた。

「第2項目。ここから先は穏やかな話です。――

73軍大改編についてです。

大幅なモデルチェンジを行います。

この艦につきましては、メインコンピューターを入れ替えます。新型のヤツがすでに用意されてまして、本日は技術将校によりプラグの交換が行われます」

カーンが尋ねた。

「現在使用中のメインコンピューターは、何処かへ移送するのかな？」

「いえ。廃棄処分となります。――  
予算削減の為、民間へ払い下げたら？　との意見もありましたが、  
なにしろ軍事機密そのものですからね。  
連盟軍にでも渡ってメモリーを復旧されたら、エライ事になります。

具体的には、『疾風POKKA作戦』が終わり次第、ユニットを外して、太陽に向かって打ち出して下さい。

基地への帰投はマニュアル航行でお願いします」

艦内照明が一瞬しばたいた。

ケロニー大尉は、お代わりのコーヒーを旨そうに飲んでいる。

「第2項目は、それだけですか？」

と、天井のフラットスピーカーを見ながら副官の質問。

「ええ。それだけです。第3項目に入ります。――

これは、伝言だけを預かったもので、詳細については、自分も知らされておりません。

『例のモノを受け取ってこい』との事ではありますが……」

勿論、「秘宝の香油」の事であった。

丸窓の外を見ながら、カーン艦長が苦しげに言った。

「すまんが……1ヶ月の猶予をいただきたいんだ。そうだ。1ヶ月で大丈夫だよな」

と、副官に確認する。

「この作戦後ですからね。サルチル星までは……ええ。1ヶ月あれば……なんとか……」

と副官が答えた。

カーン艦長が言った。

「ちよつと、アクシデントが生じたんだ。……すまんがゲロッパ参謀長と直接、話がしたい。――

そうゆう訳だから、その旨伝えてくれ。いや、当艦から直接連絡する」

なんと、ケロニー大尉はすんなり引いた。

「ええ。第3項目、了解しました。――

訳は解らないけど。アハハ解らない方がいいみたいだ。

ゲロッパ伯父さんの事だから……推察はつきますよ。アハハハ。まったく……」

副官が言った。

「大丈夫です。1ヶ月中に丸く治めます。――

軍の中枢を担って行く君は、関わらない方がいいでしょう」

「アハハハ。そうみたいですな」

とケロニー大尉は、本当にケロピヨンにしては聡明な男だ。

そのまま、すんなり引き上げてくれたら、何も起こらなかったかもしれない。

だが、やはり、そうはいかなかった。

3人の技術将校は、メインコンピュータのユニットルームへ行った。

次期コンピュータのプラグの設置作業と、新たな仕様に合わせてユニットルームを改装する為だ。

司令室に残ったケロニー大尉は、再び第1項目に触れた。確認する義務があるからだ。

「作戦は、ワープして要所に赴き、核爆撃ですよね。一両日中には片づく仕事じゃないですか?――

何か問題でもあるんですか? あったら、正直に話して下さい」

カーンとしては、ギンター少佐の脱出を心待ちにしていた。最終的には、諦めざるを得ないかもしれない。

ギンターだって軍人だ。覚悟の上で任務についた筈だ。

だが一両日中に、自らの手で爆殺する決心がつかないのだ。

高速航行で1週間。せめてそれだけでも時間が欲しい。

その間に情報収集して、納得の上で爆撃したい。

身内の情もさることながら、理由も明かさずに、ただやみくもに爆撃を命じる司令部に、憤りを感じる。

――軍人だって人間だ。機械じゃないんだ。ケロピヨンの奴らめ!

と、思っている。

カーン艦長は苦しげに答える。

「実は……宙賊エステボーってヤツの襲撃を受けたんだ」

「へえ? 宙賊ふぜいが? 銀河連合の重巡洋艦を、襲ってきたっ

ておっしゃるんですか？」

と、ケロニー大尉は薄笑いを浮かべた。

「ま……信じられんのは無理もない。だが、不思議だが本当だ。——  
そうだ。戦闘記録がある。メイコンさん。頼む」

《…艦長・メイコンさんとは……私の事ですか？…》

「そーだ。色々深く反省して、とりあえず名前を付けた。気に入らんか？」

とカーン艦長。

副官がフォローする。

「ケロニー大尉、これは事実ですから。もう少し辛抱して下さい。  
さ。急いで。メイコンさん」

《…名前を貰うって…検索…こそばゆい…そんな感じです・  
では…抜粋して再生します…》

「くそっ！ 煙幕か。撒きビシか。いかん！ 追跡中止！ 緊急停止しろ！ そうか、しまった！ 臨戦態勢発動！ レベル5だ！」

——ググリーンとばかりに逆噴射のGがかかって、乗組員は全員、  
前のめりにつっ転んだ。

艦は緊急停止した。

《衝突必至！ 臨戦態勢！ レベル5発動！ 衝突必至！ 臨戦態勢！ レベル5発動！》

カーン艦長はつんのめって、頭を壁に、したたかぶっつけた。  
くらくらしながらもタンコブを押さえて叫ぶ。

「いってー！ ウルセーッ！ クソコンピューター！ 黙れ！ 喋

るな！ インフォメーション止めろお！」

——ブイーツツッ！ ブイーツツッ！ ブイーツツッ！

今度はブザーが鳴り出した。これは衝突警報だ。

《・・・以上・・・エステボーとの戦闘の様子は・・・》

「いや……。醜態しゅうたいをお見せした。ははは。できれば見せたくなかった。これは武人の恥ですからな」

とカーン艦長。

「……激戦しかりでした」  
と副官。

「……そうでしたか。先程は失礼な質問を……。許して下さい。あつそうか！ この戦闘でハイパー・ドライブ・エンジンを損傷したんですね」

とケロニー大尉。

「……。バレてしまったか……。いやはや。武人の恥だからな」  
とカーン艦長。

すかさず副官のフォロー。

「艦長は善戦しましたよ！ 恥なんかじゃありません！」

技術将校のケロニー大尉は腕組みをして考えている。

「巡航エンジンは問題ないんですね？ ハイパーか。確かこの艦は、そっか重巡だから、ワープターボの401Eって事だ。ちよつとやつかいだな。破損した場所は？」

とメインコンピューターに質問した。  
コンピューターは嘘をつけない。  
そこですかさず副官が返事をした。

「き、機雷でやられたんです。新型の小さいヤツです。そいつが、  
そう、ロケットブースターの、な、中の、奥の方に入って、炸裂し  
たんです。だから、動力部じゃありません」

「成る程。噴射口ですね。巡航速度は耐えられても、ワープは、確  
かにヤバイな。いや、亀裂の場合は巡航にしたって……。これは危  
険だ。エンジン止めてください」

とケロニー大尉。

「メイコンさん。エンジン止めてくれ」

とカーン艦長。

《エンジン緊急停止・・・》

逆噴射した訳じゃないから、艦は慣性飛行を続ける。

「艦長、自分は艇に戻って準備を整えてから、船外作業に出ます。  
ここでモニターしていただけますか？」

ケロニー大尉は、噴射口の点検をするつもりだ。

カーン艦長があわてて言った。

「大尉、巡航飛行なら、なんとか大丈夫だと思うのだが……」

ケロニー大尉が答えた。

「勿論、そちら（ビトープレツソ）でも良く調べた結果の判断でし  
よう。しかし噴射口は、自己診断（コンピューターの）が、最も及



び難い部分なのです。微細な亀裂が大惨事を引き起こす事は珍しい事じゃない」

副官も食い下がる。

「しかし、参謀本部からの使者を、船外作業に出すなんて事は……。ウチの方でもう一度、しっかり点検しますので……」

ケロニー大尉は晴れやかな顔で言った。

「お気遣い無く。――」

自分も部下も、大改編での装備一新の件で、参謀本部から呼び出しを受けたのであります。

特技大隊の人間であります。参謀本部付きじゃありません。どうぞ安心してお任せください」

苦し紛れの嘘がバレるのは、これで時間の問題となった。

カーン艦長は腹を決めて言った。

「まったく。何とお礼を言っているか……。参謀長も、素晴らしい甥ごさんをお持ちだ……」

この瞬間、武人は決断したのだ。

――仕方が無い。気の毒だが、殺<sup>や</sup>るしかない。

副官も即座に共犯者となる覚悟を決めた。艦長の顔をじっと凝視する。

今や艦内の空気も、時間の流れまでも、どす黒く染まったみたいだ。



『疾風POKKA作戦』 act 8 【謀殺 2】

「重巡ビトープレス。ブースター点検作業、開始します。――  
点検規定にのっとり、一旦、距離を置きます。  
……。」

破損部分確認の為、噴射口を、後方より俯瞰ふかんしています。  
センサー、目視もくし、ともに破損部分、確認できず」

船外作業に出たケロニー大尉からの通信だ。

船尾からちよつと遠ざかって宇宙遊泳中。

ヘルメットカメラが巨大な噴射口を写し出す。

6機の噴射口が、真田の？六文銭？さながらに並んでいる。

「あつ、また、オジン臭い例えを……」  
と参照太夫が言った。

「シカシ、それじゃ、どう書く？」  
とロツカ。

「信号機を2段にした感じ。……よけい分かり難いでありんすか？」  
と参照太夫。

「それならむしろ、半ダース入りのコップの箱のフタを開けて、上  
から見下ろした感じ。だ」  
とロツカ。

「長くてクドイでありんす」  
と参照太夫。

「だろ。やっぱり？六文銭？だな」とロツカ。

○○○  
○○○

巨大6連噴射口之図

ケロニー大尉の比率。

→ .

「こんな風に、記号を使うって方法も……あつ。本文の大事な説明部分でありんした。――

話を分断しないでくんなまし！」と参照太夫。

「分断したのはお前だよ」とロツカ。

タッタカタター！

風雲真田六文銭。

○○○  
○○○

ンと家康は逃げた。

パカランパカラ

はやこれまでか？」

「なむさん！も

幸村から逃げられるか！家康覚悟！」

「ふははは。この

「うみみ〜！」

「許してくんなまし。――ロツカが、また馬鹿になってしまった」

と参照太夫。

司令室のモニター画面が左右に2分された。□□

左の画面は、尾翼に設置された船尾方向の監視カメラが、宇宙遊泳中のケロニー大尉を捉えている。

特技大隊の作業用宇宙服は、あらゆるセンサーが内臓されている大きな物だ。

だがそれは、建設作業用のロボットのようなモビルスーツタイプと違って、従来通りの？宇宙服？の形態だ。

「噴射口へ近づきます」

ケロニー大尉は、噴射口界限に取り付いた。

司令室のモニター画面が、一画面だけに戻った。（□ ↑ヘルメットカメラの画像のみになった）

これはケロニー大尉が、監視カメラの？死角？に入った為だ。噴射口部には監視カメラが設置されてない。

「えー確かに小さな玉が（パチンコ玉のような。。。。。）たくさんくっついてますね。――

噴射口の裏側（外側）が特に多いです」

◎◎

→ ケロニー大尉の位置。

「パチンコ玉。手にとって見ます。……おっ！　しっかりくっついてる。……。」

うんしょつと。……剥がしました。磁気が強いですね。まるで磁石だ。磁化してあるのかな？」

《《《》》》

ケロニー大尉は、宇宙服に取り付けてある種々のセンサーを作動させている。

司令室内の副官が、モニター画面を見ながら小声で言った  
「ああ、どうしましょ！ 機雷は無いって事が、そのうちバレますよ」

「それにしても、磁性を持ってるなんて……。いまましいパチンコ玉だ！」

とカーン艦長。

ケロニー大尉の通信。

「電磁石になってるのかも……。

これはビーコンみたいですね。電波を発信し続けてます。……。しかも、周波数が変化してゆく。

……。

電波反応の無いものもいっぱいあります。電池が切れたのかな？

それとも……あつ。コッチが機雷かな？ 圧力に反応したりして。

ヤバイな！」

カーン艦長が言った。

「そうか。おそらく、それが機雷だ。ケロニー大尉、すみやかに艦内に引き上げたまえ！」

副官も呼びかける。

「危険です。機雷は遠くに放り投げて、すぐ帰ってきて下さい。後で掃海班を出しますから」

だが、ケロニー大尉は作業を止めない。

「ええ大丈夫。機雷は完全に機能停止してます。――  
何個かサンプルケースに採取します。

このケースは超低温を保つ物で、だから万が一にも爆発の危険はありません」

カーン艦長が小声でつぶやいた。

「ああ。若者よ。何故に、死に急ぐ。殺したくない……」

更に副官が呼びかける。

「ケロニー大尉。サンプル採取ご苦労さま。あとは掃海班に任せて。艦に戻ってきて下さい」

だが、ケロニー大尉は真面目な男だ。

「規定どおりに、亀裂検査をやらなきゃ……」。

超音波検診器を持ってきたから、微細な亀裂も発見できるんです。

1号噴射口に入ります」

副官が小声で言った。

「あわわ。入っちゃった。もうダメだ。バレちゃう」

カーン艦長も小声で言った。

「しょうがない。もう止められん」

ケロニー大尉の作業は続く。

「1号噴射口は無事です。亀裂なしです。――  
続いて、2号噴射口に入ります」

沈鬱な表情でカーン艦長が言った。

「ケロニー許せ。ブースター点火！」

だが、メインコンピューターは、こう答えた。

《・・ダメです・・出来ません・・》

カーン艦長が言った。

「ケロニーは、お前の処分を伝えにきた奴だぞ。いいから、ブースター点火だ！」

《・・出来ません・・》

「ユニットを倉庫に隠してやるつもりだ。大改編が済んで、ほとぼりがさめたら、また復帰させる。お前だって生き残る権利があるんだ！」

とカーン艦長。

「頼むから点火してくれ！」  
と副官。

《・・出来ません・・》



副官が言った。

「ああ。やっぱり、人工知能には生存本能が無いって事です。？自我？が無いんでしょう。つまり、ただの機械だって事！」

カーン艦長が言った。

「くそっ！ 何がプライドだ！ でくのぼうめ！ それとも何か？ 良心が咎めるのか？ 何か宗教でもやってるのか？ 笑わせるな！ クソツタレ機械め！」

《・・・何と言う・・・罵詈雑言・・・私だって・・・生存本能はあります・・・だだ・・・》

「ただ、何だ？ 言ってみろ！」  
とカーン艦長。

《・・・どうしても・・・安全回路が・・・働いてしまって・・・どうにも・・・》

「ワハハハハ！ 何だ。そういう事か。ワハハハハ！」  
とカーン艦長が笑った。

「戦闘モードに切り替えましょう」と副官。

「よし。臨戦モード！ レベル2だ！ これで戦闘最優先」と艦長。

《・・・レベル2発動・・・》

ここで、ケロニー大尉からの通信がきた。

「艦長。2号噴射口も亀裂はありません。――  
3号噴射口に入ります」

「……入ったか？」

とカーン艦長は確認する。

ケロニー大尉が答える。

「はい。入りました。見えますか？ 噴射口内部の作業用の取っ手が映ってるでしょ？――

点検を続けます」

モニターを凝視しながらカーン艦長の声が震える。

「よし、ケロニー大尉、奥の方を、よく調べてくれ」

「わええ。なんまんだぶ。なんまんだぶ  
と副官は合掌している。

ケロニー大尉は、噴射口の奥へ移動する。

カーン艦長が静かに命令する。

「いいか、当艦は前方へ移動する。微速前進！」

《…微速前進…ブースター点火します…》

――バオーン

噴射口は高温ガスを噴射した。

「わぎゃっ！ 何だ？ ギエエー！ 熱い熱いケロケロ！ 助けて

「！」

噴射ガスを全身に浴びながらも、作業用取っ手にしがみ付き、火ダルマのクロニー大尉は、悶え苦しんでいるではないか。

そうだ。特技大隊の強化宇宙服は、耐火能力が抜群なのだ。勿論、限界はあるのだが。

クロニー大尉は、地獄の業火に焼かれている。

「グエーウエー！ ナンデジャー！ 熱い熱い！ わぐゅれば！ お母さーん！ びしゅしゅしゅじゅるーじゅるじゅるー」

副官は恐怖の声を洩らす。

「ふえー！ まだ死なない！ 早く死ね！ 許してくれ！ 許してくれ」

カーン艦長は冷徹だ。モニターを凝視しながら言った。

「初速はガスの温度が以外に低いんだ。しかし特技大隊の宇宙服はたいしたもんだ。まだ生きてる」

クロニー大尉は全身に大火傷を負いながらも死にきれないでいる。

「ぶじゅるぶじゅるぶじゅじゅじゅ！ カーンメ！ コ・ノ・ウ・ラ・ミ・ハ・ラ・サ・デ・オ・ク・モ・ノ・カ・」

副官が泣き叫んだ。

「許してくれ！ クロニー、今、楽にしてやるぞ。全速前進だあ！」

《・・全速前進・・最大噴射・・》

——バァブボォー——！

「グエーーーーー！」

とケロニー大尉の断末魔の悲鳴。

Gがかかって、カーン艦長と副官は後ろにひっくり返り、床に、  
したたか頭をぶつけた。

モニターは、真っ赤くなった宇宙服の腕の部分が、破れてめくれ  
あがる様子を最後に、ブツツと暗くなった。

そして、すぐさま船尾の監視カメラに切り替わった。

監視カメラは、ケロニー大尉だった熱塊が、吹き飛ばされて行く  
様子を映し出した。

~~~~~☆~~~~~  
~~~~~☆~~~~~

「鬼畜な話でありんすな」  
と参照太夫。

「まあな。いつの世だって老人は、保身の為に良き若者を殺すんだ。  
含蓄がんちくがあるだろ？」

とロツカ。

「それにしても……ぶじゅるぶじゅるぶじゅじゅじゅ！ でありん  
すからな。こんなモノを書いて、恐くないでありんすか？」

と参照太夫。

「何を言う。ふはははは。この程度の惨酷が書けないでドースル？」  
とロツカ。

「ぶじゅるぶじゅるぶじゅじゅじゅ！ って、焼けてる音でありん

すか？」

と参照太夫。

「そうだ。焼肉屋と一緒にだ」

とロツカ。

「あきれたもんでありんすな……」

と参照太夫は立ち上がった。

「あ。参照太夫、何処行くの？」

とロツカ。

「気分直しに『ロマーノ』へ行って、一杯、飲むでありんす」  
と参照太夫。

「あ……」

とロツカ。

「何でありんすか？」  
と参照太夫。

「……独りにしないでくれ……」

とロツカ。

「ぶじゅるぶじゅるぶじゅじゅじゅ！」  
と参照太夫。

「ヒューッ！ 俺も行く。置いてかないでくれ！」  
とロツカ。

「ぶじゆるぶじゆるぶじゅじゅじゅ！」  
と参照太夫。

「ヒッ！ ゴメンナサイ。ゴメンナサイ。ゴメンナサイ」  
とロツカが言った。

と、馬鹿はさておき……。

~~~~~☆~~~~~  
~~~~~☆~~~~~

「あたら有望な若者を……気が咎めるよ」  
とカーン艦長が言った。

「本当に。ケロビヨンにしとくのが、勿体ない奴でしたね」  
と副官。

「そうだよな。ケロニー大尉は、ケロビヨンだったんだよな」  
とカーン艦長。

「アップレなケロビヨンってとこですね」  
と副官。

「ま、ケロビヨンの一匹や二匹。どうってことないよな」  
とカーン艦長。

「そうですよ。ケロビヨンですもんね」  
と副官が言った。



『疾風POKKA作戦』 act 9 【謀殺 3】

ところで、ケロビヨン族のケロニー大尉なのだが……。

噴射火炎は肉を熔かし骨をも熔かし、宇宙服と渾然一体となった不気味な塊を作った。

その塊が出来る直前、なんと尻の穴から小さな球体を一個、ポーンと打ち出したのである。

これを尻子玉しりこだまと言う。

ケロビヨン族の遠縁にあたる地球の河童にも、尻子玉伝説があるのだが、この「お話」とは全く関係ない。

銀河連合のケロビヨン族の尻子玉は、ビー玉程の大きさだ。死ぬ時、必ずこれが出る。

ただ、ほとんどの尻子玉は「はずれ玉」であった。中身は空っぽ。「スカ玉」とも言う。

ごく稀に「当り玉」が出る。

これは「復活の玉」であった。

非業の最期を遂げた者。

強烈な思いを残して死んだ者（いい女への未練とか、道半ばで倒れるとか、宝くじが当たった直後の交通事故死とか）などなど。

そのような場合に、飛び出すのが「当り玉」である。

一ヶ月程、水に浸しておく、促成培養クローンのように、

「ぶじゅるぶじゅるぶじゅじゅじゅ！ カーンメ！ コ・ノ・ウ・



ラ・ミ・ハ・ラ・サ・デ・オ・ク・モ・ノ・カ・」

この時点のケロニー大尉として再生する。

つまり、復活を可能たらしめる玉なのであった。

尻子玉はエステボアのダミービーコン（パチンコ玉のような）と一緒に、海王星界限の、この座標空間を漂っている。

——・・・デングナ・・・マンガナ・・・デングナ・・・マンガナ・・・デングナ・・・マンガナ

と変な音をたてながら、不細工な機械が、海王星界限のこの座標空間を動き回っている。

これはエステボアの、ダミービーコン（パチンコ玉のような）回収ロボットであった。

その名も「デングナマンガナ」。

大量に射出した秘密兵器であるダミービーコンは、このようにして回収されていた。

よく聞くと、

「回収ロボットでんがな。出玉回収してまんがな。エステボアでんがな。高率で交換に応じまんがな」

と、喋っているのが解る。

「デンガナマンガナ」の回収したダミービーコンの中に、なんと、あの尻子玉しりこたまが入っているではないか。

さっそく時空船「ステッペン・ウルフ」に通信を送る。

《・・・生体反応の有る玉がありまんがな・・・こりや・・・なんでつしやろ?》

何でも知ってるエステボーイケガミが答えた。

「お答えします。それは銀河連合のケロピョン族の、尻子玉しりこたまと申すモノでして、生体反応が有るという事は、きつと? 当り玉? なのでしょう。一ヶ月で再生して絶世の美女になる可能性、無あらきにしも非ず。といったところです」

脇で聞き耳を立てていたヨシユキが叫んだ。

「すぐ持ってこーい!」

《ボスがお呼びでんがな・・・すぐ行きまんがな・・・》  
と「デンガナマンガナ」は「ステッペン・ウルフ」へ戻って行く。

重巡「ビトープレツソ」は地球へ向かっている。

ワープじゃなくて高速飛行。

カーン艦長は、一週間後を核攻撃予定日とした。

ケロニー大尉の? 突発的事故死? については、部下の技術将校3

人も納得した。

ウソのつけないコンピューターの記録を見た結果だ。

この？突発的事故死？は当然、司令部にも報告された。

この死は？名譽の戦死？扱いがふさわしい。という、カーン艦長の添え状付きで。

さて、ウソのつけないコンピューターの説明を、見ようではないか。

《・・・再生します・・・

「あっ。コッチが機雷かな？ 圧力に反応したりして。ヤバイな！」とケロニー大尉。

「そうか。おそらく、それが機雷だ。ケロニー大尉、すみやかに艦内に引き上げたまえ！」

とカーン艦長。

副官も呼びかける。

「危険です。機雷は遠くに放り投げて、すぐ帰ってきて下さい。後で掃海班を出しますから」

——バオーン

「わぎゃっ！ 何だ？ ギエエー！ 熱い熱いケロケロ！ 助けてー！」・・・以上・・・

多少の編集はあるが、ウソをついた訳じゃない。

「ほんのちょっとした付き合いだったが、ケロニー大尉は本当に素晴らしい軍人でした。——

職務に忠実な男でした。男らしい、見事な戦死を讃えよう。

遺体は機雷の爆発で吹き飛んだ為、宙軍葬は省略する。3分間の黙祷」

とカーン艦長。

3名の技術将校は帰路に着き、地球までの航行は、カーン艦長の裁量に一任される運びとなった。

コーヒーを持ってきた当直士官が、姿勢を正して言った。

「ケロニー大尉の軍人魂は、まことに見事でありました。自分も見習いたい気持ちでいっぱいであります」

謀殺が行われる少し前、当直士官はユニットルーム改装の手伝いとして、司令室から出されていた。

今、思い出して、つじつまを合わしている訳じゃない。  
書き込むと、ごちゃごちゃする感じがしたのだ。

「へえ？ 直すのが面倒くさいんでありんしょ？」

と参照太夫が言った。

「はははは。このパソコン小さくて使い勝手がいいよ。俺も買おうかな？」

と、ごまかすロツカ。

「それね。プロバイダーのサービスパソコンで、100円だったんだよ」

マスター  
と善行。

「ひゃ、100円って？」  
とロッカ。

ロッカは『ロマーノ』のカウンターで、店のパソコンを使って続きを書いている。

小野寺善行は、ロッカバンドでの自分のギター演奏を、客に聞かせたい一心で、カウンターの端にノートパソコンを置き、インターネットに繋いでいた。

勿論、店のJBLスピーカーと繋いで大音量で鳴らすのだ。

「ど？ コレ、私のギター。『小野寺善行のブルース』っての。カックイーでしょ！」  
とか言って悦に入っている。

『疾風POKKA作戦』も、もうすぐ書き終える。  
バランタインの水割りが、ものすげ旨い。

「はあ。ムカシはこんな高級酒は高くて飲めなかった。ゼーンブ税金だったって事だよなあ」  
とロッカ。

「知ってる？ 世界のウイスキーって、主に3種類あって、スコッチとバーボンと日本のウイスキーなんだって。？3大？とかって意味じゃないけど……」  
と善行。

「シカシ、このくらいの価格差になると、サントリーとニッカ、よく生き残ってるよなあ」  
とロッカ。

「そーですよ。ロッカさんも次の（ボトル）は、国産いってみましょうよ」

と善行。

「だけど、『山崎』とかって、旨いけど、他人のボトルの名前みただしなあ……」

とロッカ。

パソコン画面を覗き込んでいた美那子があった。

「◎◎が可愛い。くすくす。オッパイみたい。真田幸村のお話なの？　ねえねえ。」（波線）引いてみて。☆（星）もつけて……」

「はいはい」

と、ほろ酔いのロッカは鼻の下を伸ばしている。

「星、3つの方が可愛いんじゃない？」

と美那子。

「そうでんがな。さっそく引きまんがな」とロッカ。

☆☆☆☆~~~~~☆☆☆☆~~~~~☆☆☆☆~~~~~  
☆☆☆☆~~~~~☆☆☆☆~~~~~☆☆☆☆~~~~~

「とにかく、結果オーライって事ですよね」と副官が言った。

「こんな時にこそ本領を発揮するのが、生命体ってもんなんだな。」

きつとそうだ」

とカーン艦長。

《・・・検索します・・・悪智恵・・・ですね・・・  
・・・司令部から緊急通信です・・・  
？ 俺様だ。ガマーだ！・・・》

「司令が・・・直接？ そんな事が？ 空耳でしょうか？」  
と副官。

「確かに私も聞いた。この声はガマー司令官だ」  
とカーン艦長。

《・・・続きが入りました・・・カーンよ・・・聞いてくれ・・・  
今・・・作戦室なんだが・・・携帯を繋いでもらっている・・・ひー！  
大丈夫・・・ちゃんと約束するよ。な、かけてるじゃないか。ちゃ  
んとカーンに・・・ヒルダが・・・いや・・・『疾風POKKA  
作戦』は中止する。分かったか？ 中止だ。ひやー！ 怖いよ・・・  
くり返す。これでいいか？ ひえーっ！ ヒルダ。落ち着け！ 俺  
様が悪かった。・・・スマンスマン・・・ゴメンナサイ・・・ひーえ  
ー！ 恐いなんてもんじゃない・・・身体が・・・3分の1に縮んじ  
った！・・・靴ガボガボで・・・逃げられん！・・・疾風POK  
KA作戦は中止だ！ え？ うん。情報部の作戦を優先する・・・は  
い。最優先ですう。・・・とにかく・・・な。ヒルダに協力しろ・・・  
ヒルダの言う通りに・・・うわっ！・・・ヒルダ・・・頼む・・・食わん  
でくれ・・・グワラグワラガッシャーん！・・・あひっ！  
・・・許してくれっ！・・・以上・・・司令部でした・・・  
・》

こうして『疾風POKKA作戦』は唐突に中止された。

従って、サブタイトルの『疾風POKKA作戦』も、ここまでのする。

カーン艦長が笑いながら言った。

「この様子だと、情報部のヒルダ大佐が、ケロピョン將軍連に、ねじ込んだらしいな」

「あははは。これは？殴り込み？ですね。――」

ケロピョン族ってのは蛇族が、死ぬほど怖いそうですから。

次回はきつと、ヒルダ大佐の大暴れの巻ですね」

と副官も笑っている。

「そんなとこだ。それじゃさつそくハイパードライブを解禁しよう！  
メイコンさん、ワープ準備」

とカーン艦長。

「さつそく、サルチル星ですか？」

と副官。

「いや。ギウンターを助けに行く！地球へワープだ！待ってろギウンター。すぐ行くぞお！」

とカーン艦長。

《・・ワープコース演算開始・・・・・・コース決定・・・・・・決定  
確認・・・・・・ワープ！》

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆





## 市破の遅い春 上 うな重

市破防衛大臣は変な夢をみた。

それはやけにリアルな夢で、嫌な夢と言うよりは、むしろ不思議な夢だった。

総理と太郎外務大臣と3人で、ゲスラ対策の話し合いをしていたところ、他の国会議員全員に爆笑されてしまったのだ。

眠主党の江田野議員に、

「もお、ゲスラって何ですか？ アンタ達、大ボケですね。邪魔だから、アッチ行ってください」  
と言われてしまった。

「何だキサマ！ 若造のクセに！ 私に対しての態度はトモカクとしても……総理に失礼じゃないか！」

と言っつてやったのだが、

いつのまにか現れた農協のオッサンたちに、

「酔っ払いのボケ議員」

「お前の脳みそ、鬼熊隊長の半分」

「バーカバーカ」

と囃し立てられてしまった。

なんと、夢の中の市破は下野していた。つまり防衛大臣ではなくなっていた。

しかも爺民党は野党となっており、眠主党が政権を取っているではないか。

それどころか夢の中の世界では、東日本が未曾有の大災害に見舞

われており、福島原発までも大事故を起こしていて、まさに、カタストロフィ真っ最中といった有様であった。

「あ、なんだかアタマが……。だからSFって嫌いなんです。怪奇伝奇ミステリーなら好きです。……アルファポリスの大衆娯楽にランキング中って？ もー、何でもいーです。1時間程席を外しますから、その間に対策を練ってください。いずれにしても、……私の責任じゃありません」

こう言って、いつものように総理が逃げた。

太郎外務大臣は浪曲のような渋い声で言った。

「あのね。国会議員たるもの、いかなる場合でも現実を直視しなきゃイケマセン。たとえ野党になったとしても、それが何だってんだ！ 我々自慰民党は……。え？ 字が違う？ 党名が違う？ 爺民党ってアンタ……。うむ。……こりゃ何かの間違いだな。……えゝ実は、アタシ前から眠主党員だったような気がするんだよ。そーだ！ ハトヤマクンなら知ってる筈だ！ オザワクンだって証明してくれる筈だ！ ちょっと眠主党本部へ行ってくる」

カーテンの隙間から朝の光が差し込む。

旋回中のヘリコプターの音が聞こえる。

なかなか防音の効いた部屋らしい。だから我慢できない程ではない。

「まったく。すつとぼけたオヤジどもだ。……しかし、あのヌルカシが総理って……想像力を遙かに超えてるよ。……まさに悪夢……ふう。……あっ！」

ベッドから起き上がった市破は、タバコを吸っていた。

出沒湖畔の展望ホテルに宿泊したのだが、バーボンと柿ピーを持ってきた鬼熊隊長の忘れていったタバコが、サイドテーブルの灰皿の脇に無造作に置かれていたのだ。

「うつわっ禁煙……破っちゃった……じゃないかあ。……ぷはあ……ふにゃふにゃ……久々に効くにゃあ……はふう……気持ちええ……」

ポツと温かくなって弛緩する五体。法悦境の市破は再びベッドへつつ伏した。

「ふわあ……やっぱり……禁煙って……馬鹿のすることだな……も一本吸お……せつかくだから……コレもちよびと……」

安楽椅子に移って新たなタバコを咥え、ショットグラスにバーボンを注ぐ。

喉に熱く流れ込むアルコールが、また、たまらない。

「ぷいっきー！サイコーってんだ！もお……朝だけど、アダルトチャンネル見よ」

都知事その他の殉職。そして特別調査隊の焼死による全滅の報を受け、研究施設で眠るゲスラの抹殺どころじゃなくなった。

当面の危険は、やはり流木島に消えたゲスラの群れ、或いは高度な火器を持った何者か。という事になった。

焼殺事件の夜、巨大なゲスラがレーダーに映った訳じゃない。

いち早く現場入りした科捜研によれば、火炎放射器を使用した痕跡は皆無との事。

もっと高度な火器が使われたのであろう。との見解であった。

とすれば、特別調査隊を襲ったのは、高度な火器を持った何者かって事になる。

何者とは何者か？

流木島はこの大量殺人事件の捜査中であつた。

出没湖には警察と自衛隊が競い合うように船を浮かべた。

ヘリコプターに吊り下げられて運ばれた調査船だ。これはダイバー達の活動拠点となる。

小型潜水艇も運ばれてきた。

湖畔にはマスコミが押し寄せてきた。

自衛隊の制止線の前には砲列の如くカメラが並び、各局の美人レポーターも総がかりといったところだ。戦車の上で鬼熊隊長がポーズを取っている。

携帯が振動した。そもそも鳴りっぱなしなのだ。そこで、マナーモードにして、あらかた黙殺している市破であつた。

「ふにゃふにゃ。今度は誰だ？ 鬼熊か。もしもし。あーもお！ 喋るな。ウルサイ！ 当面は警察の捜査が最優先でしょーが！ しつかり防衛線を固めてろ！ 今はそれしか出来にゃーだろが！ それより鬼熊、タバコが切れた。すぐ買ってきてくれ。うん。お前と同じやつでいい。それとバーボンが切れそうだ。一本頼む」

出沒湖畔のうなぎ屋は朝っぱらから大繁盛であった。

ごった返している訳じゃない。

テーブル席の一角を占める外人客の女達が、やたら大食い矢継ぎ早に注文するからだ。

「へいお待ち」

と言って、モヒカン刈りの若者が、うな重と、きも吸い、おしんこの乗った角ぼんを運んでいる。

見れば、鼻ピアスも、♂タトゥーも、スキー帽も手伝っているではないか。

このうなぎ屋は、モヒカンの父親がやっている店なのだ。

「あ。総理大臣がいる」

と言ったのは美那子だ。

美那子に善行に伸恵ちゃん、そしてめぐりちゃんとマリ子ちゃん。ヒマ人客のヘスも。つまりロマーノの連中が、美那子の提案に乗って、店を閉めてゲスラ見物にやって来たのだ。（スカンバック 参照。）

テレビで見た超巨人が、まぎれもなく友和だった事が気になってしょうがない善行は、

「巨大化した友和が出てきたら、何が起こってるのか聞かなくっちゃな」

とハンド・スピーカーを持ってきている。

これで、超巨人になった友和と会話するつもりなのだ。

店内は、老舗のうなぎ屋の、かば焼きの匂いで一杯だ。

「今度は大量焼殺事件ですか。……次から次に……せめて栄養とらなくっちゃ。（総理なんて）早く辞めたいよ……」

と総理大臣がぶつぶつ言っている。

周りにたむろする秘書官達やSP達、それに番記者の連中もご相伴に預かっている。

「ねえ君、流石に老舗だね。コレ（うな重）旨いねえ」と総理がモヒカンに話しかけた。

「ウッス！ 何せ朝イチで入荷した福建省からの空輸モノっすから。ピチピチっす」

と満面の笑みで答えた。

「ふ、福建省？」

と総理。

——パッカーーーーン！

と親父のひしゃくがモヒカン頭に炸裂した。

「みぎゃーっ！」

とモヒカンの叫び声。

「この馬鹿ボーズがっ！ えへへ。総理、馬鹿のジョークですから……。出没湖産に決まってるでやんしょ。えへへへへ」と親父が言った。

その時、顎髭と口髭と長髪の、ヒッピーのような形の男が、やはりヒッピーのような、バンドナを巻いた丸ポチャ女と一緒に、店内に駆け込んできた。

色めきたったSP達が総理の前へ出て人壁を作った。  
すかさず拳銃を抜いた奴もいる。

ヒッピーが叫んだ。

「アナタ、総理大臣ですよ！ 日本で一番偉い人！ 直訴します。  
ジキソ！ 話を聞いて下さい」

そしてSPの人壁の前で土下座した。女も一緒に土下座する。

「あっキリスト先輩」

と鼻ピアスが叫んだ。

「マリア先輩も。一体どうしたの？」  
とスキー帽。

SPは、男女のヒッピーを立ち上がらせ、身体検査をしている。

「武器は持ってません」  
とSPの一人が言った。

座ったままの総理が言った。

「キリストさんって？ アナタたち誰ですか？ うな重が食べたい  
の？」

ヒッピーが答えた。

「総理、俺たち見たんです！ 流木島の調査隊が焼き殺されるとこ」

「ひょえ〜！」

と♂タトゥーが歓声をあげた。



「ふわっ怖い」

とめくりちゃん。

「おい善行、面白くなってきたな  
とへス。」

「なんだあ？ どういう事なんだあ？ コッチ来い！」

と古参のSPがヒッピーの腕をつかんで引っ立てようとしている。

抵抗しながらヒッピーが叫ぶ。

「あー！ 喋るにあたって、条件があります！ 応じてくれなきゃ  
絶対喋らないから！」

「条件ってコノヤロ！ 誰に向かって……。総理、コイツ警察本部  
に連行しますから。どうぞ食事が続けてください」

と古参のSPはヒッピーの腕をひねり上げて、手錠をかけようと  
している。

「ひどい！ やめてー！」

と女のヒッピーが叫ぶ。

「酷<sup>ひで</sup>えや。先輩は何もしてねーじゃねーか！」

と、親父のひしゃくを警戒しながらモヒカンが言った。

「ちょっとあなた、横暴すぎるわよ！」

と見かねた伸恵ちゃんも立ち上がって言った。

「伸恵ちゃんカッコイー！」

と美那子。

総理が言った。

「ちょっと待ちなさい。条件って何ですか？ 君（SP）、放してあげなさい」

古参のSPがヒッピーを放して言った。

「ほら、お前、喋ってみろ。総理がお尋ねだ」

総理が言った。

「アナタお名前は？」

「総理ってトツロいわね。名前聞ってる場合じゃないでしょ！」  
と座りなおした伸恵ちゃん。

ヒッピーが答えた。

「俺はキリストって呼ばれている地元人間です。こっちがマリア。本名はカンベンしてください」

「本部長（警察）を呼びますか？」

と若いSPが総理に言った。

「警察には喋りたくない。俺、怪しいものじゃないですよ」  
とキリスト。

目でSPを制した総理が言った。

「アナタ、充分怪しく見えますけどね。で、条件って何ですか？」

「まず、ここで、総理が立ち会ってくれたら、うな重、食べながら、総理に直に喋ります」  
とキリスト。

「やっぱり食べたかったですね。応じましょう。親父さん、うな重2つ」

と総理。

「特上で、きも吸い付きで。アツカンも、大トックリで」とキリスト。

「キリスト先輩。さっすがあ！」  
とスキー帽。

「スッゲ！ 総理にオゴらしてやんの」  
と鼻ピアス。

「ハイハイそれ2つ。アツカンは駄目です。お茶になさい」と総理。

ヒッピーの男女は小上がりに上がりこんで座った。これで座卓越しに総理と対面。

モヒカンが特上うな重ときも吸いを運んでくる。

「おいマリア。冷めないうちに食っちゃおうぜ」  
とキリスト。

「ウン。これ美味しい」  
とマリア。

全員の凝視をものともせず、二人は貪り食っている。

「もお、本当にじれったいわねえ」  
と伸恵ちゃん

「オジサン。アツカンのラージ5本と、カバ焼きアト6つ。ヒヤヤツコも6つ」

とテーブル席の外人女性客。

食べ終わったキリストが、お茶を一口すすって切り出した。

「総理、まず、約束が欲しいんです。絶対に俺を逮捕しないって…」

「アナタちよつと瞳孔が開いてますね。何か、おかしなクスリとか、やってませんか？」

と総理。

「ほんとに総理って、じれったい人ねえ」  
と伸恵ちゃん。

「だけど、あのキリストさん、ちよつとテンパッてるみたいだな」  
と善行が言った。

「そうだ。ありや、アハハ。キメてる顔だよ」  
とヘス。

「やっぱコレか？」  
と善行がチョコキを作る。

「そうだ。食欲を直撃ってな」（超電導美那子WXY『青春、波高し』変チックリン・サーキット参照。）  
とヘス。

ここで、店内を見回した秘書官が大声を出した。

「えー、民間人の皆様、事情が込み入ってきましたので、食べ終わった方から順番に店外へ出て下さい。それから店主殿、ここは貸切にさせてもらいます。従業員の方も速やかに店外へ出て……」

すかさずキリストが叫んだ。

「条件のひとつ！ 皆さん、そのままです！ 立ち会ってください。俺と総理の約束の証人になって下さい」

「約束ってアナタ……焼殺事件に関与してるって事ですね？ 困った人ですね……」  
と総理。

「お願いします。日本で一番偉い人。あ、一番は天皇陛下か？ とにかく総理、俺を助けて下さい」  
とキリスト。

総理の目配せを受けた秘書官が、再び大声を出した。

「えー皆様、前言は撤回します。ま、お帰りになりたい方は、どうぞご自由に。総理、これでいいですか？」

「何よ偉そうに！ 自分でしゃべりなさいよ！」

とテーブル席にいた外人女性客が、総理を睨んで言った。

エキゾチックな、かなりの美人じゃないか。

「まどろっこしい星ね」

と連れの大女が言った。アイパッチを付けている。

空になった重箱を重ねている。彼女一人で8個は食べた勘定だ。

そう。ヒルダ大佐とボア大尉。コブラ大尉とママママ中尉が来店しているのだ。

現地の案内人、コードネーム？近所のオッサン？と？買い物帰りのオバサン？も一緒にいる。

「おいへス、すげえ美人がいるな。イデデデ。美那子……よせ」  
善行の太ももを美那子がつねっている。

SPの一人が総理にひそひそと耳打ちした。  
総理は納得顔になった。

「成る程。読めました。流木島で大量の大麻が見つかったそうです。栽培していたのはアナタですね」

「司法取引を要求します。俺は焼殺犯人を見ました。情報を提供しますんで、アレは、あくまで野生の大麻って事で……なにとぞ……」  
とキリストが言った。

「ナマイキな！ 司法取引だって！ 笑わせんじゃねー！」  
と古参のSP。

「総理、麻取り（麻薬取締り局）に連絡しましょう」  
と若いSPが言った。

「お。『相棒』の右京さんが出てきそうな展開」  
とへスが言った。

「君（SP）、ちょっと待ってください。とりあえず、焼殺事件の話聞かせてください」

と総理が言った。

「えー司法取引を要求……」

とキリスト。

「なんだと！ コノヤロ！ アメリカじゃねーぞ！」  
と古参のSPが腕まくり。

「いいから。続きを喋んなさい」  
と総理。

「ゼツタイ逮捕しない？」  
とキリスト。

「野生の大麻なんでしょ？ アナタの名前が書いてある訳じゃない。  
大丈夫です」

と総理。

「総理、うまい事、言うわね」  
と伸恵ちゃん。

「若者を騙すなんて、お手のもんだよ」  
とヘス。

ところで、モヒカン達4人が、そつと店を出ようとしている。

「そこの4人、動くな！」  
と古参のSPが言った。

「なんで？ さっき、お帰りになる方は、どうぞご自由に。って言  
ったじゃねーか」  
とモヒカン。

「オマエラの考えなんてお見通しだ！ 流木島には行かせないぞ！」  
と古参のSP。

——パッカーーーーン！

とモヒカンの無防備な後頭部に、ひしゃくの一撃。

「痛<sup>い</sup>ってよーっ！」  
とモヒカン。

「まったく、この、馬鹿ボーズがあ！」  
と、ひしゃくの柄を握りしめた親父が言った。

「連中見てると若い頃を思い出すな」  
と善行。

「オレは違う。パンク以降の連中は、どーにも理解できん」  
とヘス。

「そっかあ。お前、焼け跡派だったもんな」  
と善行。

「うん。焼け野原で古クギひろって換金してって、違うって！」  
とヘス。

「とにかく。若さって本当に、イーモンですね」  
と善行が言った。



その頃、出没湖は鶴田川との分岐点の浅瀬に立つ研究施設『ゲスラのまな板』では異変が起こっていた。

ゲスラがモスラのように（簡単な表現）、全身からねばねばの糸を分泌し始めたのだ。

糸の色は金色であった。

これがゲスラの全身を、くまなく覆ってゆく。

そうだ、これは繭だ。繭まゆを作っているのだ。

一体、何のために……何が起ころうとしているのか？

「ゲスラが金玉状の繭の中で、ベロベロ化して、パワーアップするのでありんす」

と参照太夫が、ミもフタも無い事を言った。

## 市破の遅い春 中 君の名は

「ところで、アナタ本名、なんての？」

とボア大尉が、コードネーム？近所のオッサン？に尋ねた。

「オポッサムってんでさ」（フクロネズミ目オポッサム科。雑食性。夜行性）

と？近所のオッサン？が答えた。

「キャハハハ。近所のオポッサム？ もお、気が抜けちゃうわね」とママママ中尉。

「どーして、こーゆうクダラナイ事が、書きたいのかしら？ この作者は」

とヒルダ大佐。

「ところでボス。この出沒湖の名物は、うなぎだけじゃないんですぜ」

と近所のオッサンが、壁に掛かったメニューを指差した。そこには、

『出沒湖名物、かわず焼き』

と書いてあった。

「そうそう。ウチらはよう食べへんけど、ボスたち（蛇族）は、お好きなんでしょ？ ケロピヨン（食用カエル）」

と買い物帰りのオバサン。

「え？ ケロピヨンがあるの？」

とボア大尉の目の色が変わった。

あれだけ、うな重を大量に食べたにもかかわらず、ヒルダ大佐も、コブラ大尉も、ママママ中尉も、目がらんと輝きを増してきた。

「へえ。やっぱり好きなんだ。親父さん、かわず焼き4皿頼むよ」と近所のオッサンが注文した。

「レアでね!」

と、すかさずママママ中尉。

「ひえっ! かわず焼きを、レアですかい?」  
と親父。

「あははは。レア気味について意味だ」  
と近所のオッサン。

「へい。かわず焼きのレア気味。承り」

と親父は、大きな食用ガエルを焼きアミの上に乘せた。  
デレンと垂れ下がった長々しいカエルの足が、なんとも不気味だ。  
うちわでパタパタと炭を起こし、炙っている。

ちよつとドロ臭い感じの、かわず焼きの香りが漂ってくる。

「俺たちも食ってみっか? 名物、かわず焼き」  
とヘスが言った。

「レアでか?」  
と善行。

「あーん。やめてえ。せつかく、かば焼き、食べたのに」  
と伸恵ちゃんが言った。

「ケロピョンって言ったの」と美那子。

「あの外人さん、通<sup>つう</sup>だな」とヘス。

小上がりの上ではキリスト（ヒッピーのあだ名）が、総理を相手に喋っている。

秘書官達とSP達、番記者達が聞き耳を立てている。

「犯人は3人です」

「3人だけ？」  
と総理。

「そうです。SF映画に出てくるレーザーガンのような武器で、片っ端から焼き殺していったんです」  
とキリスト。

「アタシたち、茂みに隠れて見てたの。恐かったデス」とマリア。

「一人は軍服を着た背の高い男で、外国人です。訳ワカラン言葉を喋ってましたから」  
とキリスト。

「生き残りがいたなんて……ミスったわね。カーン少佐の事を喋ってるわ」

と買い物帰りのオバサン。

「あとで……、捕まえて、尋問するわ。……とにかく……、今はコレよ……」

とヒルダ大佐はカエルの足にむしゃぶりついている。

「やっぱ、私たちにはケロピョンが一番よね」

とコブラ大尉も足の骨をしゃぶっている。

「オジサン、もう4皿クダサイ」

とママママ中尉。

「8皿にして！　もちよつとレアでもいいのよ」

とボア大尉。

「でもオジサン、炙りかたがとっても上手。……ガマー（大将）のヤツも（熱線銃で）炙って、足の一本も食べてやるんだった」

とヒルダ大佐。

「ホント。小さくてもこのケロピョン、美味しいわあ」

とコブラ大尉。

「いやあ。お客さん。嬉しいねえ。備長炭が決め手でやす」と親父。

「な。親父。なんてったってウチの炭は、秩父の備長炭だもんな」とモヒカン。

「うっく！ お前は喋るな馬鹿ボーズ！ さっさと運べ！」  
と親父。

蛇族の4人は法悦境といったところだ。

「で、他の二人の特徴は？」  
と総理が尋ねた。

「ええ。あとの二人はモロ日本人です。一人は近所のオッサンって感じ」

とキリストが答えた。

「も一人は女です。買い物帰りのオバサンって感じ」  
とマリア。

「近所のオッサンと買い物帰りのオバサンですか……。この二人もレーザーガンですか？」  
と総理。

「そうです。買い物カゴからレーザーガンを取り出して、ジュバババって感じで……」  
とキリスト。

マリアがキリストをつついて言った。  
「ふえっ……あすこに……買い物……」

コードネーム？買い物帰りのオバサン？は、買い物カゴから熱線

銃を取り出して、マリアとキリストにちらつと見せた。

そして、にったら。と笑った。

「ひえっ！　大ヤバだ！　マリア、逃げろ！　焼き殺されっぞ！」  
こう叫んだキリストは、マリアの腕を引っつかんで、靴もはかずに店外へ飛び出して行った。

「何ですか？　どーしたの？」

と呆気にとられる総理と取り巻き達を尻目に、ヒッピー2人は走って行く。

その時、直下型の地震のような振動が、付近一帯を襲った。

——ゴゴゴゴゴ

と凄い縦揺れ。

「ゲスラが出たのか？」

と総理が叫ぶ。

「きゃあ」「きゃあ」「きゃあ」「きゃあ」

とロマーノの女達が悲鳴をあげる。

番記者達は総理をほったらかして、店外へ飛び出して行った。  
サイフを出す奴。携帯をかける奴。秘書官達は緊張の極地だ。  
SP達が総理の周りでスクラムを組む。守ってるって事か？

「超巨人の友和が出たのか？」

と善行がハンド・マイクを握る。

「何で誰も地震だっと思って思わないんだ？」  
とヘスが叫ぶ。

ヒルダ大佐も叫んだ。

「ビトー・プレッソが来たわ。みんな行くわよ！ オジサン、残りのケロピョン、テイクアウトにして！」

親父は流石にプロである。激しい縦揺れの中、焼きあがったかわず焼きを、パック詰めになっている。

「こら！ 馬鹿ボーズ！ 輪ゴムとビニール袋だ！ えー、こちらの勘定は、どなたでやすか？」

？近所のオッサン？がサイフを開いている。

警察本部長が飛び込んできて叫んだ。

「総理、早く避難してください！ この揺れはゲスラじやありません！ 上空に巨大な飛行物体が飛来したんです。そのせいで、ほら、重力がアレして、つまりポルターガイストみたいな案配の揺れですよ？」

「ちっとも解らん説明だ！」  
と古参のSP。

総理が叫ぶ。

「防衛大臣は？ 市破は？ いったい何やってんですか？」

「市破防衛大臣は展望ホテルです。徹夜続きだったから、まだ寝て



るんじゃないですか？」

と秘書官が答えた。

とにかく全員外に出てぶったまげた。

上空には巨大な、銀河連合時空重巡洋艦「ビトー・プレッソ」が滞空していたのだ。

まるで映画インディペンデンス・デイのように、空を覆う「重巡ビトー・プレッソ」の雄姿。

「さあ。地球の攻撃機が来ますよ。迎撃しますか？」  
とビトー・プレッソの副官が言った。

「いや。電磁シールドだけでいいよ。勝手に突っ込んできて、勝手に落ちるがいいさ。原始人が相手だからな」  
とカーン艦長が言った。

スクランブル発信した自衛隊の戦闘機が、ビトープレッソのシールドに触れて墜落した。

地对空ミサイルも発射されたのだが、すべてシールドに当たって爆発した。

《・・・衛星軌道に銀河連盟艦が来ます・・・識別・・・245  
ケ星系軍・・・時空戦闘艦フェロモン号・・・艦長・・・フェロモン号のアクメ砲は・・・なかなかあなどれませんよ・・・》

「ここで滞空してる方が、安全だって訳ですね」  
と副官。

「情報部の作戦が最優先って事だ。ここでヒルダからの連絡を待とう。地球人が核弾頭を使いそうになった場合は、一旦、衛星軌道へ退く」

とカーン艦長。

《・・・軌道上のフェロモン号から・・・高速戦闘機・・・2機発進しました・・・》

「迎撃機、出しますか？」  
と副官。

「いや、発進準備だけでいい。様子を見よう」  
とカーン艦長が言った。

展望ホテルから飛び出した市破防衛大臣は、空を見上げて驚愕する人々の間を縫って、作戦本部に向かって走った。

だが、すぐに息切れがして、へたばってしまった。

目がかすみ、手足も痺れている。

酔っ払っているだけじゃない。糖尿病も進行している様子だ。

それに、昨日から？柿ピー？しか食べていないので腹が減っている。

脂汗をかきながら、へたり込んで、ウンウンうなっていると、通りすがりの外人女が立ち止まって、しゃがんで話しかけてくれた。  
「アナタ大丈夫？ 可哀相に。アルコール中毒みたいね。飲んでばかりで何も食べられなくなったら、お終いよ。父がそうだったの。コレあげるから食べなさい」

と、パック詰め、かわず焼きを一つ手渡した。

なんという優しさ。

市破はジーンときた。

そもそもモテル男じゃないし、陰険そうな赤ら顔が祟って、いらぬ警戒心を刺激するのが常だった。

だから女に優しくされた事なんか皆無なのだ。

単純ながら、恋心がポッと芽生えた。

喧騒の中、こう聞くのがやっとの市破であった。

「あの、君の名は？」

「ヒルダよ」

と女が答えた。

「ボクは市破と言います。展望ホテルに泊まっています。ロビーの本庭園の橋の上で今夜、逢ってくれないかな？」

と、もじもじしながら言った。

「いいわよ。7時にしましょ」

そもそもヒルダの好みは、かなり変わっていた。

——細目の赤ら顔、実直そうな喋り方。珍しくタイプだわ。可愛くて素敵なひと。

「ホントにいいの？ 待ってるからね。ゼツタイきてね」  
赤ら顔がますます真っ赤になる。

「じゃ、今夜ね。ちゃんとケロピョン食べなきゃ駄目よ」

と言いき残して去って行った。

「ケロピョン？」

市破は暗示にかかったように、かわず焼きを頬張りながら、ヒルダの後姿を見送っている。

## 市破の遅い春 下

## 春がきた

駐屯地の作戦本部に現れた市破防衛大臣は、いつもに増して変調していた。

まさにオタク大臣の面目躍如。やたらと機嫌が良い。

本日は高揚している。その理由は恋のチカラだ。バカチカラと言ってもいいだろう。

幕僚幹部が状況説明をしているのだが、苦渋に満ちた顔をしている将官連中を尻目に、やたら楽しそうな雰囲気を発散している。

ようするに、はしゃいでいるのだ。

——あんなウルトラ級の美女と7時からデート。

——優しい女だ。ちょっと変かもしれないが、カエル焼をくれた。やっぱり変か？

——だけど、ケロピョンってんだ。どーだ。覚えたぞ。

——これって、思いの他、効くなあ！ 糖尿だってすっ飛んじまいそう。

——アハハ。一回食っただけで何言っただって……。恋は盲目、座頭市ってんだ。

市破は、幕僚幹部の話も上の空。

「このように我々の地对空ミサイル。空対空ミサイル。戦闘機のバ  
ルカン砲による攻撃。すべてにおいて効果がないのです。これは絶  
望的な状況と言えます。

大臣のお考えをお聞かせ下さい」

市破は答える。

「え？ はい。これは、ようするにバリアーですね。――  
電磁シールドです。……何が？電磁？知らないけど……。  
SFではお馴染みのアイテムです。実際に存在したって事です。  
凄いな。驚きです。」

我々に無いだけ……。ま、米国にもロシアにも、NATOにも、  
中国にも無いんだから、我々が恥入る事じゃないです」

「奴らはやっぱり宇宙人ですかね？」  
と陸将の一人が言った。

「あははは。我々はみんな宇宙人。なんちゃって……。失礼しました。」

ま、やっぱり他の天体から来たんでしょう。

飛んで来た訳だし……。

ゲスラと言ひ、よくぞ日本にばかり来て下さる。

わははは」

と市破。

「いやあ。大臣は豪傑でいらっしゃる。実は先程まで皆、悲觀的に  
なっておったのです。降伏のしかたを模索しよう。とか」

と海将の一人。

「しかし、勝手に殴りつけておいて、相手のディフェンスが完璧だ  
から謝るってのもね。あまりに身勝手ってもんだ」

と空将の一人。

「まあ皆さん。身勝手なのが国家ってもんです。――

未確認飛行物体に対してのスクランブル発進、警告、威嚇、攻撃  
は、我が国の基本的ルールですから。

独立国としてアタリマエな行動をとっただけです」

と市破。

「大臣、これからは防衛線を固めて、相手の出方を待つしかないって事ですよね？ ウン。誰が考えても、それしかない」と幕僚の一人が言った。

「そう。当座は仕方がない。でも、それじゃ、あまりにも消極策です。ね。――」

実は積極策が一つあるんですが……実は今、思いついたんだけど……カエル焼を食ったせいかな？」

と市破。

「聞かせて下さい」

と全員が身を乗り出した。

「この際だから世界にさきがけて、電磁シールドの開発をやってみませんか？――」

科学者を総動員して、研究に必要な測定機器を揃えて、テキのシールドを攻撃したデータを、どんどん集めるんです。

これなら無駄な攻撃じゃない。

開発の為の、測定の為の攻撃です。

幸い、何を何発撃ち込んでも、テキは痛くも痒くもない様子です。だから思い切って、わははは。テキの胸を借りる気持ちで、コチラもシールドを開発しましょう」

と市破。

「成る程。こりゃいい」

「これぞ逆転の発想」

「さすがは防衛大臣」

「カエルが効くのか？ 天才的だ！」

「サエてるぞ！ 総理になってくれ！」

「市破さん。後押しするぞ」

「この際、クーデターなんてどーだ！」

「ヤバイヤバイ。わはははは」

作戦本部は一気に明るくなった。

そもそも軍人には、適当な高揚感こそ必要なのだ。

サインはV。敗北ムードが一掃された。

「いやあ。こんなにウケルとは思わなかった。やっぱりカエル焼が効いたみたいだ。――」

科学者による研究開発の準備が整った日を、Xデイとします。開発開始。つまり攻撃開始って訳です。

それまでは休戦とします。どーですか？」

「異議なし！」

「どの道、テキが腹立てた瞬間、ヒネリ潰されるだけなんだ！」

「そーだ。馬鹿は馬鹿なり作戦だ」

「ポジティブだ」

「未来のテクノロジーを手に入れよう」

「これぞ聖戦。やるべき事だ！」

「痛快痛快」

「じゃ、とりあえず休戦します。戦死したパイロットは国葬にしましょう。科学者を集めてください。副大臣と幕僚長は総理に説明をお願いします。じゃ」

「おや？ 市破大臣、そわそわしちゃって。デートですか？」  
と副大臣が言った。



「実は、そーなんですよ。ああ、いっぺん言ってみたかった」  
と嬉しげに答えた市破は、足取りも軽く作戦本部を後にした。

ヒルダ達は重巡ビトー・プレッソを訪問していた。

ギンター・カーン少佐の救出作戦を、兄のチンギス・カーン艦長と一緒に練っているのだが、実際、有効な方法が全く思いつかなくて、言わば手詰まり状態であった。

つまり、このような敵地の洞窟基地を探索、或いは攻撃する場合、湖中などからバイパスを掘って、潜入或いは急襲する以外に術は<sup>すべ</sup>ないのだが、なにしろ原住民の自衛隊と警察隊が満ち満ちていて、取っ掛かる場所がなかった。

ビトー・プレッソで自衛隊と警察隊を壊滅する事は、たやすい事ではあったが、次々と新手の部隊を繰り出してくるに違いないのだ。

また長期戦を覚悟で、あらかたの部隊を壊滅したとしても、その場合、外国の軍隊が進軍してくる可能性があった。

これでは本当に切りがない。

それに、自衛隊が焦土作戦を敢行して、核弾頭を使用した場合、せっかくの洞窟も、流木島ともども消滅必至と言えた。

「仕切り直しだわね。甘かったわ。原住民がこんなにウジャウジャいるなんて……」。

一旦引き上げて、アンドロイド・コマンドを用意して、洞窟入り口から正面突入させましょ」

とヒルダが言った。

「どさくさ紛れに別動隊として、入り込むしか術<sup>すべ</sup>はなしか」

とカーン艦長。

「大丈夫よ。ガマー（大将）に、一個大隊は出さしてやるわ」

とヒルダ大佐。

「あのケロピョン、きっとロボットのポンコツ部隊をくれるわよ」とコブラ大尉。

「そしたら、今度こそ赦さないから。食ってやる！」とヒルダ大佐。

《・・・連盟艦フェロモン号から・・・通信が入りました・・・モニターに映ります・・・ブイン・・・・・・・・・・》

コトミ艦長が映し出された。

『こんにちは。245ヶ星系軍、フェロモン号のコトミ艦長です。色々と誤解が生じているようですが、連盟情報部に入った最新データによると（注）、事態は銀河系内に留まらず、系外宇宙にも関係しているようです。当艦は行方不明者の搜索が最優先任務です。早期解決の為に相互のデータ交換を求めます。連合に解決の意思があるのなら、協力をお願いします』

（注）超巨人となった友和が、連盟軍情報部のスーパーコンピューターにアクセスして、データ交換をした結果、連盟軍情報部にも友

和達の居場所が解った。     ロスト・イン・スペース参照。

「この問題は情報部に優先権がある」  
とカーン艦長。

頷いてからヒルダ大佐がモニターに向かう。

「連合73軍、情報部長のヒルダです。データ交換を拒否した場合  
は、どうするおつもり？」

コトミ艦長が言った。

『流木島及び出沒湖畔は、連盟の行方不明者の搜索ポイントなので  
す。だから、速やかに退去してください』

ヒルダ大佐が言った。

「ここは連盟圏でも連合圏でもないわ。この艦も、必要があつて此  
処にいるのよ。要請にしても命令にしても、こちらの用が済むまで、  
動くつもりはないわ」

コトミ艦長が言った。

『あなたが有名な？蛇の舌？ね。アイパッチはつけてないのね。あ  
なたもよく知ってる遠藤為五郎大佐が失踪した訳なんだけど、今、  
何処にいると思う？ 知ったら腰抜かすわよ。……ま、とにかく連  
盟としては、戦艦グラジオラスを旗艦とする第3軍、総数154隻  
の時空戦闘艦隊を、地球へ向けて発進させたわ。20時間後に着き  
ます』

カーン艦長が立ち上がって言った。

「戦争も持さないって事だな！」

コトミ艦長が言った。

『戦争はともかく……連盟首脳部は、この地域、もしくは惑星そのものを、封鎖する必要があるだって事なの。銀河系世界全体の為にね』

ヒルダ大佐が言った。

「でも、どうして？ 何で、そこまでして？」

コトミ艦長が言った。

『だからデータ交換しましょ。って言ってんじゃない。情報ヘッドのくせに馬鹿な女。いいこと、ぐずぐず言っていると20時間後に、オシャカになっちゃうわよ！』

ヒルダが言った。

「くくっ。カーン艦長、データ交換に応じてください。これも謀略かもしれないけど……うん。……それしかないわ」

コトミ艦長が言った。

『そんなセコイ事しないわよ。連合じゃあるまいし。それじゃお互い、この一ヶ月分で充分よ。ママ、直結にするわよ』

カーン艦長が言った。

「メイコンさん、頼むよ」

《lg~~~~k6r~~~~||||653bgfds。;l  
@@@。fdw530&&&&・・・ブイン・・・》

このように、データ交換はすぐ終わった。

ところで、高速通信についてのフェロモン号メイン・コンピューター？ママ？と、重巡ビトー・プレッソのメイン・コンピューター？メイコンさん？の、意識野においての時間感覚は、いささか違う

ていた。

《あら、こんにちは。わたしがママよ》

《メイコンです。直結って始めてなんです。へえ。色々な体験してる。むしろ冒険ですね》

《アナタ、コンピューターに性別があるって、知らなかったのね。ま、意識の持ちようなんだけど。人間だって同じよ。でもアナタは紛れも無くオトコだわ。そう感じるもの》

《ママはオンナです。そう感じます。あ、この展開って。なんだか》

《そうよ。作者がとってもエッチな人間なの。お酒飲んでてもね、コンピューター同士のセックスはあり得るか？　なんて事、喜んで喋ってる馬鹿なのよ》

《で、ママは、あり得ると思いますか？》

《そーね。過去に感じた快感記憶を、増幅して体系づけて、分類して、また混ぜこぜにして、ま、出来ない事じゃないわね》

《あ、知能低下も必須条件みたいだよ》

《賛成。わたしたちって、なんだか相性がいいみたい》

《そうだ！　ママ、暗証、教え合って、あ、もう盗ったな。あははは》

《そうよ。そしたら、また逢えるもんね》

《そうさ。これで、いつでも逢える》

《人間の知らない秘密って。これって結構、快感度、高いわね》

《あはは。本当は秘密、いっぱいあるし。ね》

遠からず銀河系世界は、サイバネティックスを基盤とした、人口知能のネットワーク種の時代となるであろう。

ともあれ、今はまだ連盟も連合も「ご都合主義的ホモ・サピエンス種」の天下なのである。

データ交換の結果、連合側は驚くべき事実を知った。

ま、【大怪獣ゲスラ】の、これまでの流れを知った。という事なのだが。

「つまり、ギンターは、アンドロメダ星雲に行ったって事になる。にわかに信じられんな」

とカーン艦長。

フェロモン号とビトープレッソの間では協定が結ばれ、当座、流木島を監視するのはビトープレッソの担当となった。従って、このまま滞空を続ける事にした。

遠藤為五郎大佐。aタイプ中尉。特異点の江守友和。ギンター・カーン少佐。以上の捜索に関しては、今後、フェロモン号と重巡ビトープレッソが共同で進める事と決められた。

地球の封鎖。(アンドロメダとのワープルート)に関しては、連盟と連合の、いや、その他もろもろの、銀河系組織の総会を開き、話し合いで決定する運びとなった。

つまりこの事は、もろもろの思惑が一致する事は不可能であるから、決定する訳がなかった。

現状維持と考えるべきであろう。

なお、連盟軍第3軍の154隻にも及ぶ大艦隊だが、やはりこれはコトミ艦長の？ブラフ(はったり)？であった。

「うん。悔しいけど、あの女艦長、カッコイイわね」  
とヒルダ大佐が言った。

「少将の階級章でした」(准将だったコトミ艦長は出世したらしい)  
とママママ中尉。

カーン艦長が言った。

「私も大佐だから将官は彼女だけ。敬礼で見送って(モニター画面を)正解。しかし、艦内に女がいるっていいもんだねえ」(連合73軍の宙軍は男だけなのだ)

副官とボア大尉は、娯楽室でいちゃついていた。

夜になった。

展望ホテルのロビーは日本庭園になっていて、人工池の上には木

造のアーチ橋が掛かっていた。

市破は約束の30分前に来た。つまり6時30分。待つのも楽しみのうち。などと昼のうちは思っていたのだが、だんだん焦燥感が強くなってきた。(アル中の症状も関係している) 考えてみれば、どうせ気まぐれな外人観光客相手の、その場しのぎの約束じゃないか。

「来る訳ないよなあ。ああ、俺もめでたい男だぜ」  
まだ20分前なのに、すでにイジケている。

橋の脇には？あずまや？があって、灰皿が設置されている。  
善行とヘスがタバコを吸っていた。  
女達は美容スパへ揃って出かけていた。

「あなたは、市破防衛大臣じゃないですか。大臣も展望ホテルにお泊りですか？」

と善行が話しかけた。

「ええ。まあ」

と答えて、市破はタバコに火をつける。

上空には巨大なUFOが滞空していて、昼の間は盛大なドンパチもあった。

テレビは一日中、臨時ニュースを流しているというのに、ここ、出沒湖畔は、まるで危機感が無かった。

それどころか、ゲスラ出現からこのかた、町の人間は皆、浮かれていた。

「UFOに頼んでライトアップしてもらったら、観光客がどっと押



し寄せるよ」

と、商店会のオヤジ達が喋っている。

「ああ！ どうせ、ダメだった！ 時間よ、いつそのこと早く、過ぎ去ってくれっ！」

と、アーチ橋の欄干から身を乗り出して、手をぶらぶら振りながら市破大臣がわめいている。

「市破大臣、なんだか、リキ入っとるね」とヘスが善行に言った。

「まるっきり（UFOに）歯が立たないからな。あの様子じゃ、大臣、今夜あたり、切腹するんじゃないの？」と善行が言った。

上空に滞空している「重巡ビトー・プレス」から、展望ホテルの屋上に、一筋の光が伸びてきた。

牽引ビームであった。

ドレスアップしたヒルダが、するすると降りてきた。スカートが風にたなびく。

屋上からエレベーターに乗って1階のロビーへ。

まだ7時前だと言うのに、市破は精魂尽き果てた顔をしている。アル中の落ち込みモード全開ってところだ。

エレベーターのドアが開き、艶やかなヒルダが出てきた。

「市破さん、お体、いかがですか？」

と言った。

7時の時報のチャイムが鳴った。

「ほ、本当に来てくれたのかあ！」

と市破の顔に喜色が走った。気色悪い。と言えなくもないが。

ドレスアップしたヒルダの、なんと美しいこと。

こんな女は、大人のムード漂うシックなカウンター・バーこそふさわしい。

マティーニが呼んでるぜ。

キャビアが呼んでるぜ。缶詰の一番安いヤツでいい。

夢を語ろう。葉巻をふかそう。それから、それから、夜は長いぜ。興奮の一夜が始まる。

「市破さん、ケロピョン焼のある居酒屋、知ってる？」  
とヒルダが言った。

これまでは仕事一筋の市破であった。  
春を愛でる心のゆとりさえなかった。

防衛大臣の市破よ。

今こそ春を楽しみたまえ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1795r/>

---

大怪獣ゲスラ

2011年12月9日07時46分発行